

福岡市埋蔵文化財調査報告書第597集

那 珂 22

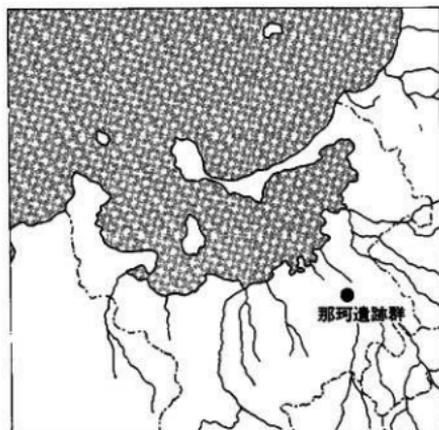
—那珂遺跡群第62・63・65次調査報告—

1999

福岡市教育委員会

那珂 22

—那珂遺跡群第62・63・65次調査報告—



那珂62次

遺跡略号 NAK-62

遺跡調査番号 9711

那珂63次

遺跡略号 NAK-63

遺跡調査番号 9724

那珂65次

遺跡略号 NAK-65

遺跡調査番号 9770

1999

福岡市教育委員会



巻頭写真1 62次 SX028 (北から)



巻頭写真2 63次調査区全景 (南から)

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では開発事業にともない、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めているところであります。

本報告による那珂遺跡群 62・63・65 次調査では多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成 11 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会

教 育 長 町 田 英 俊

例 言

1. 本書は平成9年度（1997年度）に福岡市教育委員会が実施した那珂遺跡群第62次・63次・65次調査の発掘調査報告書である。各調査地点の所在地は下表によられたい。
2. 遺構の実測は62次・65次調査を長家伸、63次調査を榎本義嗣が行った。
3. 遺物の実測は62次・65次調査を長家・久住猛雄・林山憲三、63次調査を榎本が行った。
4. 製図は62次・65次調査を長家、山野妙子、63次調査を榎本が行った。
5. 写真は62次・65次調査を長家、63次調査を榎本が撮影した。
6. 遺構番号は各調査毎に通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は掘立柱建物（SB）・竪穴住居跡（SC）・土坑（SK）・溝（SD）・方形周溝墓（SX）・甕棺墓（K）・土坑墓／木棺墓（SR）・ピット（SP）である。
7. 遺物番号は各調査毎に通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21′西偏する。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本書の執筆・編集は長家・榎本が行い、62次調査小結の項に関連報告として那珂八幡古墳出土遺物の紹介を行い、これを久住が執筆した。

那珂遺跡群第62次調査

遺跡調査番号	9711		遺跡略号	NAK-62	
調査地地籍	博多区那珂1丁目838-1・839-1		分布地図番号	23-0085	
開発面積	1,076㎡	調査対象面積	1,076㎡	調査面積	1,005㎡
調査期間	平成9年5月6日～平成9年7月18日		事前審査番号	9-2-16	

那珂遺跡群第63次調査

遺跡調査番号	9724		遺跡略号	NAK-63	
調査地地籍	博多区那珂1丁目792-1		分布地図番号	23-0085	
開発面積	772.99㎡	調査対象面積	225.0㎡	調査面積	214.0㎡
調査期間	平成9年6月30日～平成9年7月31日		事前審査番号	9-2-82	

那珂遺跡群第65次調査

遺跡調査番号	9770		遺跡略号	NAK-65	
調査地地籍	博多区竹下5丁目59-3		分布地図番号	38-0085	
開発面積	147.88㎡	調査対象面積	147.88㎡	調査面積	95㎡
調査期間	平成10年2月12日～平成10年2月18日		事前審査番号	9-2-456	

那珂遺跡群第62次調査報告

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査体制	1
II	調査の記録	5
1.	調査概要	5
2.	遺構と遺物	5
	掘立柱建物	5
	竪穴住居跡	7
	土坑	28
	溝	30
	方形周溝墓	41
	甕棺墓	54
	土坑墓	56
3.	小結	56

挿図目次

第1図	調査地点位置図 (1/50,000)	2
第2図	調査区位置図1 (1/2,500)	3
第3図	調査区位置図2 (1/1,000)	4
第4図	調査区全体図 (1/200)	6
第5図	掘立柱建物・竪穴住居跡・土坑配置図 (1/300)	7
第6図	掘立柱建物配置図 (1/60)	8
第7図	掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)	8
第8図	掘立柱建物実測図 (1/60)	9
第9図	SC006 実測図 (1/100)	10
第10図	SC006-1 実測図 (1/60)	10
第11図	SC006-2 実測図 (1/60)	11
第12図	SC006-3・4 実測図 (1/60)	12
第13図	SC006 出土遺物実測図 (1/2,1/3)	13
第14図	SC007・008・010・011・012・013 実測図 (1/60,1/30)	14
第15図	SC007・008・010・013 出土遺物実測図 (1/2,1/3)	15
第16図	SC015 実測図 (1/60,1/30)	16
第17図	SC015 出土遺物実測図 (1/3)	17
第18図	SC017 実測図 (1/60)	18
第19図	SC020・021・022 実測図 (1/60,1/30)	19
第20図	SC017・020・022 出土遺物実測図 (1/2,1/3)	20
第21図	SC025・029 実測図 (1/60)	21
第22図	SC025 出土遺物実測図1 (1/3)	22
第23図	SC025 出土遺物実測図2 (1/3)	23
第24図	SC025 出土遺物実測図3 (1/2,1/3)	24
第25図	SC029 出土遺物実測図 (1/3)	25
第26図	SC035・036・038・044 実測図 (1/60)	26

第27図	SC035・038・044 出土遺物実測図 (1/3)	27
第28図	SK014・037・041・045 実測図 (1/30)	28
第29図	SK014・037・041 出土遺物実測図 (1/2,1/3)	29
第30図	溝・方形周溝墓・埴輪窯・土坑墓配置図 (1/300)	30
第31図	SD009・SX001 土層図 (1/40)	31
第32図	SD009 出土遺物実測図 1 (1/2,1/3)	32
第33図	SD026 実測図 (1/40)	34
第34図	SD026 出土遺物実測図 1 (1/3,1/6)	35
第35図	SD026 出土遺物実測図 2 (1/2,1/3)	36
第36図	SD032 出土遺物実測図 1 (1/3)	37
第37図	SD032 出土遺物実測図 2 (1/3)	38
第38図	SD032 出土遺物実測図 3 (1/3)	39
第39図	SD033・040 出土遺物実測図 (1/3)	40
第40図	SD048 実測図 (1/40)	41
第41図	SX001 実測図 (1/150)	42
第42図	SX001 出土遺物実測図 (1/3)	42
第43図	SX028 実測図 (1/150)	43
第44図	SX028 周溝内ヒット実測図 (1/30)	44
第45図	SX028(1)・SD024土層図 (1/40)	46
第46図	SX028(2)・SD032・SD033土層図 (1/40,1/50)	47
第47図	SX028 下層出土遺物実測図 1 (1/3)	48
第48図	SX028 下層出土遺物実測図 2 (1/3)	49
第49図	SX028 下層出土遺物実測図 3 (1/3)	50
第50図	SX028 下層出土遺物実測図 4 (1/3)	51
第51図	SX028 上層・上面出土遺物実測図 (1/2,1/3)	52
第52図	K046・047 実測図 (1/20)	53
第53図	K046・047 出土遺物実測図 (1/6)	54
第54図	SR034 実測図 (1/30)	55
第55図	SR034 出土遺物実測図 (1/2)	55
第56図	その他の遺物実測図 (1/2)	56
第57図	第62・63・19・32・34次調査時期別遺構変遷図 1 (1/800)	58
第58図	第62・63・19・32・34次調査時期別遺構変遷図 2 (1/800)	59
第59図	第62・63・19・32・34次調査時期別遺構変遷図 3 (1/800)	59
第60図	那珂八幡占墳出土遺物 (1/3,1/4)	60

写 真 目 次

写真1	作業風景	写真12	SC022 (南から)
写真2	調査区東半全景 (西から)	写真13	SC036 (南から)
写真3	調査区西半全景1 (北から)	写真14	SD009 土層 (B'-B)
写真4	調査区西半全景2 (北から)	写真15	SD009 土層 (C'-C)
写真5	掘立柱建物群 (北から)	写真16	SD009 土層 (D'-D')
写真6	SC006 (南から)	写真17	SD009 遺物出土状況
写真7	SC013 (南から)	写真18	SD024 上層 (I-I')
写真8	SC015 (東から)	写真19	SD026 (北から)
写真9	SC015電 (東から)	写真20	SD032 (北から)
写真10	SC017 (南から)	写真21	SD032・SD033・SX028 土層 (M-M')
写真11	SC021 (南から)	写真22	SD032・SR034 土層 (N-N')

写真23	SD048 (南から)	写真34	SP436 1-SX028周溝内-(北から)
写真24	SX001 土層 (F-F')	写真35	SP436 2-SX028周溝内-(東から)
写真25	SX001・SD009 土層 (E-E')	写真36	SP478 -SX028周溝内-(北から)
写真26	SX001・SD009 切り合い部分 (北東から)	写真37	SX028 東辺周溝 (北から)
写真27	SX001 遺物出土状況	写真38	SX028 北辺周溝 (東から)
写真28	SX028 土層 (G-G')	写真39	SX028 南辺周溝 (東から)
写真29	SX028・SD024土層 (I-I')	写真40	SX028 北辺周溝遺物出土状況
写真30	SX028 土層 (H-H')	写真41	K046 (西から)
写真31	SX028 土層 (K-K')	写真42	K047 (西から)
写真32	SX028・SD033土層 (O-O')	写真43	SR034 (南から)
写真33	SX028・SD033土層 (P-P')	写真44	出土遺物

那珂遺跡群第63次調査報告

本文目次

I	はじめに	69
1.	調査に至る経過	69
2.	調査体制	69
II	調査報告	71
1.	調査概要	71
2.	遺構と遺物	72
	溝 (SD)	72
	方形周溝墓 (SX)	79
	土墳墓 (SR)	81
	その他の遺物	83
3.	小結	83

挿図目次

第1図	第63次調査区位置図 (1/1,000)	70
第2図	第63次調査区全体図 (1/200)	71
第3図	SD001 土層実測図 (1/40)	72
第4図	SD001 出土遺物実測図 1 (1/3)	73
第5図	SD001 出土遺物実測図 2 (1/3、1/4)	74
第6図	SD001 出土遺物実測図 3 (1/3)	75
第7図	SD001 出土遺物実測図 4 (1/3)	76
第8図	SD001 出土遺物実測図 5 (1/3)	77
第9図	SD006 出土遺物実測図 (1/3)	78
第10図	SX002 実測図 (1/150)	78
第11図	SX002、SD006、SR007 土層実測図 (1/40)	79
第12図	SX002 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	80
第13図	SR007・008・009・010 実測図 (1/30)	82
第14図	SR008・009 出土遺物実測図 (1/2、1/3)	83
第15図	壁面出土遺物実測図 (1/3)	83

写 真 目 次

写真1	調査区周辺風景	写真9	SX002 (北から)
写真2	調査区全景 (南から)	写真10	SX002 土層 (南から)
写真3	調査区全景 (南から)	写真11	SX002 遺物出土状況 (北西から)
写真4	SD001 (北から)	写真12	SX002、SD006土層 (南から)
写真5	SD001 土層 (南から)	写真13	SR008 (東から)
写真6	SX002、SD006 (南から)	写真14	SR008 土層 (南から)
写真7	SX002、SD006 (北から)	写真15	調査区上空より那珂八幡古墳を望む(西から)
写真8	SX002 (南から)		

那珂遺跡群第65次調査報告

本 文 目 次

I	はじめに	87
1	調査に至る経過	87
2	調査体制	87
II	調査の記録	87
1	調査概要	87
2	遺構と遺物	89
	溝	89
	その他の遺物	89
3	小 結	89

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図 (1/1,000)	88
第2図	調査区全体図、SD01・02 断面図 (1/100,1/40)	90
第3図	出土遺物実測図 (1/3)	91

写 真 目 次

写真1	東半全景 (西から)	写真3	SD01 (南から)
写真2	西半全景 (東から)	写真4	SD01 土層

那珂遺跡群 第62次調査報告



写真1 作業風景

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成9年4月11日付けで廣田春枝氏より福岡市教育委員会宛に博多区那珂1丁目838-1・839-1の物件(計1,076㎡)に関しての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。(事前審査番号9-2-16)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群(分布地図番号23-0085・遺跡略号NAK)に含まれており、申請地北側に隣接する都市計画道路竹下駅前線建設時には発掘調査(第34次)が行われていた。このため埋蔵文化財課では平成9年4月11日に書類審査を行い、申請者に対して遺構が存在する旨を回答し(福市教理2-16号)、その取扱について協議を行った。この結果申請地全体で1m程度の地下げを行い遺構の破壊が避けられないため発掘調査を行い記録保存を図ることとした。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成9年度に発掘調査、平成10年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。

発掘調査は平成9年5月6日～平成9年7月18日の期間で行った(調査番号9711)。調査対象地は1,076㎡で、調査面積は1,005㎡である。また遺物はコンテナ68箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、申請者である廣田春枝様を始めとして関係者の皆様にはご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 廣田春枝

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝(前任) 柳田純孝(現任) 調査第2係長 山口謙治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美

調査担当 調査第2係 長家伸

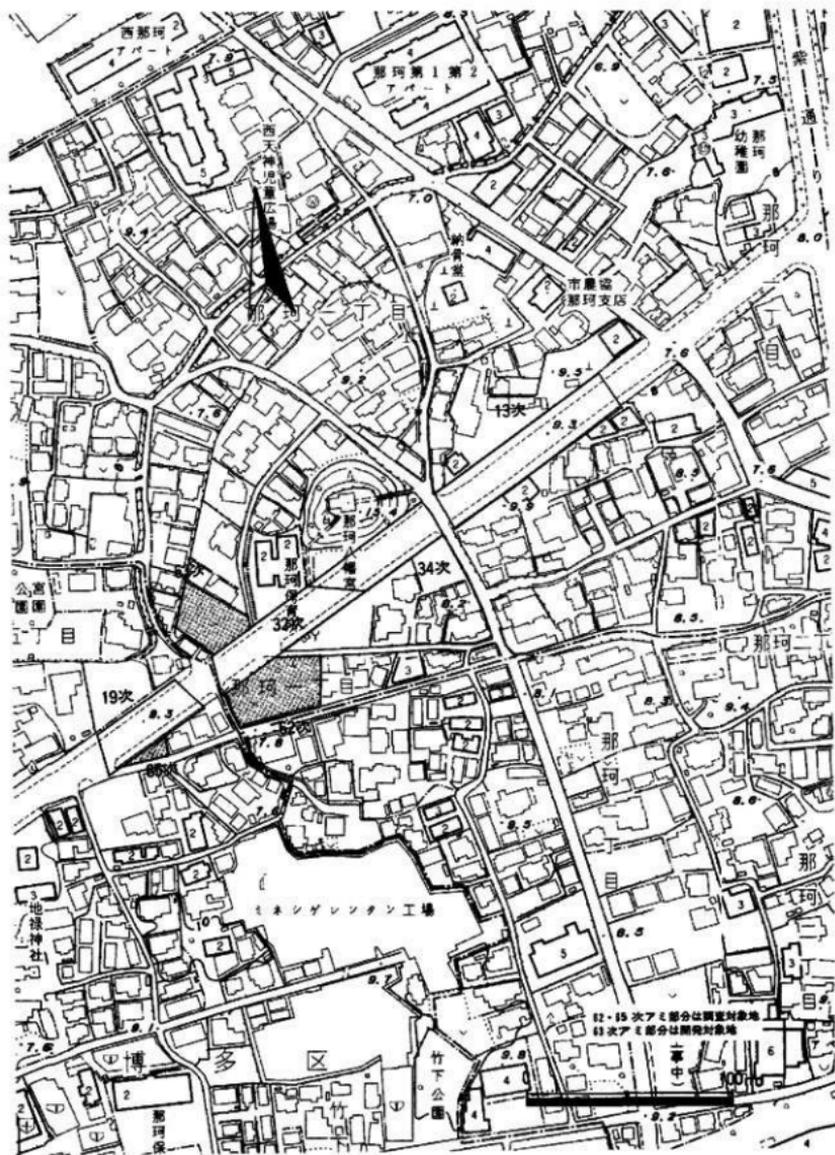
調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 小川博 村本義夫 安元尚子 小路丸嘉人 平本恵子

整理作業 永田優子 指原始子 花田則子 池聖子 大宮輝子 吉村智子 小池温子 中村幸子

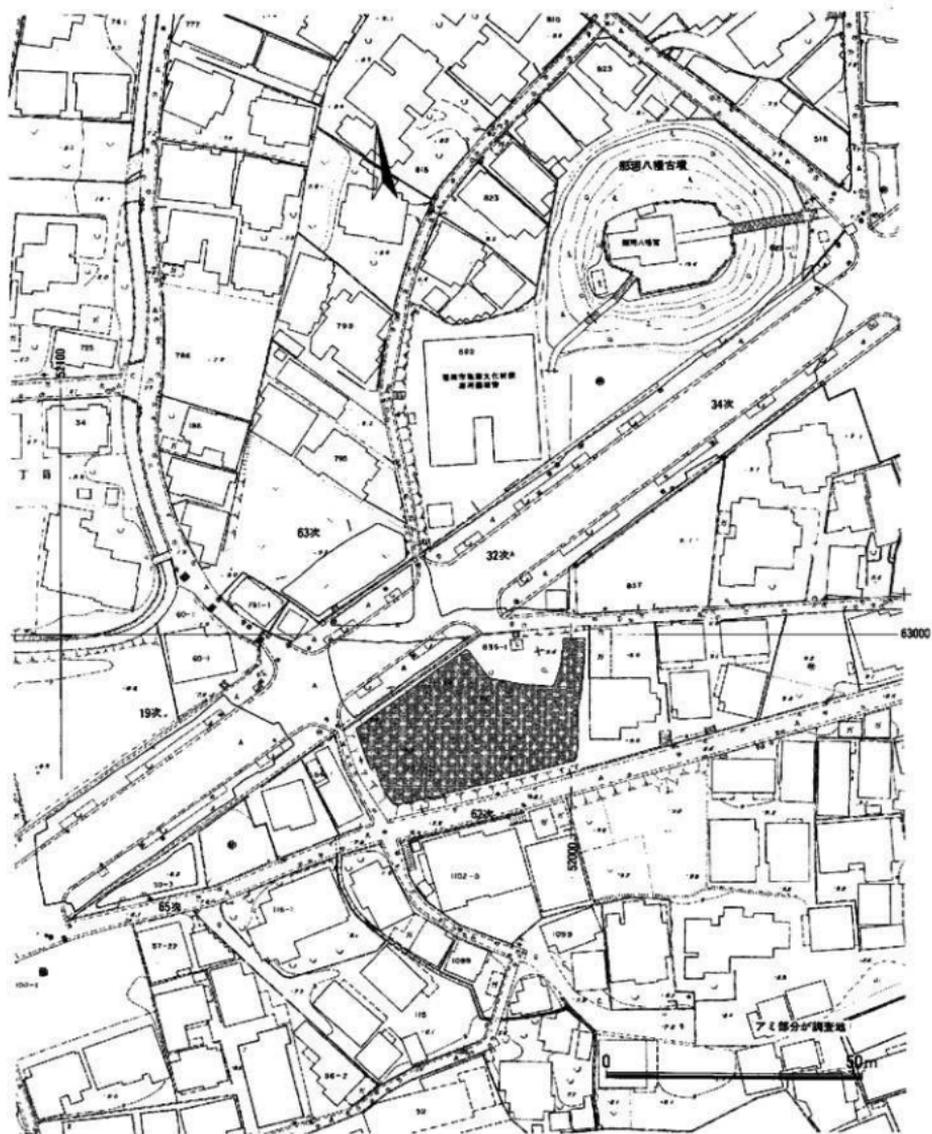
増田ゆかり 草場恵子 高津千尋 小路丸良江 山野妙子 野村道夫 楠林司朗

森田祐子 古賀典子 持丸玲子 鯉川ゆかり 石川洋子 坂本俊子 穴井加菜子

石谷香代子



第2図 調査区位置図1 (1/2,500)



第3図 調査区位置図2 (1/1,000)

II 調査の記録

1. 調査概要

前項でも述べたように申請地は都市計画道路竹下駅前線に面しており、調査以前は畑として利用されていた。那珂遺跡群の位置する洪積台地上は都市化による住宅の建設により地下げがすでに行われているが、申請地部分およびその周辺は削平が少なく旧状をよく残していると考えられる。なお那珂遺跡群の立地及び調査成果等については既刊の調査報告書に詳述されており今回は割愛する。

申請地は調査前で標高9.3mを測る平坦な畑地である。調査は重機による表土除去から開始した。なお調査区内で土砂を反転させる必要性からまず東半部分の調査を行い、東半部調査終了後引き続き反転し西半部分の調査を行うこととした。遺構は耕作土除去直下の鳥栖ローム上面で検出した。遺構面標高は東側で9.2m、西端で8.9mを測り、緩やかに西側に傾斜しているが、全体にはほぼ平坦である。検出遺構は方形周溝墓・変棺墓・土坑墓・獨立柱建物・竪穴住居跡・溝・土坑・ピットである。時期的には弥生時代後期～中世迄の遺構が存在するが主体を占めるのは古墳時代前期・後期の遺構群である。調査区東半は南北に延びる溝2条(SD009・024)と古墳時代後期に位置づけられる竪穴住居跡が密度濃く切り合い、南東隅に方形周溝墓の一部とも考えられる溝(SX001)が確認される。西半部分は方形周溝墓(SX028)をほぼ完掘し、区画内には盛土が存在していたと考えられ遺構はほとんどない。またSX028の西側には古墳時代後期～古代に属し南北に延びる溝3条を検出している。

遺物はコンテナ68箱分出土しているが、主体は古墳時代前期及び後期に位置づけられるもので全体の8割程度を占める。弥生時代に位置づけられる遺物は古墳時代の遺構に混入する形で出土するが、量的にも非常に少ない事は注目される。またこれに関連して黒曜石に代表される石製品もほとんど出土していない。

2. 遺構と遺物

獨立柱建物 (SB)

3棟確認しているがSB051の南側に更に1棟建物が並ぶ可能性があり(SB052)これを含めると4棟となる。いずれも調査区南西隅でSX028周溝埋没後に建てられている。SB049→SB050は建て替えと考えられるが、これとSB051・052は方位を揃えており関連をもった遺構の可能性もある。

SB049 (第8図)

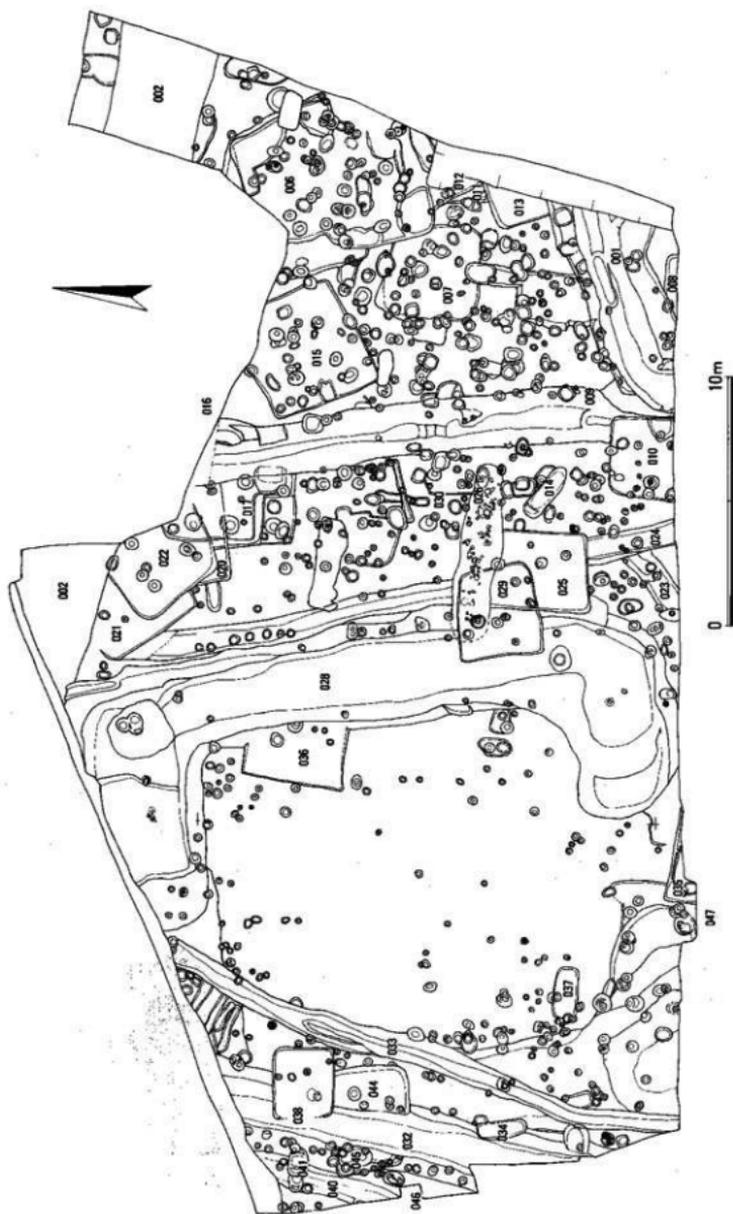
南部分を調査区外に延ばす建物でSB050に切られる。重複状態から建て替えが行われたものと考えられる。主軸をN-3°-Wにとる。梁行2間(3m)、桁行2間以上(1間1.5m)を測る。柱穴は径50cmの円形で現状での深さは70cm程度である。土師器細片が出土するのみである。

SB050 (第8図)

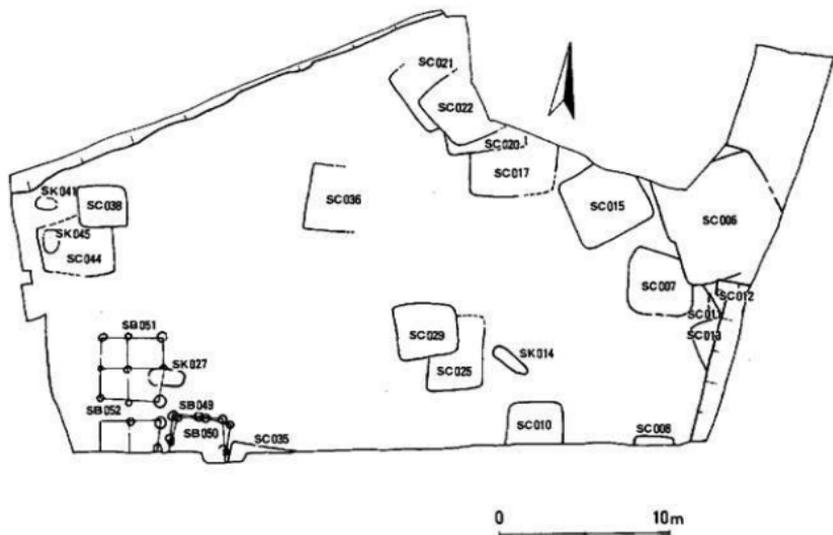
南部分を調査区外に延ばす建物でSB049を切る。主軸はSB049より東に振れ、N-9°-Eにとる。建物規模はSB049とほぼ同様で梁行2間(3.2m)、桁行2間以上(1間1.6m)を測る。柱穴は径50cmの円形で現状での深さは70cm程度である。また痕跡から柱径は15cm程度と考えられる。土師器細片が出土するのみである。

SB051 (第8図)

SB049・050の西側に位置する2間×2間の総柱建物である。主軸はSB049とほぼ同じで、N-5°-Wにとる。建物の柱筋は通らないが位置的に関連する建物群であろう。土師器変・寛、須恵器の小破片



第4图 调查区全体图 (1/200)



第5図 掘立柱建物・竪穴住居跡・土坑配置図 (1/300)

が出土する。

出土遺物 (第7図1)

1はSP467出土の須恵器坏蓋の小破片である。胎土は精良で焼成は堅緻である。

SB052 (第8図)

SB051の南側に並ぶ同形の総柱建物であると考えられる。SX028埋土との区別が付かなかったため柱穴3基のみの検出に止まっているが、SB051と柱筋も通り同形の建物の存在が想定できる。土師器・須恵器の小破片が出土する。

出土遺物 (第7図2・3)

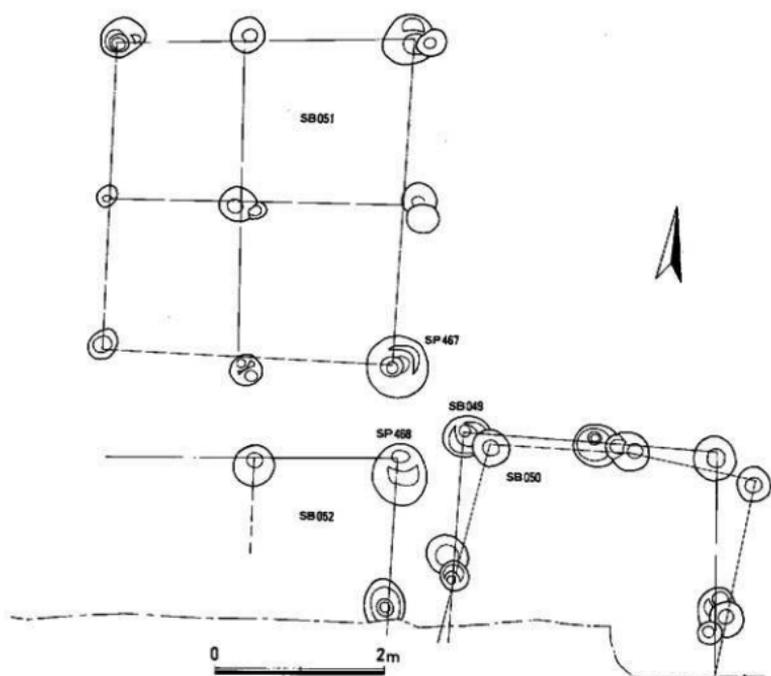
2は移動式竈の底部分である。赤褐色を呈し胎土には径1～2mmの砂粒を多く含む。2は須恵器坏身である。立ち上がりは低く内傾する。

竪穴住居跡 (SC)

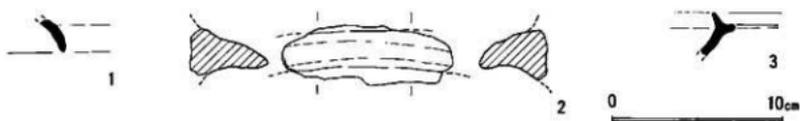
竪穴住居跡は21棟確認している。大半が古墳時代後期に位置づけられるもので、調査区東半部分に偏って検出されている。西半部分検出のものはSX028構築以前のものが1棟、周溝埋没後のものが3棟確認されるのみである。

SC006 (第9～12図)

調査区東端で検出する。検出時から複数の竪穴住居跡の切り合いがあると考えられ掘り下げを行ったが埋土も浅く切り合い不明のまま全体を掘り下げてしまい、掘削後に竈の痕跡及び主柱穴等から4棟の竪穴住居跡を復元しそれぞれをSC006-1・2・3・4とした。遺物には土師器甕、須恵器蓋坏・高坏・甕、瓦破片、滑石製紡錘車が出土している。竈等の存在からいずれの住居跡も7世紀初頭～前半に位置づけられる。

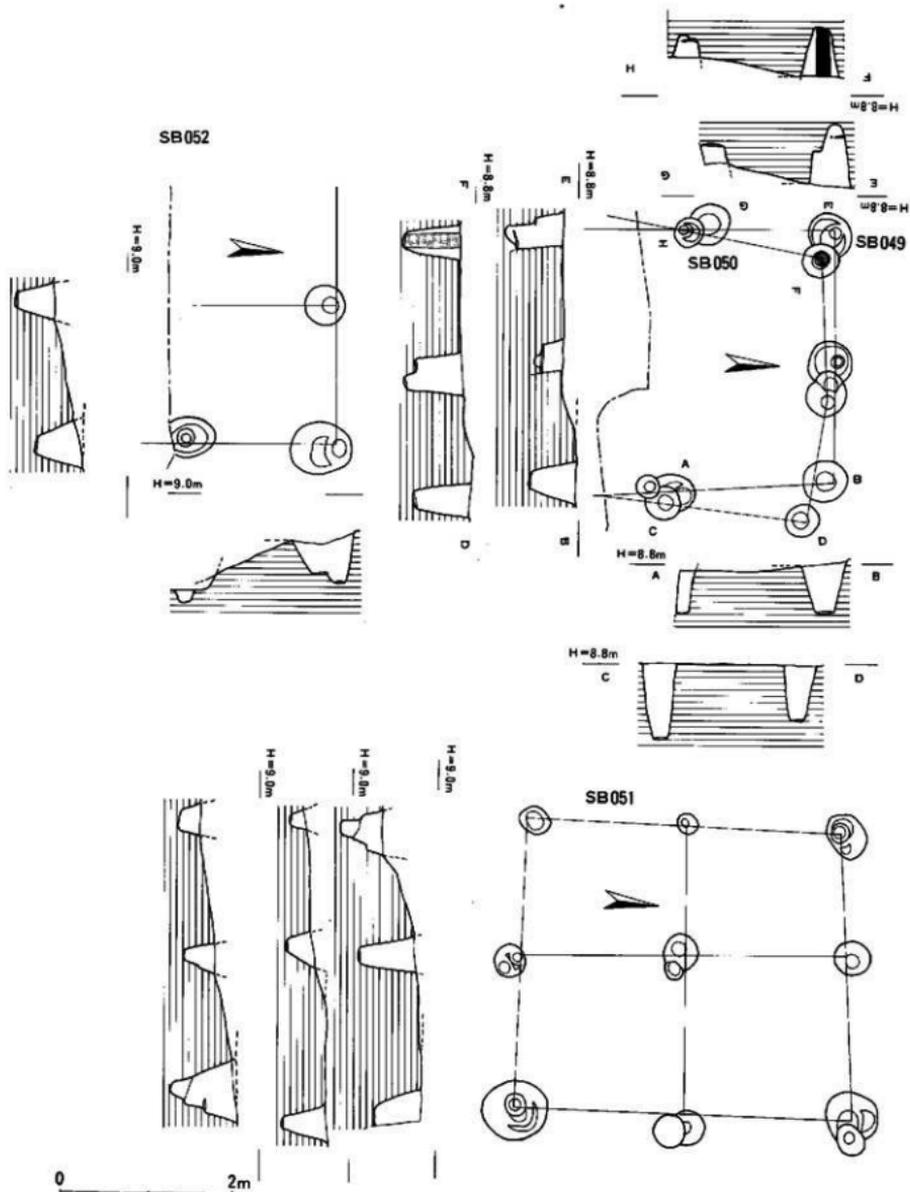


第6図 掘立柱建物配置図 (1/60)

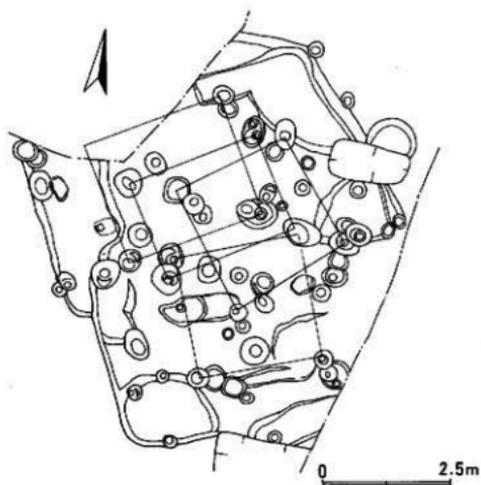


第7図 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

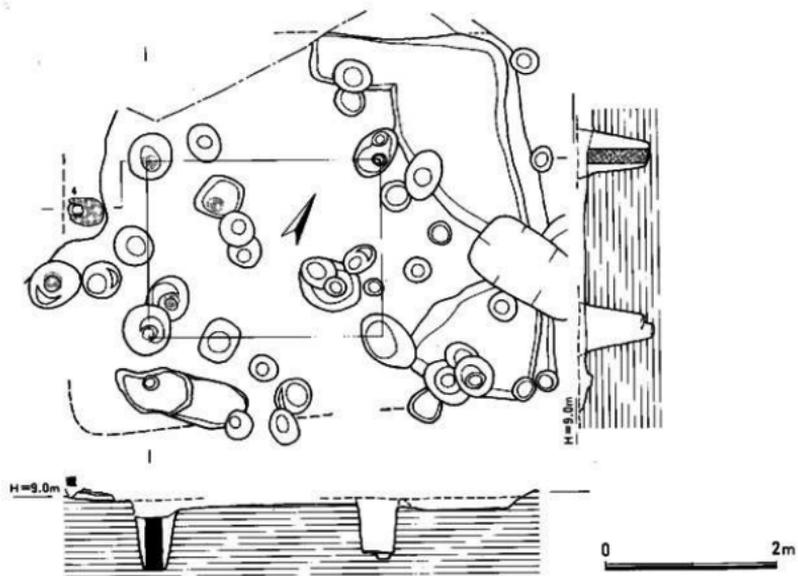
SC006-1は西側に竈を付設する住居跡である。4本主柱でSC006-3・SC006-4の主柱を切る。竈は床面に竈が倒置されており、口縁部のみが残存している。竈設置部分を除いて床面には10~15cmの貼り床を施している。SC006-2は南側に竈を付設する4本主柱の住居跡である。SC006-3の主柱を切る。切り合い関係より1及び2が新しいと考えられるが、相互の前後関係は不明である。SC006-3は竈の確認は出来なかった。4本主柱の住居跡である。SC006-4は西側に竈を付設する。主柱は4本であるが、1本は調査区外に位置している。復元した4棟の住居跡の関係は3→1、4→1、3→2となる。



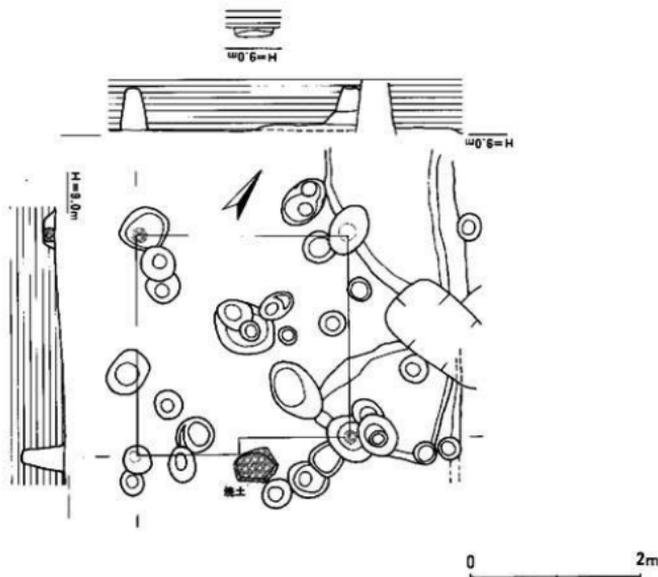
第 8 图 掘立柱建物実測図 (1/60)



第9图 SC006 实测图 (1/100)



第10图 SC006-1 实测图 (1/80)



第11図 SC006-2 実測図 (1/60)

出土遺物 (第13図) 4～6は土師器甕である。4は006-1堀内に倒置されていた甕である。胴部外面縦刷毛、内面斜めのヘラ削りを行う。2次的な焼成を受けている。5・6は擬格子のタタキを行う甕の胴部破片である。内面には当て具痕が残る。5は2次的に熱を受けている。7～13は須恵器である。7はボタン状の蓋のつまみである。10は天井部はヘラ切り未調整でヘラ記号が残る。13は小型の高坏である。14～16は瓦である。14は焼成の堅緻な丸瓦である。凸面は縦方向の板ナデにより叩き痕を擦り消し、凹面は竹状模骨痕と布目が残る。15・16は軟質の平瓦である。いずれも風化が著しく調整不明瞭であるが、凸面は平行叩き、凹面には布目が残っている。17は叩き石である。両面に窪みを有し、側面にも敲打痕が残る。砥石としての使用も伺うことができる。また片面には縦方向の直線的な傷が残る。重量550gを測る。18・19は滑石製紡錘車で重量は26g・21gを測る。19には中央の孔の隣に両面から穿孔しかけた痕跡が残っている。

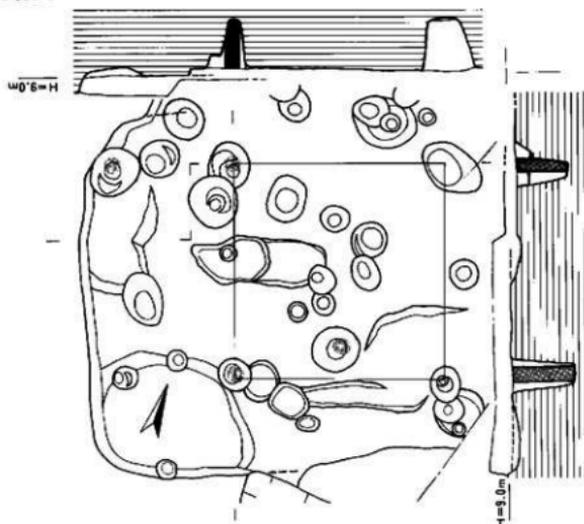
SC007 (第14図)

調査区東端で検出し、SC006-3に切られる。平面形はいびつな方形を呈し、一辺3.5～4mを測る。埋土は黒色土で、床面中央部の浅く掘りくぼめた部分には烏柄ろームブロック混合土により貼り床を行っている。北壁より中央部に床面が被熱により赤変しており電の痕跡と考えられるが、壁体は検出していない。主柱は不明である。遺物は土師器甕、須恵器蓋坏・高坏が出土しており7世紀前半に位置づけられる。

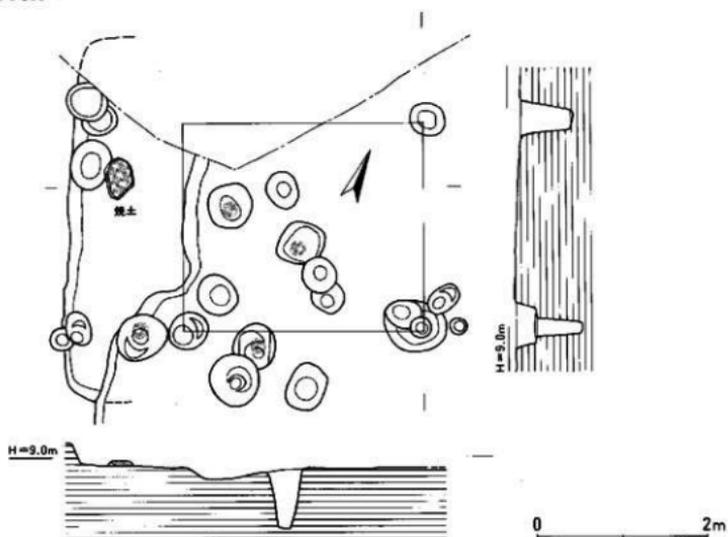
出土遺物 (第15図20～23)

20は土師器甕である。外面に縦刷毛が残る。21・22は須恵器蓋坏である。21は復元口径12.3cmを測り、天井部は回転ヘラ削りを行う。23は透明な青色を呈するガラス製の小玉である。径4mm、長さ3mm、口径2mmを測る。

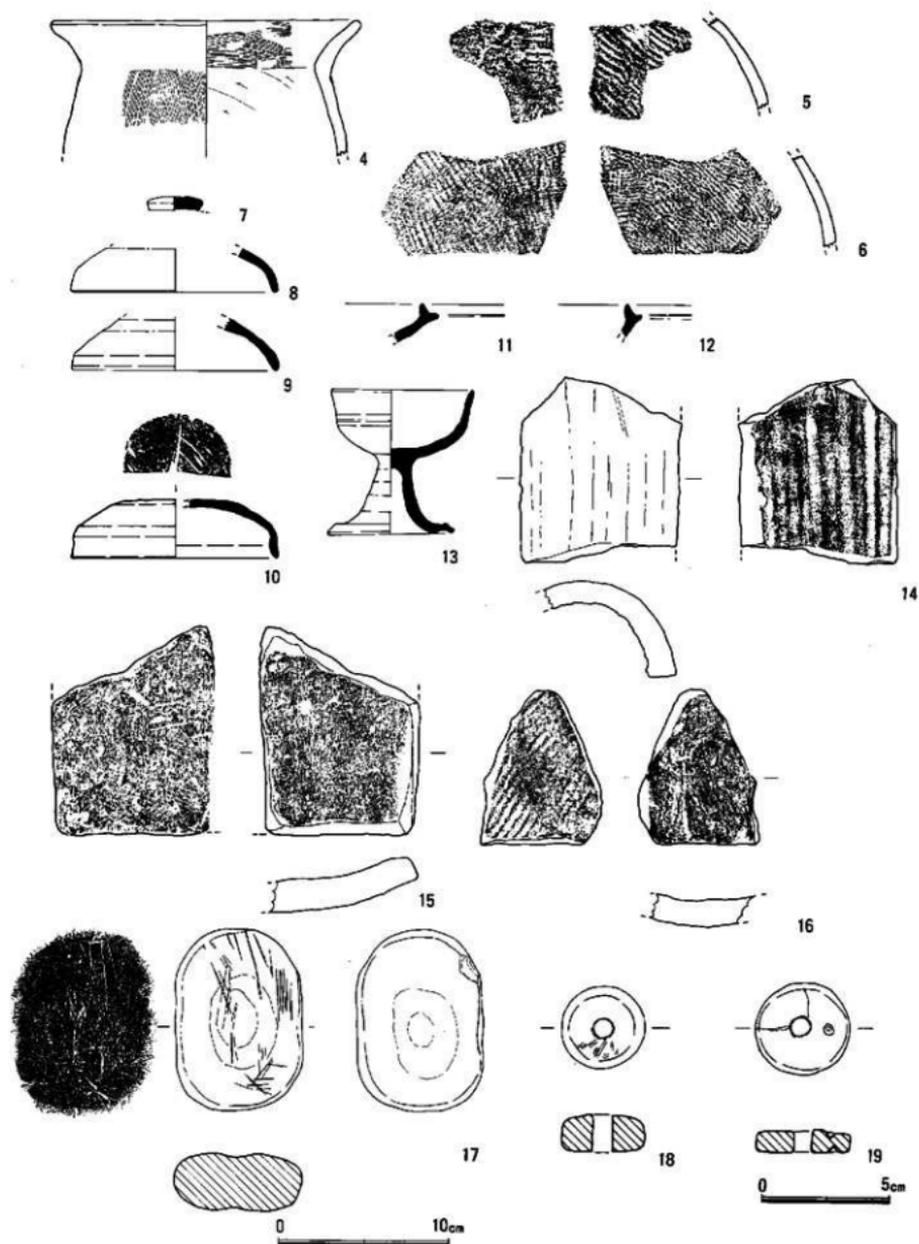
SC006-3



SC006-4

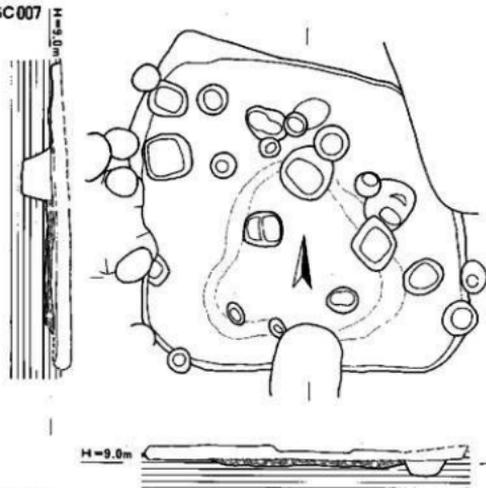


第12図 SC006-3・4 実測図 (1/60)

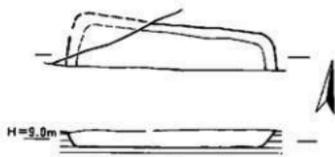


第13図 SC006 出土遺物実測図 (18・19は1/2, 他は1/3)

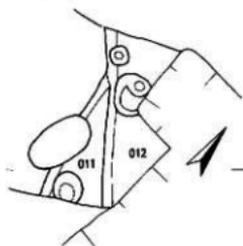
SC007



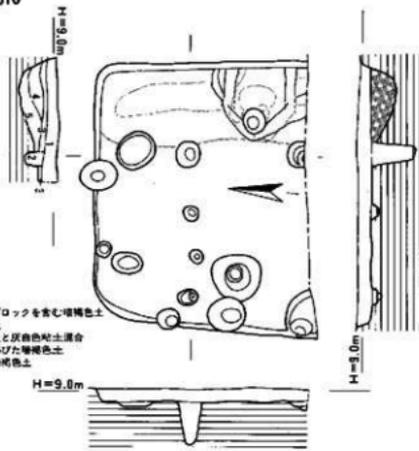
SC008



SC011・012

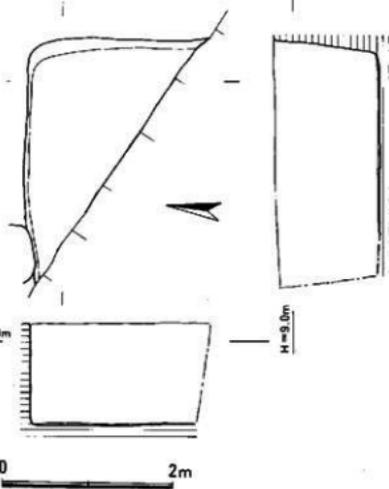


SC010



H=9.0m

SC013



H=9.0m

H=9.0m

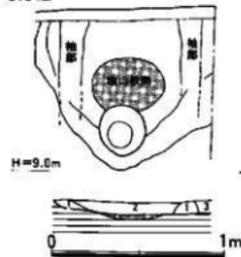
0 2m

- 1 ロームブロックを含む埴粉色土
- 2 埴粉色土
- 3 埴粉色土と灰白砂粘土混合
- 4 黒線を帯びた埴粉色土
- 5 汚れた赤褐色土

H=9.0m

H=9.0m

010 竈

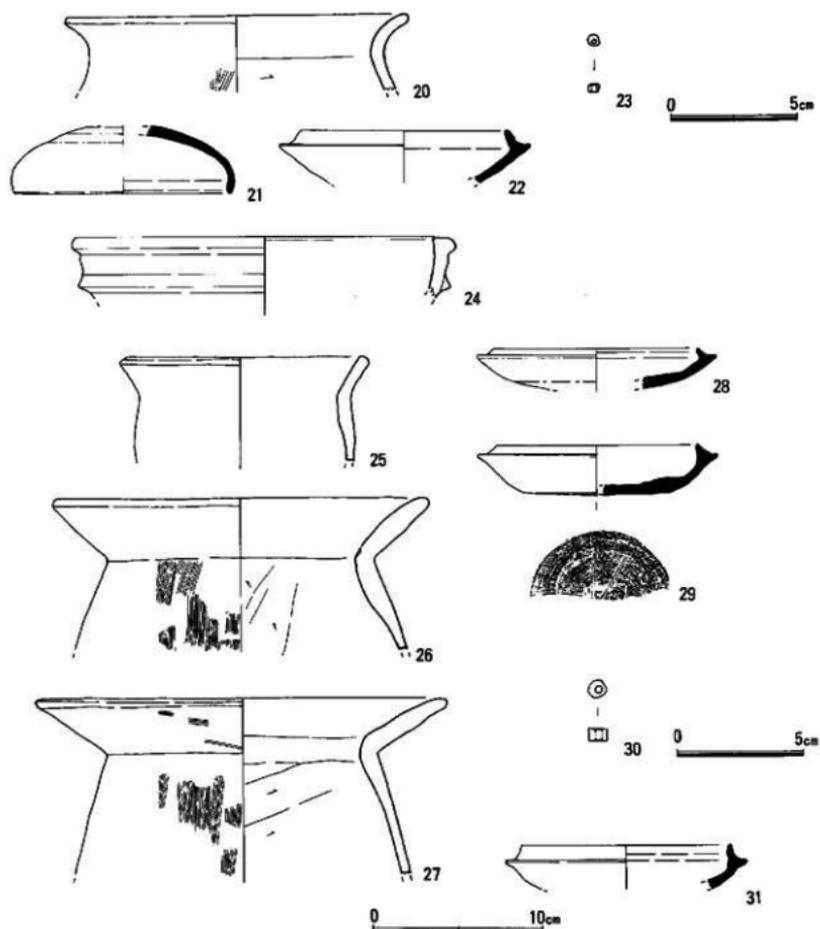


H=9.0m

- 1 白灰粘土(埴粉)
- 2 羅保ブロックを含む埴粉色土
- 3 灰まじりの埴粉色土

— アミ部は埴山埴粉帯

第14図 SC007・008・010・011・012・013 実測図 (1/60, 1/30)



第15図 SC007・008・010・013 出土遺物実測図 (23と30は1/2,その他は1/3)

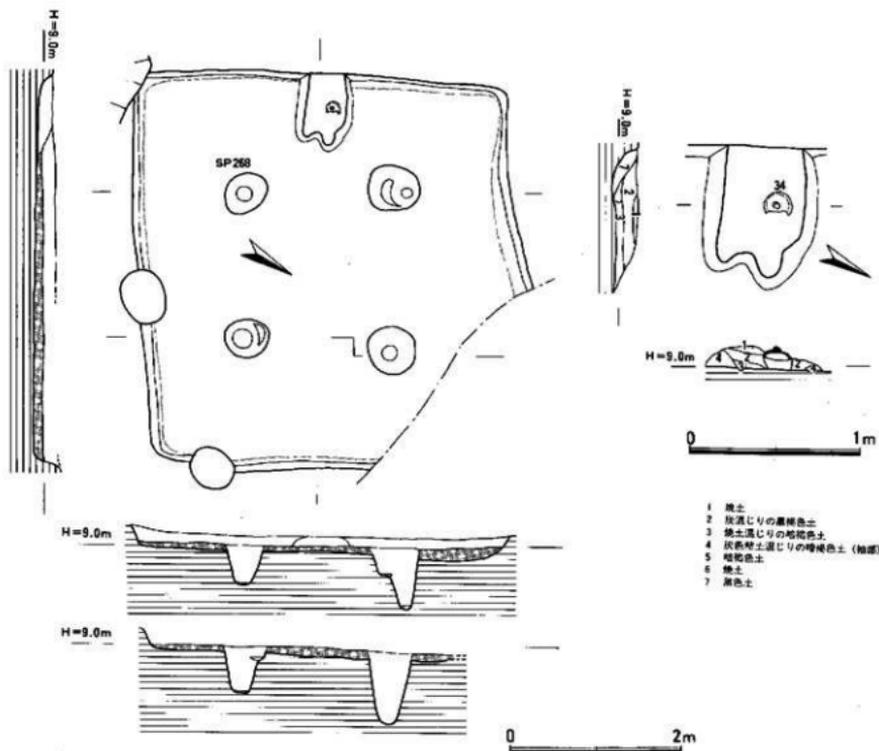
SC008 (第14図)

調査区南東隅で検出し、SD001に切られる。幅2.5mと狭くなっているが、床面が平坦で壁が直立しているため形態的に竪穴住居跡と考えられるが主柱等の屋内施設はない。埋土はロームブロックを含む黒色土である。遺物は少量で土師器の小破片のみである。

出土遺物 (第15図24)

24は二重口縁部分の破片である。端部は外側に肥厚させ、屈曲部には三角形の突帯を貼り付けている。

SC010 (第14図)



第16図 SC015 実測図 (1/60, 1/30)

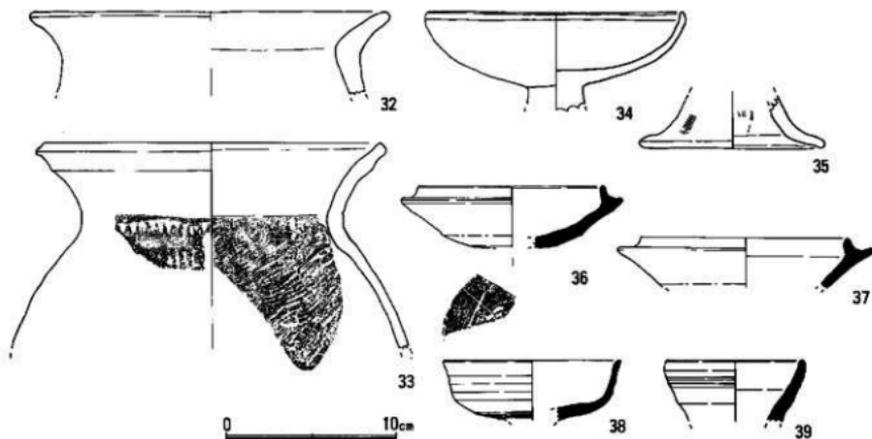
調査区南端部で検出し、SD001・009を切る。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土である。東壁に電を付設している。竈は破壊されているため床面上に壁体が散乱していたが、緩く掘りくぼめられた基底部に白色粘土による袖部が残されていた。竈燃焼部分は地山が被熱により赤変している。また東壁沿いに幅1mで暗褐色土とロームの混合土により貼り床が行われている。出土遺物は土師器甕、須恵器蓋坏・甕、滑石製白玉が出土している。7世紀前半代に位置づけられる。

出土遺物 (第15図25~30)

25~27は土師器甕である。25・27は住居埋土出土破片と竈内出土破片が接合している。25は器面が2次的に熱を受けている。26・27は口縁部がラッパ状に開いている。28・29は須恵器である。29は外底面のへら削りが屈曲部と中心部の一部に行われている。30は竈内出土の滑石製白玉である。径7.5mm、長さ5.5mm、口径2.5mmを測る。

SC011 (第14図)

調査区東端で検出する。SC013に切られるがSC012との先後関係は不明で、西壁の一部のみを確認するのみである。埋土は暗褐色土で壁高は10cmを測る。遺物は僅少で土師器小破片を出土するのみである。



第17図 SC015 出土遺物実測図 (1/3)

SC012 (第14図)

調査区東端で検出する。SC006・013に切られ、東側は大きく攪乱を受けている。埋土は暗褐色土で噴高20cmを測る。遺物は土師器・須恵器の小破片が出土している。

SC013 (第14図)

調査区東端で検出し、SD001を切る。東側を大きく攪乱されているが平面は方形～長方形を呈する。壁高は120cmを測り直立し、また床面は平坦でビット・焼土等なく非常に整った形態をなしている。埋土は検出面から30cmまではよくしまった黒色土。30cm～100cmまではしまりのないふかふかな暗褐色土で鳥栖ルームブロックを非常に多く含んでおり、この層は人為的な埋め立てを示している。100cm～120cmは汚れた黄褐色土である。形態・埋土から竪穴住居跡とも言い切れず不明な点が多い。遺物は大半が最上層の黒色土から出土しており、土師器甕、須恵器蓋環がある。6世紀末～7世紀初頭に位置づけられる。

出土遺物 (第15図31)

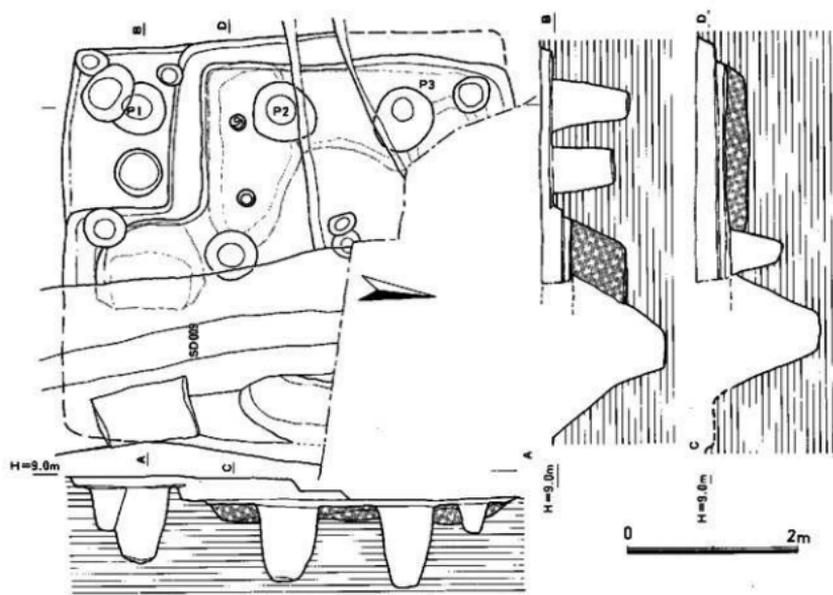
須恵器杯身の小破片である。受け部の立ち上がりは短い真っ直ぐになっている。復元口径は12cmを測る。

SC015 (第16図)

調査区北端で検出する。一辺4.5m×4.7mの略正方形を呈する。埋土は暗褐色土である。また床面全体に黒褐色土と鳥栖ルームの混合土により厚さ10cm～15cmの貼り床を行う。西壁中央部分に竈を付設し、主柱は4本である。竈は床面から10cm程焼土・炭層が堆積し、その上面に高坏を倒置している。脚部は欠失しているが、支脚として使用されたものと考えられる。出土遺物は土師器甕・甌・高坏、須恵器甕・蓋環・高坏があり、6世紀末～7世紀初頭に位置づけられる。

出土遺物 (第17図)

32～35は土師器である。32は内面へラ削りを行う甕である。33は住居埋土と主柱SP268出土資料が接合する。似非須恵土師器とされるもので、胴部外面擬格子の叩き痕、内面に当て具痕が残る。34は甕

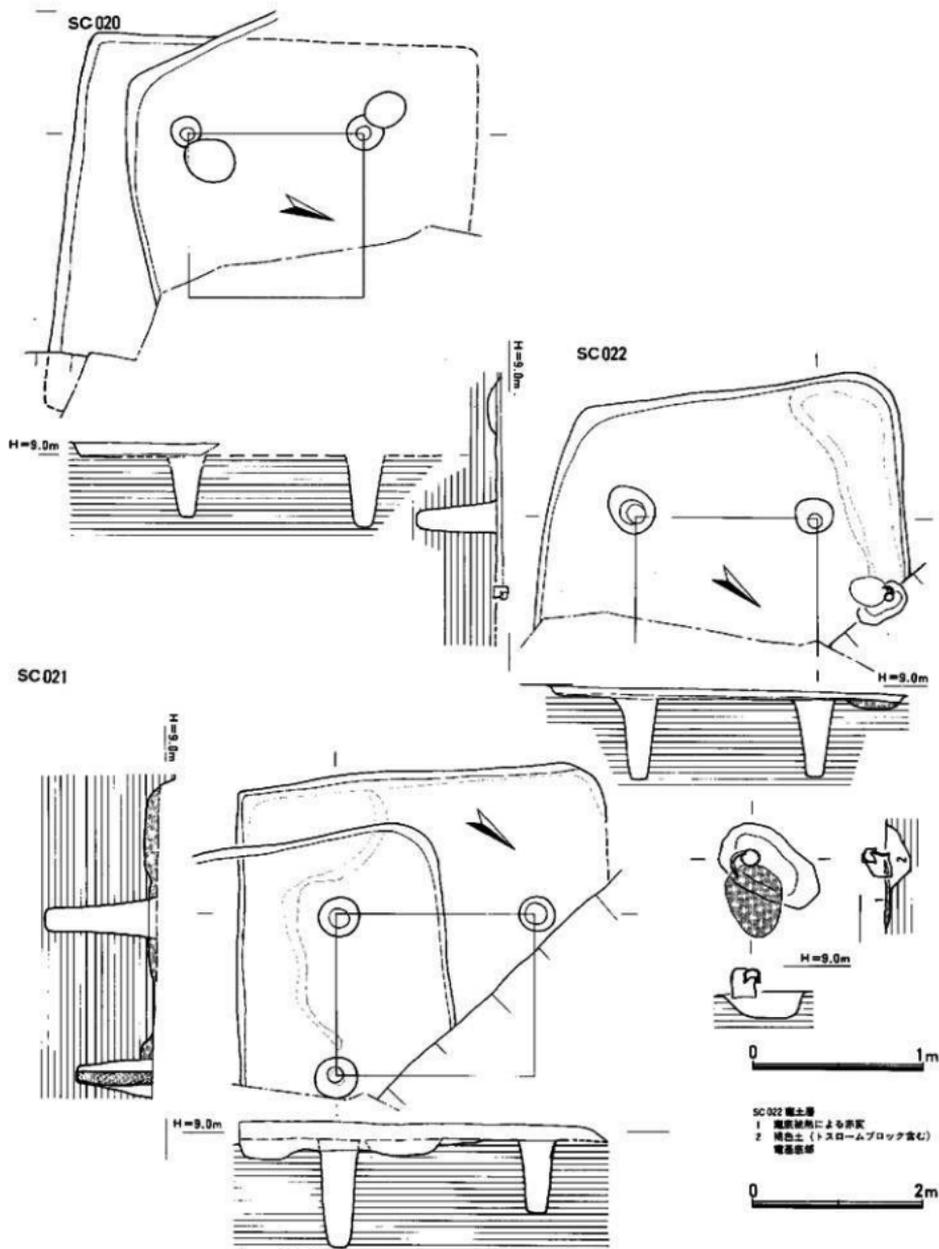


第18図 SC017 実測図 (1/60)

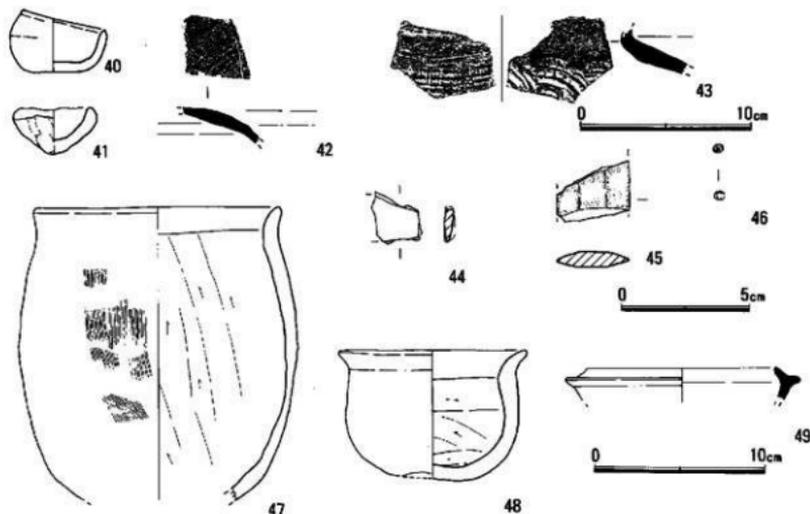
内出土高坏である。基部以下を欠失する。坏部は椀状を呈し、筒部は中実となる。35は高坏舞裾部分である。36~39は須恵器である。36は外底面回転へう削りを行い、へう記号が残る。38は小型高坏坏部で底面にカキ目を施す。39は瓶の口縁部である。

SC017 (第18図)

調査区中央北側で検出し、北半部分をSC020・022に切られる。埋土は全体を黒色土が覆い、これを10cm除去し南西部に1.9m×1.2mのベッド状の高まりを検出した。この時点で高まりを残した部分の埋土は黒褐色土であった。この黒褐色土を15cm程除去するとクランク状の壁沿いに幅30cmのステップが残り、更に5cm~8cm除去したところで床面を検出した。床面上には南西壁際にL字状の掘り込みと南壁際に長方形の掘り込みがあり汚れた黄褐色土により貼り床が行われていた。1棟の竪穴住居跡ではなくコーナーにベッド状の高まりを有する住居を北西方向にずらして建て替えを行った可能性が高いと考えられ、現状でステップ状に残る部分が建て替え後の住居床面に当たると考えられる。住居平面は南北5.2m、東西5mの略方形を呈し、P1~P3が埋土黒色土で支柱に相当するがこれに対応する東壁沿いの柱は確認できなかった。出土遺物には上層の黒色土からは土師器・須恵器の小破片が出土している。またP3からも回転へう削りを行う蓋坏破片が出土しており6世紀後半~末の竪穴住居跡と考えられる。なお東半部分は当初SD009との切り合いが区別がつかず、結果的に床面まで掘り下げてしまったため、図上は切られたようになっているが、時期的にはSD009埋没後にSC017が構築されたと考えられる。



第10図 SC020・021・022 実測図 (1/60, 1/30)



第20図 SC017・020・022 出土遺物実測図 (44~46は1/2,その他は1/3)

出土遺物 (第20図40~44)

40・41は手づくねの碗でいずれも胎土に砂粒を多く含んでいる。41はP1からの出土である。42はP3出土の須恵器坏身である。外底に回転ヘラ削りを行いヘラ記号を有する。43は須恵器甕である。胴部に叩き及び当て具痕が残る。44は貼り床出土の鉄器である。刀子状の製品の一部であろうか。

SC020 (第19図)

調査区北端で検出し、SC017→SC020→SC022の切り合い関係にある。埋土は茶味を帯びた黒褐色土で壁高は15cmを測る。平面は一辺4.5m程度の方形で4本主柱と考えられる。電等の施設は確認していない。土師器・須恵器の小破片が出土しており切り合い関係から7世紀初頭~前半に位置づけられる。

出土遺物 (第20図45・46)

いずれもSC017との切り合い確認時に上面から出土した遺物である。45は磨製石剣の破片である。46は青色を呈するガラス小玉である。径3mm、長さ3mm、孔径1.5mmを測る。

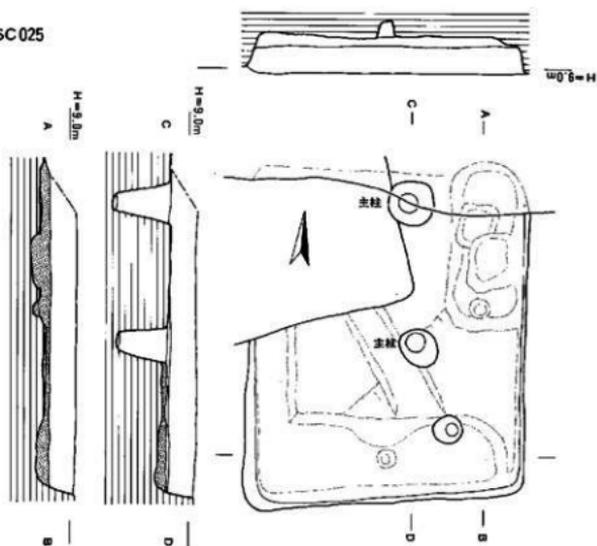
SC021 (第19図)

調査区北端部で検出し、SC021→SC022の関係にあり、SC020とは先後関係不明である。埋土は褐色土で壁高は15cmを測る。平面は一辺4.4m程度の方形で4本主柱と考えられSC020とはほぼ同形である。床面には壁際を中心にして貼り床が行われ、南壁沿いはL字状に更に深く掘りくぼめられる。電等の施設は確認していない。図示し得る遺物はないが土師器・須恵器の小破片が出土しており古墳時代後期に位置づけられる。

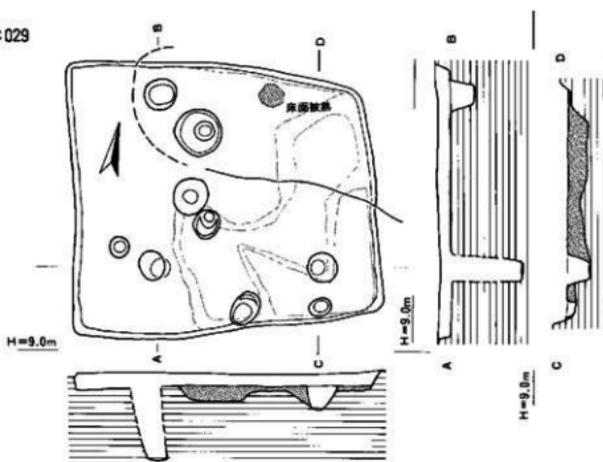
SC022 (第19図)

調査区北端部で検出する。4本主柱で、平面はやや重なる方形を呈すると考えられる。北壁沿い床面には貼り床が行われ、その上面に電が付設されている。電は基底部分を15cm程掘りくぼめ褐色土で埋め立てて電底としている。そこに一部を埋め込むようにして中型の甕を倒置し据えつけている。また検出時には小型の甕が逆位で落ち込むようにして出土したが、これは中型の甕とセットで支脚として使用した可能性が考えられる。また甕の前面は被熱により赤変している。遺物はその他須恵器蓋坏・甕

SC025

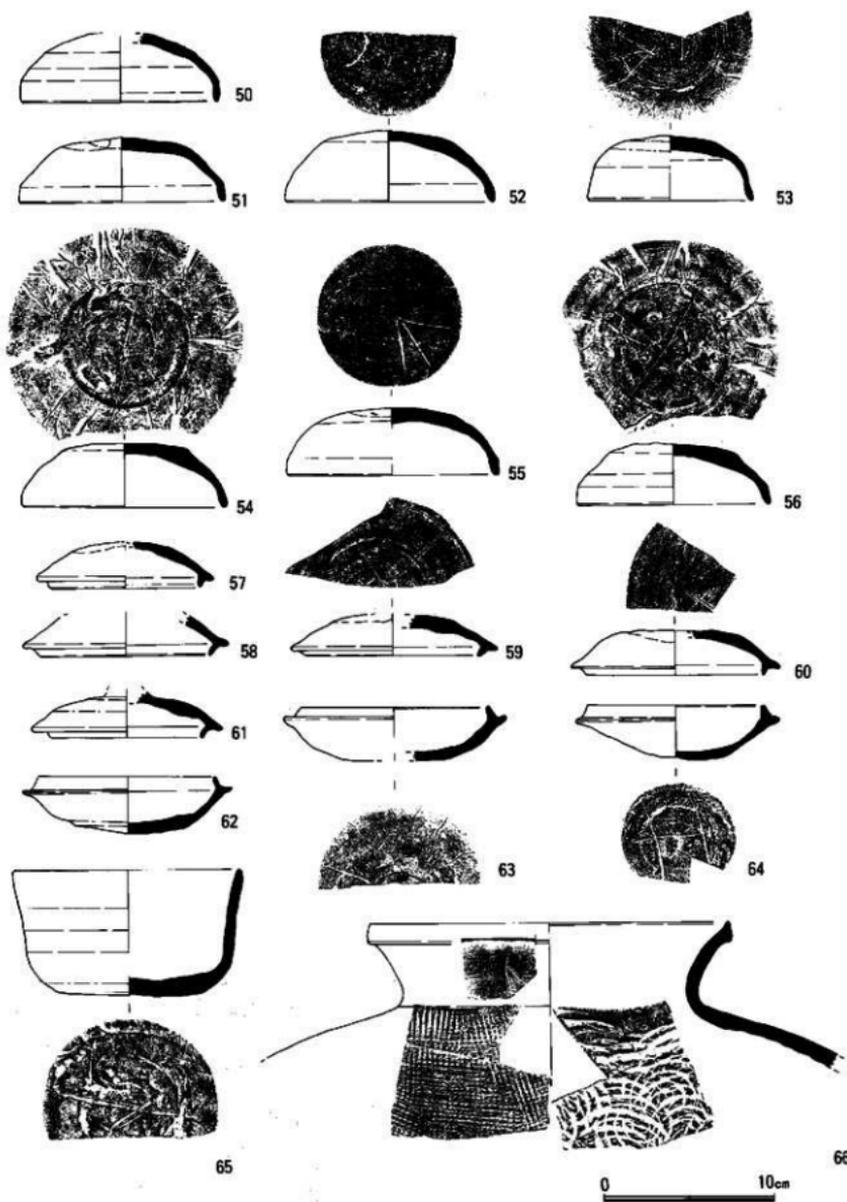


SC029

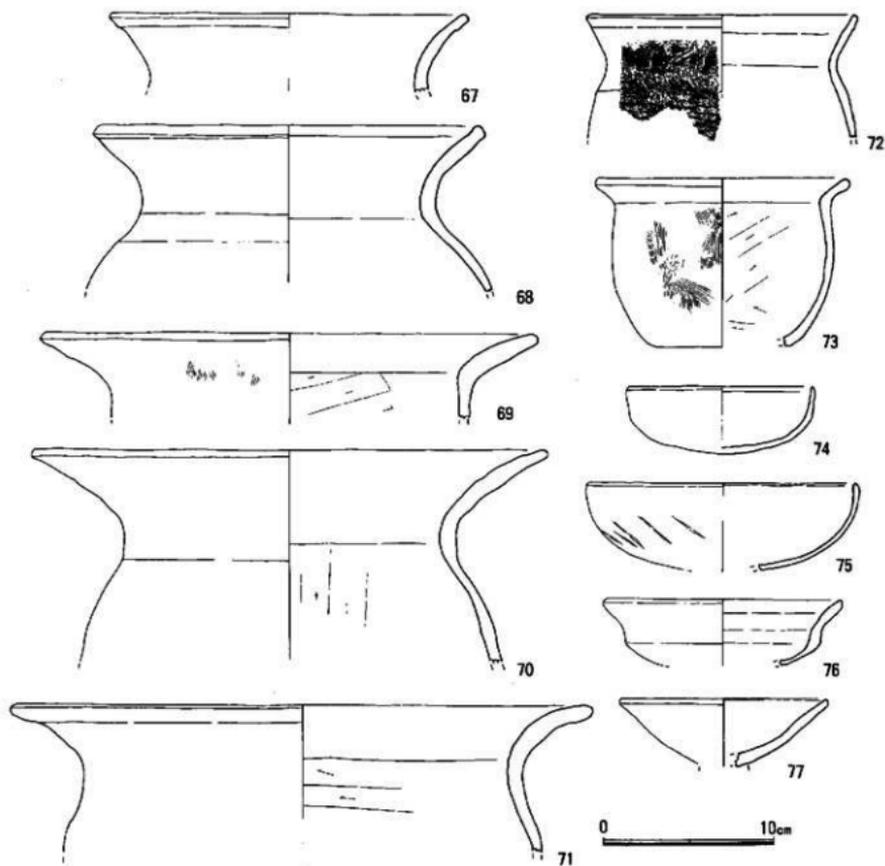


0 2m

第21図 SC025・029 実測図 (1/80)



第22图 SC025 出土遺物実測図1 (1/3)



第23図 SC025 出土遺物実測図 2 (1/3)

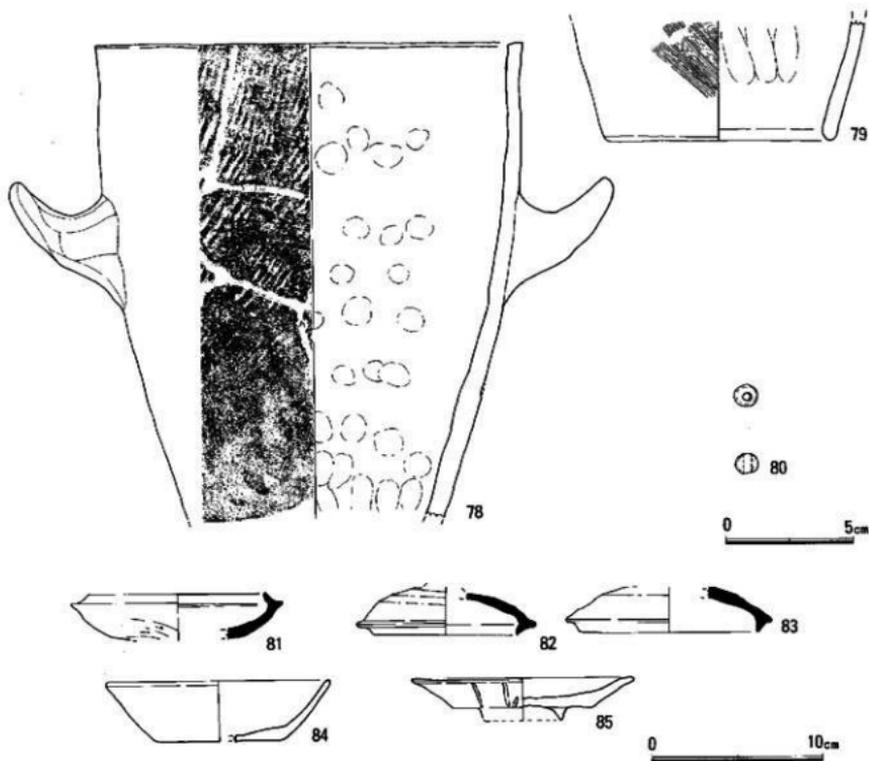
が出土しており、7世紀初頭～前半に位置づけられる。

出土遺物 (第20図47～49)

47・48は竈内から出土した土師器甕である。47は胴部外面は縦刷毛、内面は縦方向のヘラ削りを行う。明瞭な被熱の痕跡は認められない。48は外面～口縁部内面にかけて2次的に被熱している。調整は内面横方向に削っている。49は須恵器坏身で、立ち上がりは低く内傾している。

SC025 (第21図)

調査区中央南側で検出する。SX028→SD024→SC025→SC029→SD026の関係にある。埋土は暗褐色土で壁高は30cmを測る。切り合いにより北側を欠失するが、住居平面は長軸5m程度短軸3.2mの長方

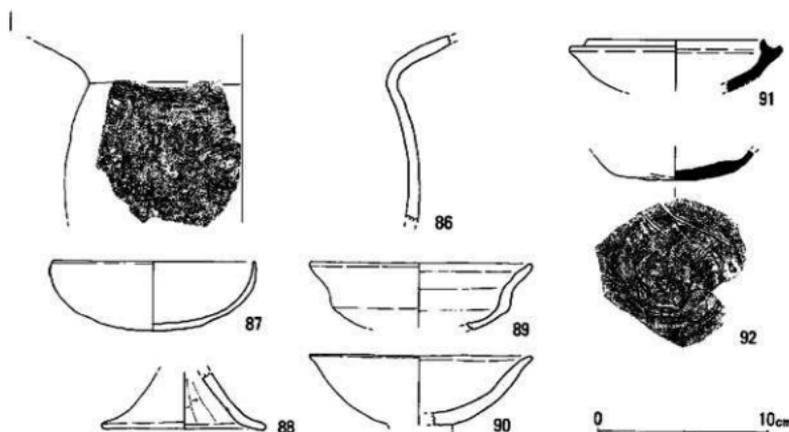


第24図 SC025 出土遺物実測図3 (80は1/2,その他は1/3)

形を呈し、2本支柱によるものと考えられる。床面には南東隅・壁沿い・中央対角線上のそれぞれに灰褐色土とロームの混合土により貼り床が行われる。竈は検出していないが人頭大の粘土塊が出土しており電材の可能性がある。土師器甕・碗・甔、須恵器蓋坏・碗等がコンテナ3箱分出土しており、7世紀前半に位置づけられる。

出土遺物 (第22図～24図)

50～66は須恵器である。50～56は坏蓋Aである。口径は10cm～12cmで縮小傾向が表れている。また天井部外面の調整は50・52・54・56がへら切り未調整、51・55はへら切りののち手持ちでの削り、53は天井部との境のみに回転へら削りを行っている。また52と56は調整とへら記号が一致している。57～61は蓋Bである。61は宝珠形のつまみがつくものである。また61は天井部は回転へら削りを行うが、他は



第25図 SC029 出土遺物実測図 (1/3)

ヘラ切り未調整である。62～64は坏身である。外底面はいずれもヘラ切り未調整である。65は碗である。胴部と底部の境界に回転ヘラ削りを行うが底部は未調整でありヘラ記号を有する。66は甕である。頸部にヘラ記号を有する。

67～79は土師器である。67～73は土師器甕である。67は口縁部短面を玉縁上に整形する。67・68・72は胴部を叩きにより整形しているもので、2次的に熱を受けている。73は底部がほぼ平底に近くなる。74・75は薄手の精製碗である。76・77は高環の坏部破片である。78・79は甕である。78は外面に叩きが残る。79は外面縦刷毛による。80は淡黒色のガラス製丸玉である。

81～85はSD026との切り合い確認時に上面から出土した遺物である。81～83は須恵器である。81は底部ヘラ切り。82・83は天井部回転ヘラ削りを行い、82にはつまみの痕跡が残る。84は土師器坏である。磨耗しており調整は不明である。85は高台付きの浅い坏である。外面に不規則な沈線が刻まれている。

SC029 (第21図)

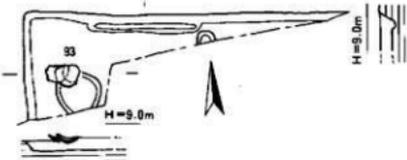
SC025の北側で検出する。SX028埋没後に構築され、北側をSD026により攪乱されるが床面にまでは至っていない。SC025を床面まで掘り下げた時点で確認し、SC025の貼り床面を切っているためSC029が新出であると確認できた。埋土は暗褐色土で壁高は20cmを測る。平面は3.3m×3.5mの歪な略方形を呈する。北側の壁際床面に被熱の痕跡が残るが上面がSD026により攪乱されているため痕の痕跡は確認できなかった。支柱穴は不明瞭で、また床面の東半分は貼り床が行われている。土師器甕、須恵器蓋坏が出土しており、時期的にはSC025直前で7世紀前半に位置づけられる。

出土遺物 (第25図)

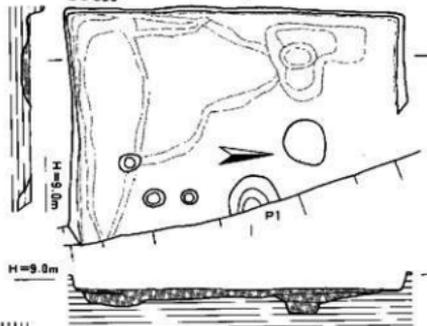
86～90は土師器である。86は叩きを行う甕で、外面は擬格子の叩き痕が残り、内面の当て具痕は磨滅している。2次的に被熱している。87は丸底の碗である。88～90は高環である。91・92は須恵器である。91は立ち上がりか低く復元内径10cmを測る。92は外底面はヘラ切りでのち手持ちの粗いヘラ削りを行う。ヘラ記号が残っている。

SC035 (第26図)

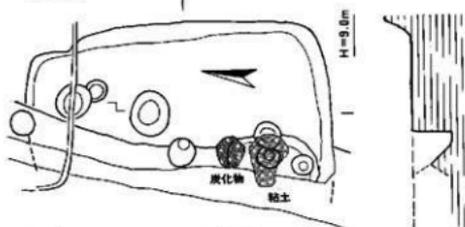
SC035



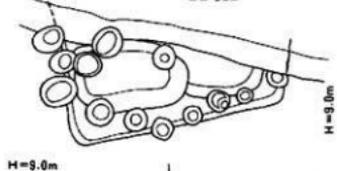
SC036



SC044



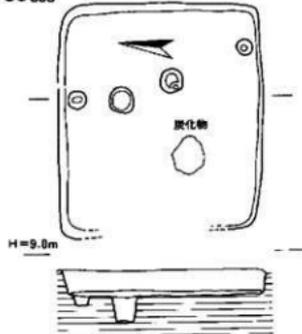
SD032



H=9.0m



SC038



0 2m

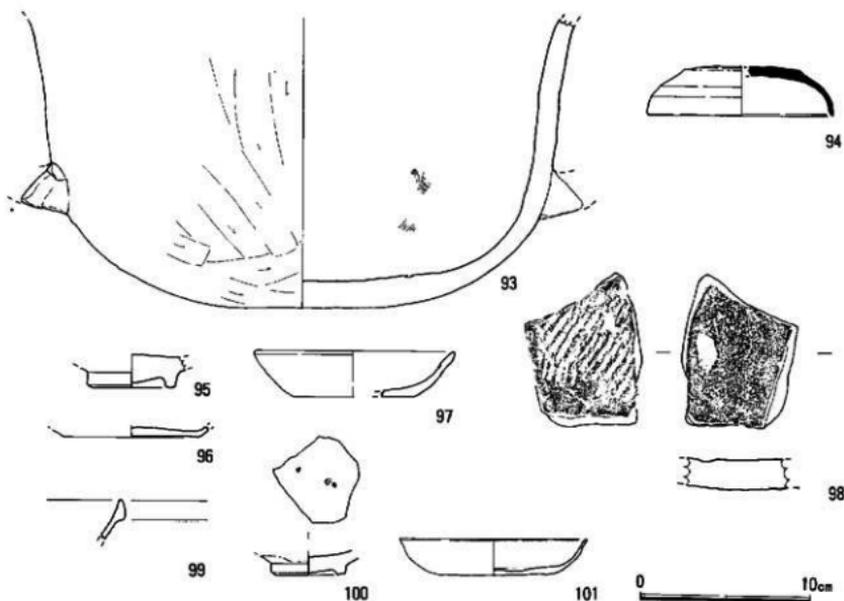
第26図 SC035・036・038・044 実測図 (1/60)

調査区南端で検出し、調査区境界にあたり北端部のみの検出である。SX028の開口部に位置している。埋土は暗褐色土で壁高は15cmを測る。北壁沿いに一部噴溝が確認できた。貼り床は行われていない。また北西コーナー付近に床面から10cm程浮いて把手付きの甕が出土しているが周囲に焼土・壁体は存在しない。その他須恵器壺・甕が出土しており、7世紀前半に位置づけられる。

出土遺物 (第27図93・94)

93は土師器の把手付き甕である。平底に近く外面は丁寧なヘラ削りを行い内面には一部刷毛目が残る。94は須恵器環壺である。天井部には回転ヘラ削りを行う。復元口径は10.5cmで縮小傾向を示している。

SC036 (第26図)



第27図 SC035・038・044 出土遺物実測図(1/3)

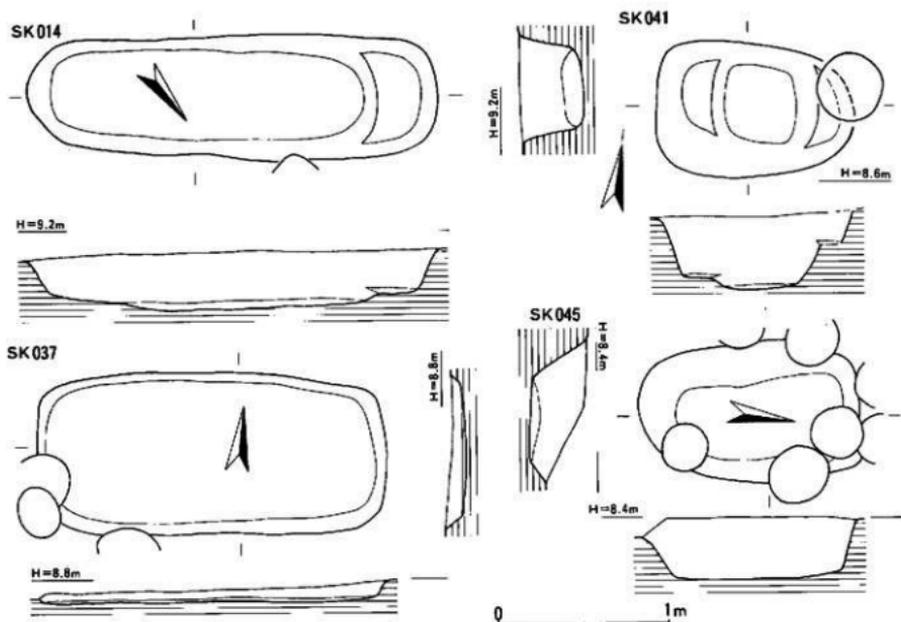
調査区北側SX028で囲まれた内側に位置し、東半分をSX028に切られる。埋土は黒褐色土で壁高は15cmを測る。中央P1が炉跡と考えられ、焼土ブロック・炭化物を含んでいる。炉跡の位置から平面形は南北長3.5m、東西長4.6m程度の長方形を呈すると考えられる。その他主柱穴は不明である。西壁～南壁沿いには貼り床が行われている。遺物は少量で図示し得るものはなく時期は不明瞭であるが、古墳時代初頭に位置づけられるSX028に切られていることや住居の平面形から弥生時代後期に位置づけられるものであろう。

SC038 (第26図)

調査区北西端で検出する。SD032→SC044→SC038の関係となる。埋土は茶褐色土で西壁が032埋土上になるため一部不明瞭な点もあるが、規模は南北長2.4m東西長2.7m壁高30cmを測る。コーナー部分はしっかりとおり均整のとれた掘り方である。床面中央西寄りに径40cmの範囲で床面上に炭化物が広がっているが掘り込みは見られない。また主柱は不明である。遺物には白磁・青磁・土師器環があり中世前半(13世紀～14世紀前半)に位置づけられる。

出土遺物 (第27図95～98)

95は上面出土の龍泉窯系青磁碗の底部破片である。釉調はオリーブ色を呈し、高台壘付き～外底は露胎となる。96は平底の白磁Ⅲである。釉調は乳白色を呈し前面施釉される。97は土師器環である。磨滅が著しく調整不明である。復元口径10.8cmを測る。98は上面出土の平瓦破片である。凸面は平行甲きが行われ、凹面には布目が残る。焼成はやや軟質で内外表面は灰色であるが、内部は赤褐色を呈する。



第28図 SK014・037・041・045 実測図 (1/30)

SC044 (第26図)

SC038の南側に位置しこれに北壁の一部を切られ、SD032埋没後に構築される。検出時に上面から鍍治滓の割れたものが出土し粘土と炭化物の広がり確認されたため関連遺構の存在が考えられた。この為埋土の水洗・磁選を行ったが関連遺構は認められなかった。埋土は暗褐色土で、規模は東西長4.1m南北長3.6m壁高30cmを測る。SD032とは当初切り合いを逆転させていたため図上では本来とは先後が異なっている。白磁・青磁・土師器片が出土しており中世前半に位置づけられる。

出土遺物 (第27図99~101)

99・100は上面出土の白磁である。99は玉縁の口縁部である。100は底部破片で高台から外底面は露胎となる。101は平底の土師器片である。磨滅により不明瞭であるが、外底面はへら切りであろうか。

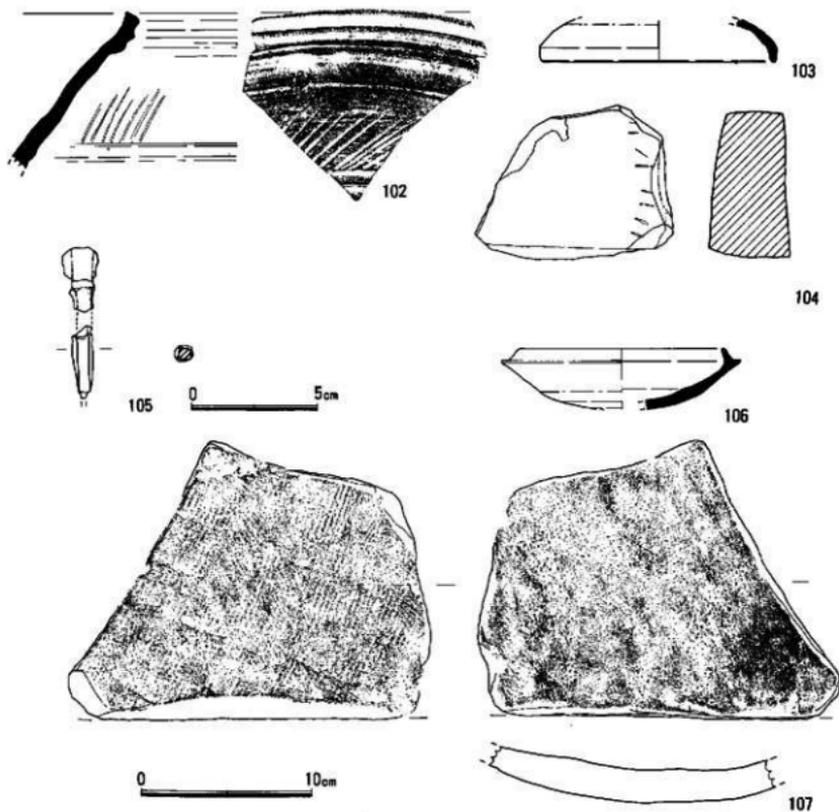
土坑 (SK)

SK014 (第28図)

調査区中央南側に検出する。長軸2.4m短軸75cmを測り、平面隅丸長方形を呈する。西側小口部分に幅30cmの平坦面を有し、底面は長さ1.85mとなる。埋土は褐色土である。土師器小破片、須恵器壺・甕、瓦石が出土する。形態的に土坑墓の可能性も考えられる。6世紀後半以降に位置づけられる。

出土遺物 (第29図102~104)

102・103は須恵器である。102は大甕の口縁部である。頸部にへら描きの文様を施す。103は坏蓋である。回転へら削りを行う。104は砂岩製の砥石である。



第29図 SK014・037・041 出土遺物実測図 (105は1/2, 他は1/3)

SK037 (第28図)

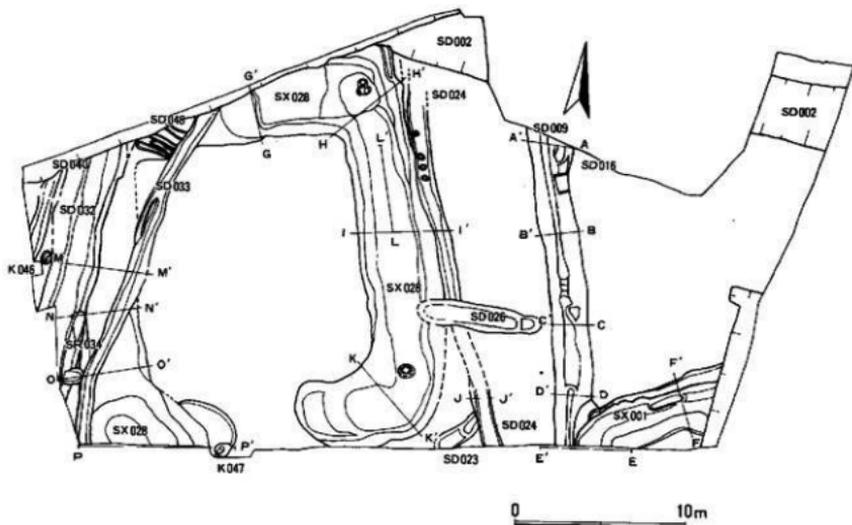
調査区西側でSX028内側で検出する。長軸2m短軸95cmを測り、平面長方形を呈する土坑である。壁高は5cm~10cmで遺存状態は不良であるが底面は平坦で均整のとれた掘り方である。埋土は褐色土でSK014と同じである。遺物は僅少で時期不明瞭であるが、鉄釘が1点出土する。SB051を切っており古墳時代後期以降のものである。中世の木棺墓の可能性が高い。

出土遺物 (第29図105)

105は鉄釘である。錆化が進み形状は不明瞭である。木質が付着する。

SK041 (第28図)

調査区北西隅で検出する。長軸1.15m短軸80cmを測り、平面隅丸長方形を呈する土坑である。兩小口部分に幅15cm程度の平坦面を有し、底面は40cm四方の方形となる。埋土は上部2/3迄は黒褐色土、そ



第30図 溝・方形周溝墓・甕棺墓・土坑墓配置図 (1/300)

れ以下は汚れた黄褐色土である。SD032・040との切り合いは不明であるが、出土平瓦からSD032より新出の遺構と考えられる。

出土遺物 (第29図106・107)

106は須恵器坏身である。外底面はへら削りを行う。107は軟質で灰白色を呈する平瓦である。凸面には叩きののち一部に刷毛目状の痕跡が残る。内面には布目が残るが、磨滅が著しく残存状態は不良である。

SK045 (第28図)

調査区北西隅SC044床面で検出する。長軸1.3m短軸85cmを測り、平面隅丸長方形を呈する土坑である。底面は平世で壁はやや斜めに立ち上がる。埋土は黒褐色土とロームの混合土である。遺物は細片が2点のみで時期不明である。

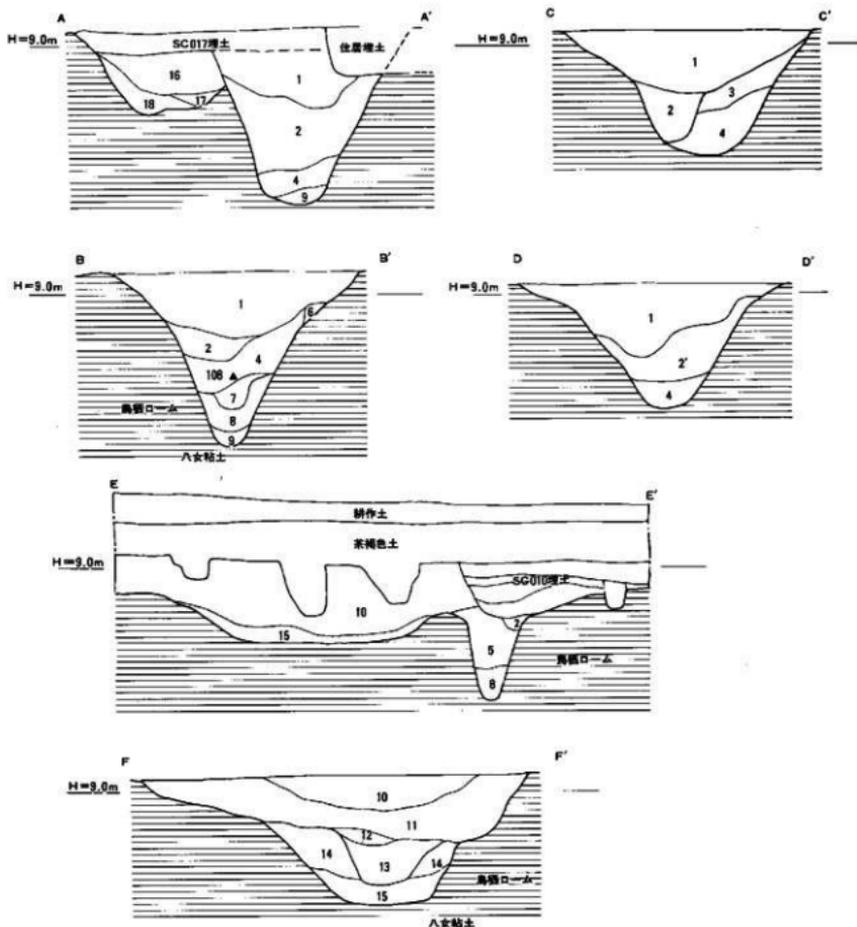
溝 (SD)

SD002 (第4図)

調査区北端で検出しほぼ東西に延びる溝である。調査区縁辺にあたり第32次調査SD-1001の延長に当たるため上面での確認に止め完掘していない。第32次調査の成果によるとN-90°Eの方位をとる東西溝で幅4m深さ1.8mを測り、断面V字形を呈する。李朝の白磁、土師器、瓦、石臼等が出土し、16世紀の掘削と考えられる。

SD009 (第31図)

調査区中央東寄りをもN 12°-W方向に軸をとりほぼ直線的に延びる溝である。調査区南端でSX001



SD000土層 (1~9層: 1 2層を上層で遺物取り上げ)

- 1 黒色土 (土器を多く含む)
- 2 鼻瓶ローム小粒を多く含む、黒褐色土~暗褐色土 (土器を多く含む)
- 3 褐色土 (鼻瓶ローム小粒を非常に多く含む)
- 4 褐色土に鼻瓶ローム小粒を含む
- 5 淡茶褐色土
- 6 汚れた赤褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 汚れた(黄)褐色土 (中や砂粒を雜びる)
- 9 黒色土と淡褐色土の混合土

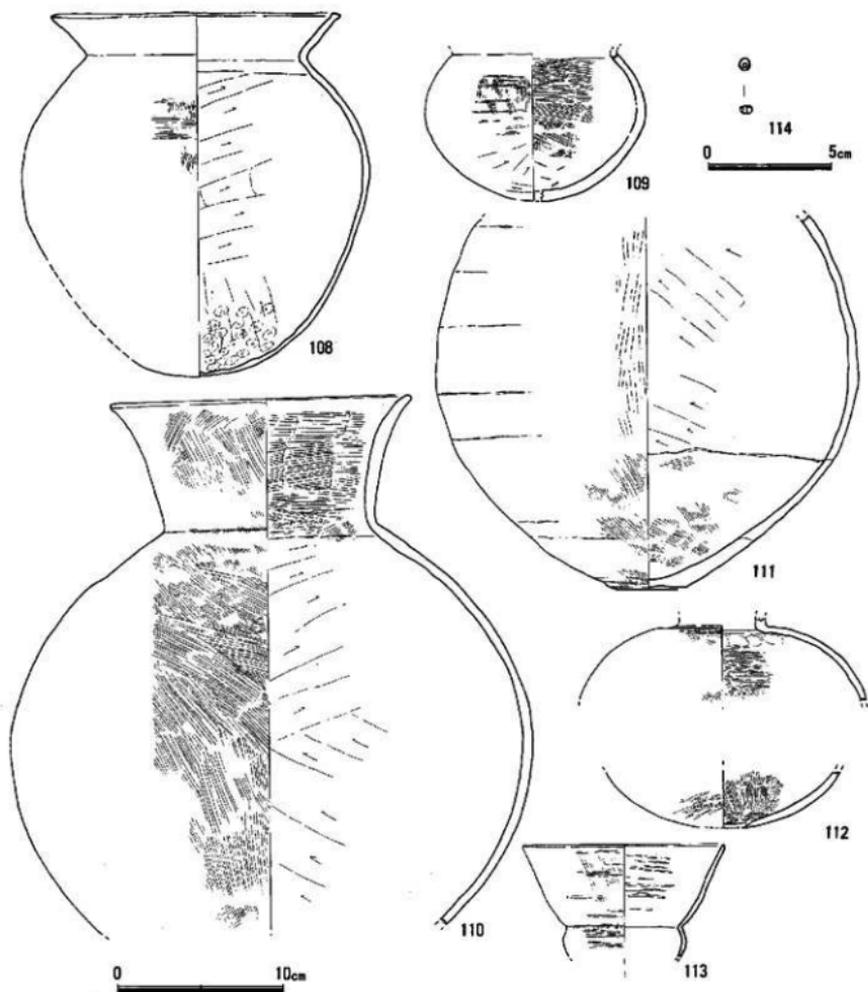
SX001土層 (10~15層)

- 10 ロームブロックを含まない暗褐色土
- 11 黒色土
- 12 茶褐色土 (鼻瓶ローム小粒を多く含む)
- 13 茶褐色土 (鼻瓶ロームブロックを多く含む)
- 14 棕色土 (鼻瓶ローム小粒を含む)
- 15 中や砂粒を雜びた茶褐色土

SD 016土層 (16~18層)

- 16 暗褐色土 (鼻瓶ローム小粒を含む)
- 17 褐色土と黄褐色土の混合土
- 18 黄褐色土

第31図 SD000・SX001 土層図 (1/40)



第32図 SD009 出土遺物実測図1 (114は1/2, 其他は1/3)

SC010に切られる。また北側でSC017・020に切られている。検出面での溝幅2m~2.2m、深さは調査区中央付近が底が高くなり80cm程であるが北側は1.4m南側は1m~1.2mとなっている。断面形も掘削が深い北側はしっかりとしたV字形となり底面幅は20cm程度であるが、中央~南側は壁が開き底面

幅も60cm～90cmと広くなり断面逆台形に近くなる。また南端部分では北端部分より輻狭となり断面Y字形に近くなる。土層観察からは溝の掘りなおしが観察でき黒色土が堆積している(1・2層)。出土遺物の多くがここからの出土である。これ以下の下層は褐色土を主体とし遺物量は少なくなるが、中央部に布留甕(108)が1個体完形で横置された状態で(標高8.25m)出土した。遺物はコンテナ10箱出土し下層は弥生時代終末～古墳時代前期前半に位置づけられ、上層遺物には須恵器破片が僅かに含まれている。出土遺物・切り合い関係から弥生時代終末～古墳時代前期初頭の段階で掘削が行われ、最深部が壁の崩落等で埋没した前期前半に前述の甕が据えられたものと考えられる。この後埋没途中の掘りなおしが行われるがSX001に切られることから前期前半の内に大方が埋没していた可能性が高い。そして竪穴住居跡との切り合いから少なくとも古墳時代後期までには完全に埋没したものと考えられる。この溝に関連する生活遺構は調査区内では確認されていないが、方形周溝墓の構築規格等に規制を与えていると考えられ、後の土地利用に大きく影響を与える溝である。

出土遺物(第32図)

108・109は土師器甕である。108はほぼ完形の布留甕である。口縁部は立ち気味に真っ直ぐ外方に伸びる。端部は内側に肥厚させ、端面はやや外傾し僅かに窪んでいる。胴部は肩の張った卵形を呈し、外面上部に刷毛目が観察できる。内面はヘラ削りによるが底部は棒状工具による押圧により内面から押し出して丸底化を図っている。内面の押圧痕は径5mm程度であるが2mm～3mmと深く残っている。胴部外面に2次の焼成を受けており、器壁は磨滅が著しい。石英・長石砂粒を多く含む。109は小型の甕である。胴部は偏球形を呈し、外面上半は縦刷毛の後横ナデ及び一部に磨きを行い、下半はヘラ削りによる。内面は横刷毛の後底部にはナデを行う。胎土は精選され橙色を呈する。110・111は直口壺である。口縁部～胴部外面は刷毛目により、内面は口縁部が横刷毛胴部はヘラ削りによるが上半と下半で方向を違えている。色調はふい黄橙色を呈する。111は磨滅の進む胴部である。長胴で外面は粗い縦刷毛、内面は上部はヘラ削りで底部近くは刷毛目によっている。全体に調整は粗く粘土帯の接合痕が明瞭に残る。底部はやや上げ底気味の小さな平底である。胎土に砂粒を多く含む。112も壺の胴部である。偏球形の胴部外面は縦刷毛と底部は丁寧な削りののち磨きを行い、内面は刷毛目による。胎土は精選され橙色を呈する。113は精製の小型壺である。磨滅しているが丁寧な磨きを行っている。114は緑色を呈する小玉である。

SD016(第31図)

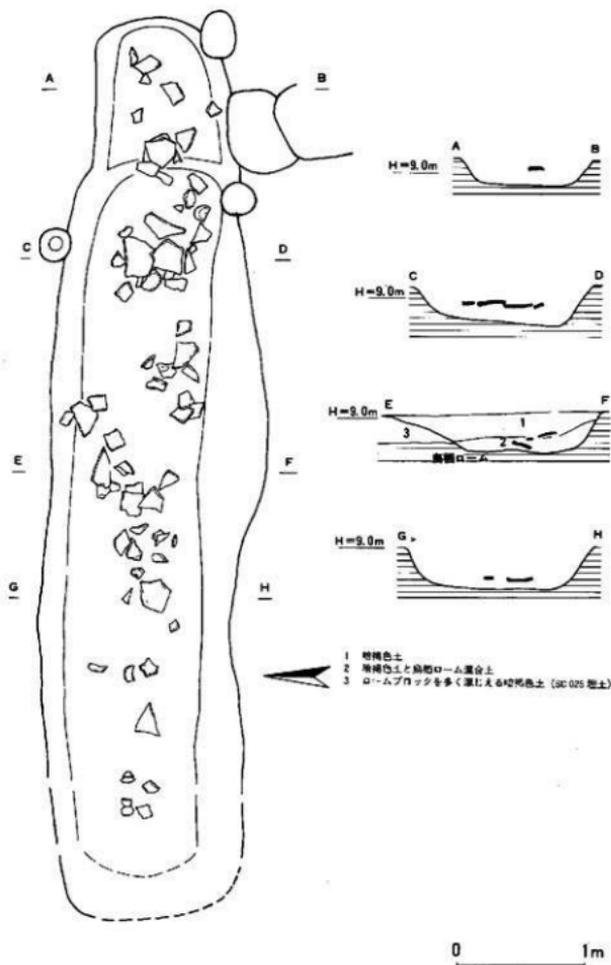
調査区中央北端で検出する。一部しか検出していないが溝状に延びる遺構と考えられる。土層観察からSC017及びSD009に切られている。断面は略逆台形を呈し、幅約1mを測る。遺物は出土していないが、SD009との切り合いから弥生時代終末以前の遺構と考えられる。

SD023(第4図)

調査区中央南端で検出する。埋土は暗褐色土で、溝幅1mを測り断面浅皿状を呈する。当初SD024との切り合いを想定したが、埋土・断面形が類似し底面レベルが一致することから一連の溝と考えられる。出土遺物は小破片のみであるが、SD024出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。

SD024(第45図)

調査区中央を南北に延びる溝である。南側はやや蛇行するが方位はSD009にほぼ一致し、SX028の東辺部分にはほぼ接しながら延びている。また調査区北端部ではSC021に切れ、南側ではSC025・SD026に切られている。溝幅0.9m～1.2m、深さ20cm～30cmを測る。断面形は中央部が逆台形をなし、南北両端部分は壁が緩やかに立ち上がり浅皿状を呈する。また溝北側では底面から径20cm～30cm、深さ10cm以下のピットが30cm～50cm間隔で5基並んでいるが関連は不明である。出土遺物には図示し得るもの



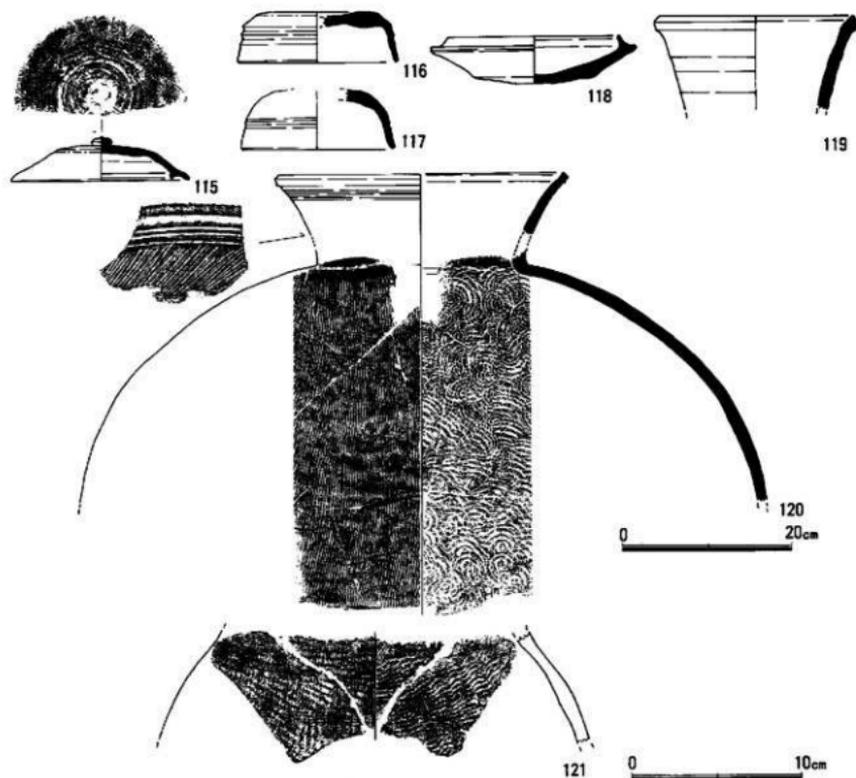
第33図 SD026 実測図 (1/40)

分で溝の端部と推定した。この結果溝の長さは7m程度と考えられる。大甕の破片は殆ど重ならず溝全体に均一に破片を敷くように広がっており、復元すると大半が胴部の破片で全体の1/2程しかなく口縁部が殆どないなどの特徴があり、別の場所で破碎した大甕の破片を持ち込んで溝内に据えたものと考えられる。祭祀的な様相が強いがこれに関連する遺構は不明である。その他遺物は土師器甕・瓶・

はないが須恵器甕破片が含まれており、住居跡との切り合い関係からも7世紀前半には埋没したものと考えられる。またSX028にはほぼ接して延びており上層観察からは切り合いが判然としないが出土遺物からSD024が新しいと考えられる。しかしSX028上層にも須恵器が多く含まれており双方の埋没はほぼ同時期に近いと考えられる。また掘削時期については不明な点が多く、現状では古墳時代後期のなかでの掘削・埋没を考えておきたい。

SD026 (第33図)

調査区中央で検出する。SX028・SC025・SC029を切り、ほぼ東西に直線的に伸びる溝状遺構である。溝幅1.5mで底面は平坦な断面逆台形を呈する。底面から10cm程浮いた位置(主に2層上面)で須恵器大甕の破片が投棄されている。溝の西側はSX028を切っているが埋土が類似しており平面形が判然とせず甕の分布が無くなった部

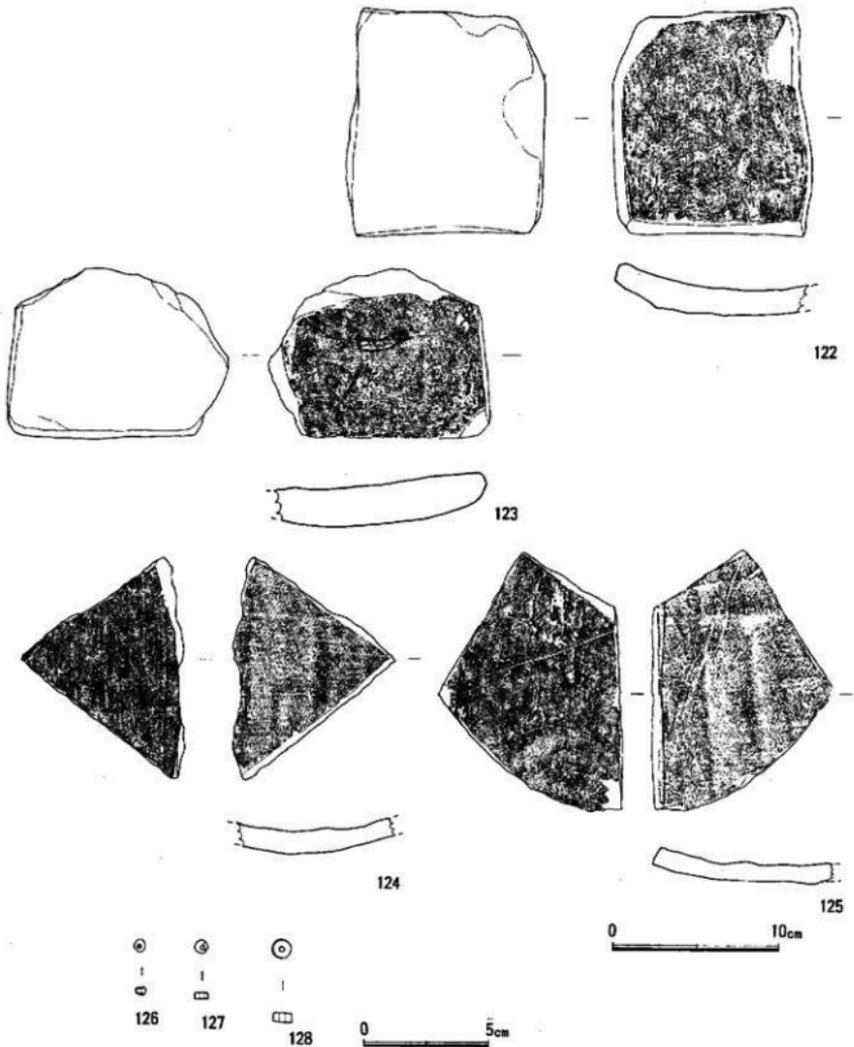


第34図 SD026 出土遺物実測図1 (120は1/6, 他は1/3)

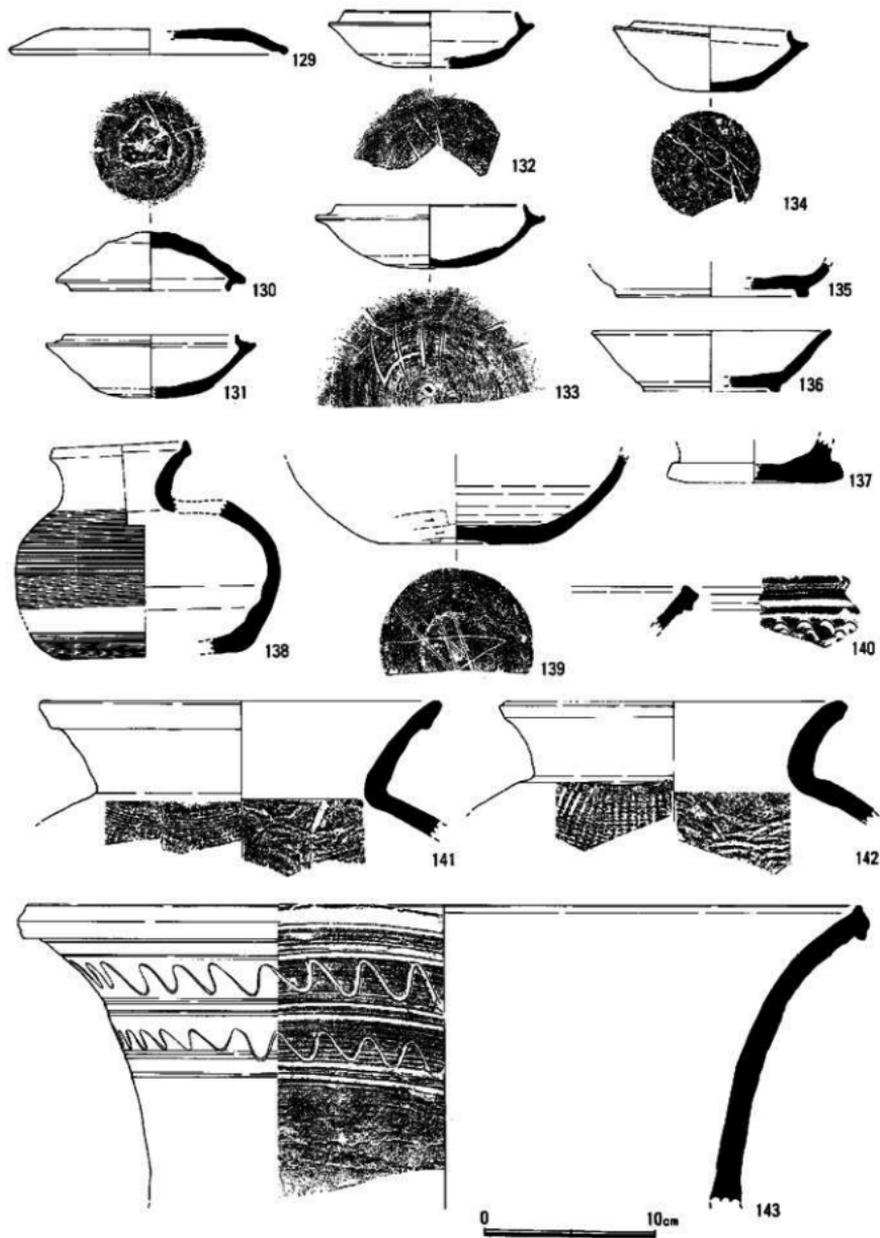
電、須恵器蓋坏・壺・提瓶、瓦がコンテナ5箱分出上している。7世紀中頃に位置づけられる。

出土遺物 (第34・35図)

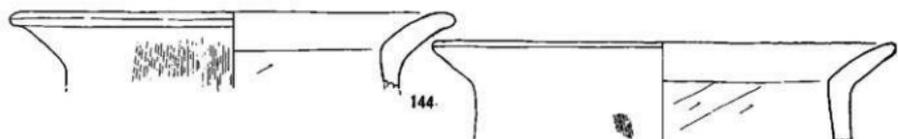
115～120は須恵器である。115は宝珠形つまみを有する蓋で天井部は回転ヘラ削りを行う。116・117は壺の蓋である。天井部は回転ヘラ削りを行う。118は坏身で底部は回転ヘラ削り粗くナデを行う。119は壺の口縁部である。120は溝全体に投棄されていた大甕である。口縁部は玉縁につくり頸部にはヘラ描きの文様を施す。胴部は外面平行叩き内面は青海波文が残る。121は土師器甕である。外面は擬格子叩きの後粗く横方向の刷毛を行い、内面には平行の当て具痕が残る。122～125は瓦である。122・123は軟質で赤褐色を呈し磨減が著しい。123凹面に竹状横骨と布目が残る。124・125は須恵質で青灰色を呈し、凸面は縦方向にヘラナデを行い、凹面には布目が残る。126は青色を呈するガラス小玉である。127・128は滑石製白朮である。



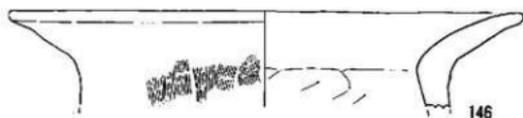
第35図 SD026 出土遺物実測図 2 (126~128は1/2,その他は1/3)



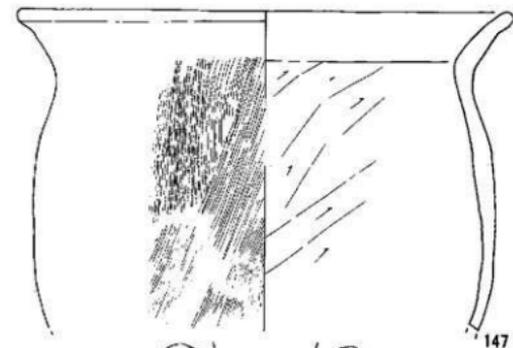
第36图 SD032 出土物实测图1(1/3)



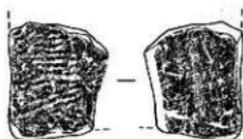
144



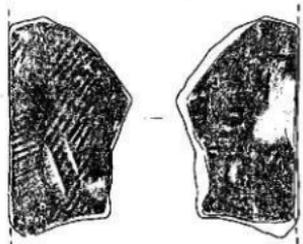
146



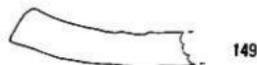
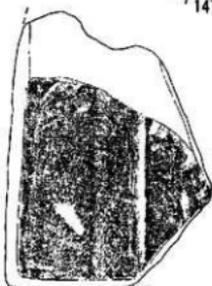
147



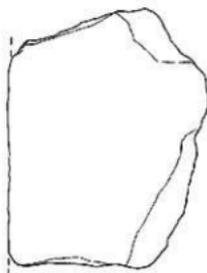
148



150



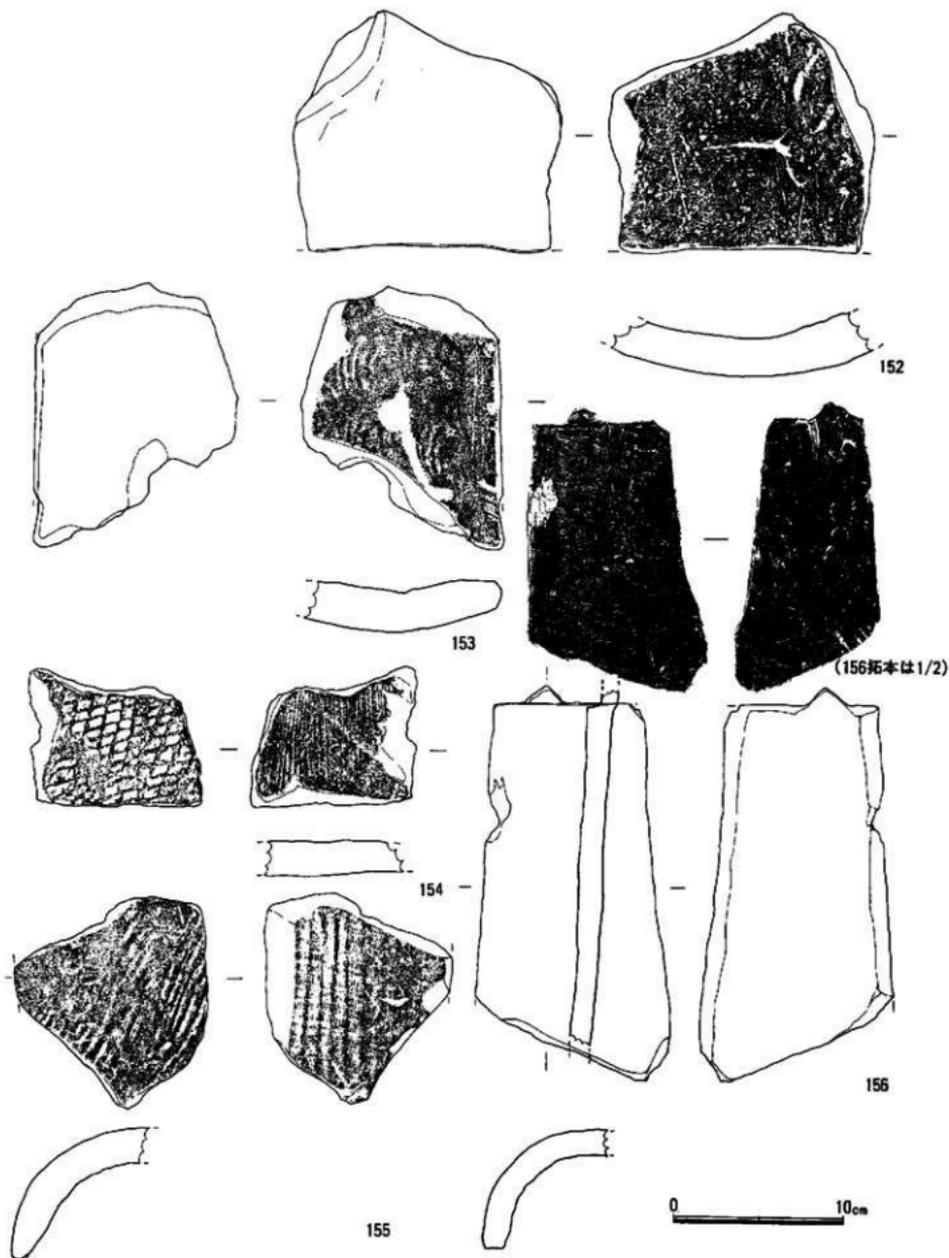
149



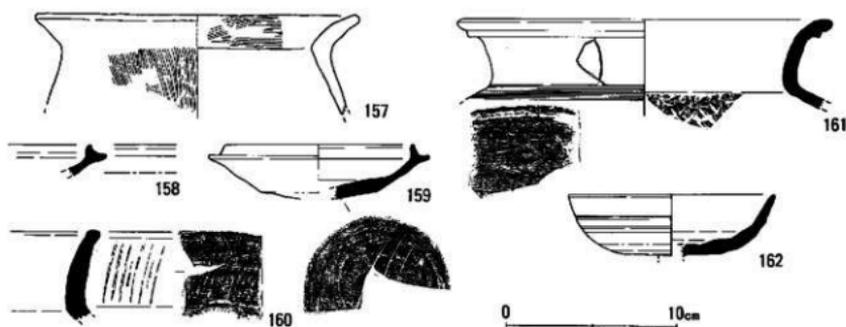
151

0 10cm

第37圖 SD032 出土遺物実測圖 2 (1/3)



第38図 SD032 出土遺物実測図3 (1/3)



第39図 SD033・040 出土遺物実測図 (1/3)

SD032 (第46図)

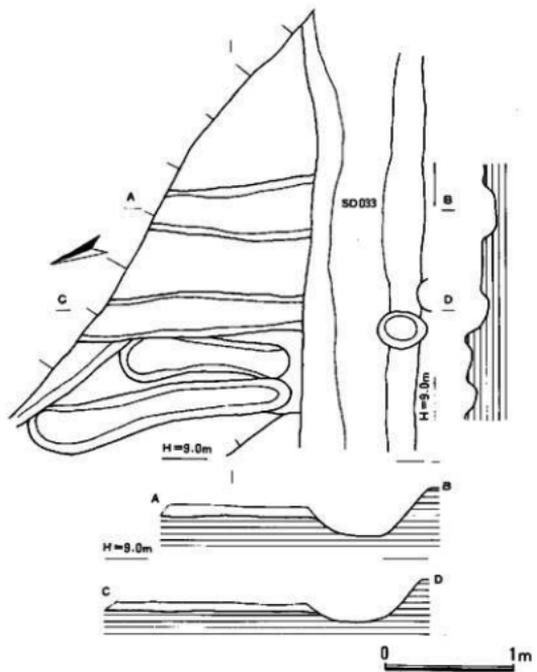
調査区西端で検出する。この溝は第32次調査SD-2002の南側延長にあたる。方位をN-5°Eにとり、SC038・SC044・SP499に切られ、SR034を切る。検出面で溝幅3.4m、深さ1m~1.2mを測る。掘り方は上面から40cm程一段掘り下げ、そこから幅2m・深さ80cm~1m・底幅1mの略逆台形に掘り下げを行っている。溝底は中央付近で10cm程深くなるが標高7.6m程度でほぼ平坦である。土層観察からは埋没途中での溝の掘りさらえは想定できるが、第32次調査のように明確な掘り直しは確認できなかった。遺物は土師器甕・把手・高坏、須恵器蓋环・甕・高坏、瓦がコンテナ12箱分出土しているが32次調査地点ほど瓦の種類・量は豊富でなく瓦当はない。32次調査では7世紀末~8世紀中頃に位置づけられているが、本地点の遺物から7世紀後半の掘削、埋没は一部9世紀の初頭にかかる可能性が考えられる。

出土遺物 (第36~38図)

129~143は須恵器である。129は坏蓋で天井部はヘラ切り未調整である。130はかえりを有し、天井部はヘラ切り未調整である。131~134は蓋受けを有する坏身である。131は屈曲部のみヘラ削りを行い、132・133は外底回転ヘラ削り、134はヘラ切り未調整である。135・136は高台付き坏である。136は高台が小さく坏部は短く外方に開く。137はすり鉢である。138は平瓶である。外底はヘラ切り未調整で胴部外面にはカキ目を施す。139は壺調部下半である。回転ナデによるが、底面及び屈曲部付近は手持ちのヘラ削りを行う。140~143は中・大型の甕である。144~147は土師器甕である。いずれも外面縦刷毛、内面ヘラ削りによる。148~156は瓦である。148~154は平瓦でいずれも焼成軟質である。148は凸面擬椀子の叩き、凹面竹状模骨と布目が残る。149~153は磨滅の進むものが覆いが凸面平行叩き、凹面布目が残る。149・151には竹状模骨痕が観察できる。また153は凹面に平行する青海波状の痕跡が残る。155・156は丸瓦である。155は軟質で凸面平行叩き、凹面竹状模骨・布目痕が残る。156は硬質の玉縁丸瓦で灰白色を呈する。凹面は縦方向の粗い指ナデを行い、凸面は叩きの後縦方向にヘラ状工具によるナデを行う

SD033 (第46図)

調査区西側で検出し、SX028を切ってほぼ南北方向に延びる溝である。溝幅70cm~1.2mを測り、溝底面は緩く弧を描く。また溝底標高は南端で8.25m北端で8.6mを測り、北面に向かって緩やかに傾斜している。遺物には土師器甕・把手、須恵器甕・蓋环が出土しており、7世紀初頭~前半に位置づけられる。



第40図 SD048 実測図 (1/40)

出土遺物 (第39図157~161)

157は土師器甕である。外面刷毛、内面ヘラ削りによる。158~161は須恵器である。158・159は坏身である。立ち上がりは短く内傾する。159は外底面回転ヘラ削り。160・161は甕である。161は頸部にヘラ記号を有し、胴部内面に青海波の当て具痕が残る。

SD040 (第4図)

調査区西端で検出する。SD032の西側をこれにほぼ並行してN-10°-Eの方位で南北に延びる溝である。溝幅90cm深さ25cmを測り、溝底面は緩く弧を描く。遺物は土師器・須恵器の小破片のみである。7世紀前半のなかで捉えることができる。

出土遺物 (第39図162)

須恵器の小型高坏の坏部破片である。2条の沈線を有する。外底面は回転ヘラ削りを行う。

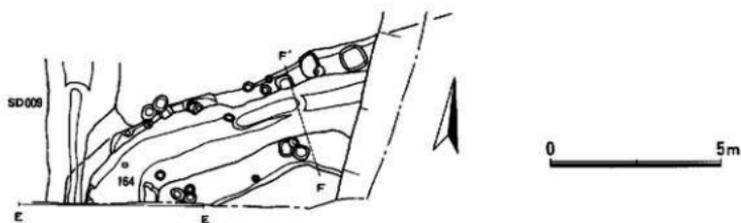
SD048 (第40図)

調査区西側北端部分で検出する。SD033の西側でこれに接して直角に延びる浅い溝が4条検出されておりこれをまとめてSD048と

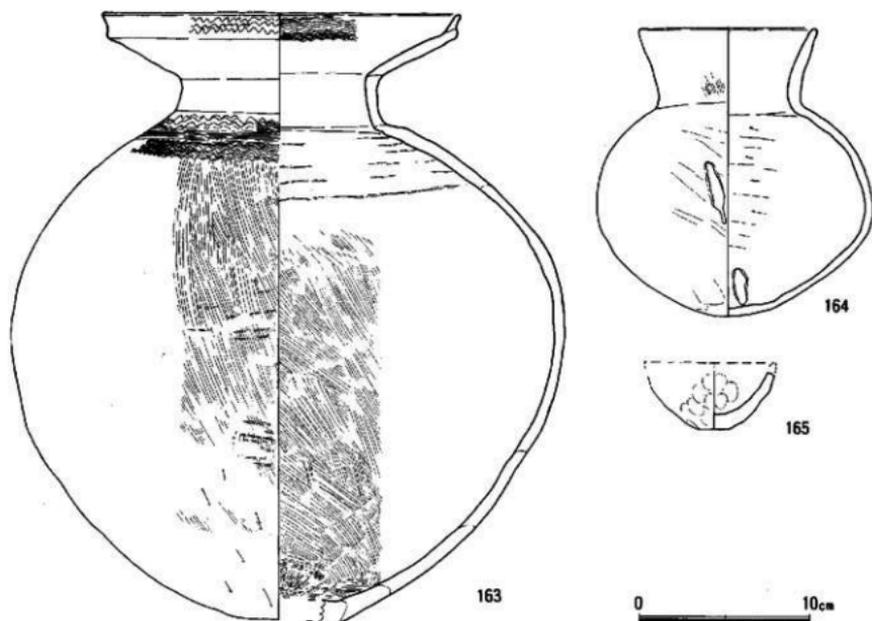
している。溝は南端のもので長さ2.1m、幅30cm、深さ10cmを測る。他の溝もこれに類似しいずれも埋土は黒褐色土である。また南から2条目の浅く短い溝を除くと、3条の溝は40cm間隔で並行している。道路遺構に伴う波板状凹凸面と呼ばれる遺構に似るが、硬化面は認められず凹凸面が存在する長さも2m程度しか確認されていないため明確な機能は明らかでない。しかしSD033との位置関係および各溝の配置・規模はこれに類するものである。波板状凹凸面の良好な例は福岡県小都市薬師堂東遺跡で検出されており、道路に伴う枕木状の遺構であると考えられている。出土遺物の大半を整理の段階で他の遺構出土遺物と混ぜてしまい詳細が不明となっているが、土師器甕、回転ヘラ削りを行う須恵器甕・須恵器甕等が出土しており、6世紀末~7世紀前半の幅のなかで捉えておきたい。時期的にはSD033と並行しこれと関連する遺構である可能性が高い。

方形周溝墓 (SX)

調査区内で2基を検出している。SX001は一部で認定に不安も残るが出土遺物・溝の形態等から方形周溝墓として報告する。



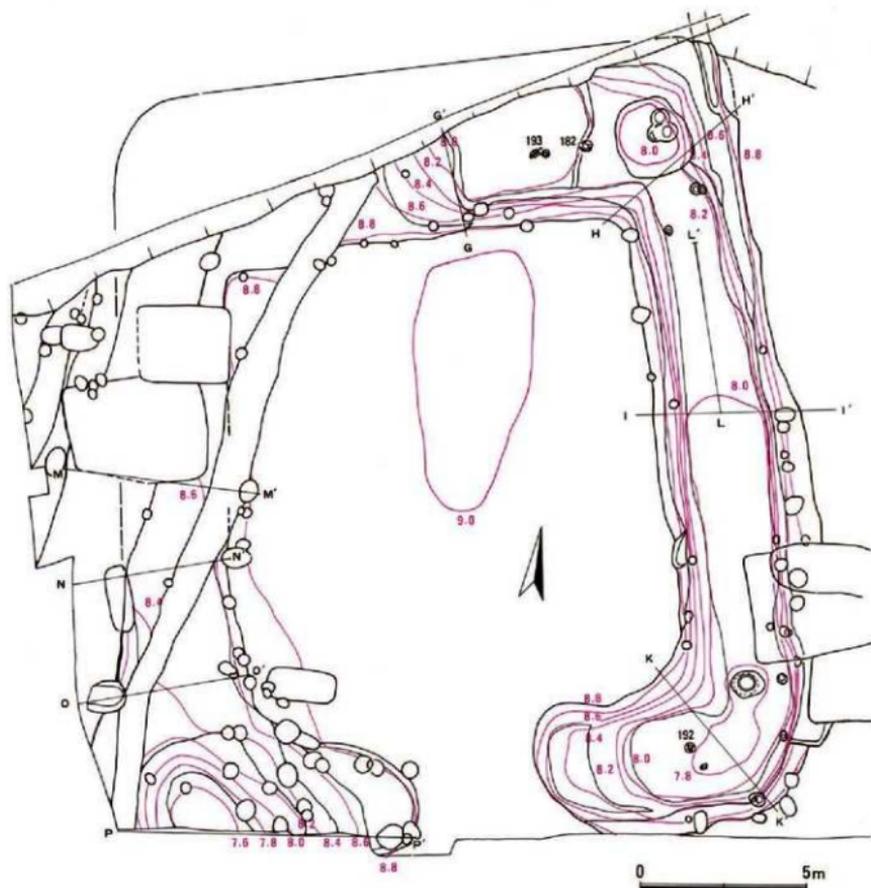
第41図 SX001 実測図 (1/150)



第42図 SX001 出土遺物実測図 (1/3)

SX001 (第41・31図)

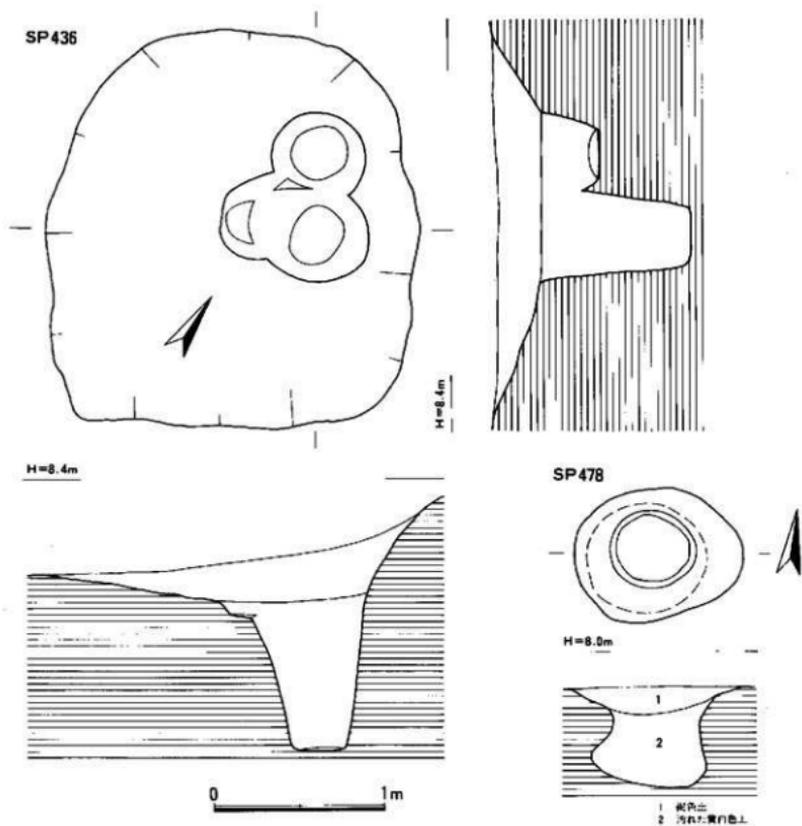
調査区南東隅で検出する。SD009を切りちようこの部分ではほぼ直角に折れ曲がる。方形に巡る溝の北西コーナー～北側的一部分と考えられる。溝幅は3m～3.2mを測る。掘り方は上段を20cm～50cm掘り下げ、その床面から更に断面逆台形に2段に掘り込んでいる。底面平坦であるが中央の落ち込み部分で標高8.95m、これより東側で8mである。またこれより西側は落ち込み直上部分では8.2m、コーナー部分では8.4mで緩やかに浅くなっている。底面幅はコーナー部分では幅1.3mであるが、直線部分では50cm程度と幅狭になっている。また土層F-F'では掘り直しが認められるが、コーナー部分の土層E-E'



第43図 SX028 実測図 (1/150)

においては確認できなかった。遺物は土師器甕・壺等がコンテナ3箱分出土している。コーナー底面から10cm程浮いた15層上面では完形の壺(164)が1個体出土している。

溝の一部分のみの調査で全体は不明瞭であるが、北西側で明らかに屈曲する事やコーナー底面からの遺物の出土等から方形周溝墓の可能性が高いと考えられる。なお東端部分で上段の内側が南に屈曲しているが溝の基底は東方向に真っ直ぐ延びているため、調査区東端部での溝の屈曲はないと考えられる。



第44図 SX028 周溝内ピット実測図 (1/30)

出土遺物 (第42図)

163は畿内系二重口縁壺である。全体に磨滅が進み調整が不鮮明な部分が覆い、口縁端部は短く外傾し内外面に刷毛状工具により波状文が施される。頸部は短くやや内径気味である。胴部はややなで屑気味であるが球形に近い。肩部には2段の波状文と横刷毛が行われているが切り合いから下段の波状文から上部に順に施文されている。胴部外面上半は縦刷毛、下半は叩き→刷毛→ナデの順で調整を行う。内面は上部1/5がナデ、以下は刷毛目による。底部は不安定なレンズ状の平底である。胎土は精良で鈍い橙色を呈する。164は略完形の直口壺である。口縁部内外面~胴部外面はナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りを行う。底部はやや突出気味の丸底である。胎土には径2mm程度の砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。胴部2箇所にも長細い穿孔が焼成後外面から行われる。165は手づくね碗である。内外面に指頭痕が残り、色調は灰白色を呈する。

SX028 (第43～46図)

調査区の東半部分を占める方形周溝墓で北端及び南西部の一部を除いてほぼ完掘している。周溝の外縁で東西方向21m南北方向復元長約24m、内縁で東西方向13m南北方向14.5mを測る。南側中央部分は幅3.5mで周溝が途切れる陸橋状の開口部を有する。溝の内側は周辺と比べ極端に遺構が少なくしかもほとんどが溝縁辺部分に偏っており(全体図参照)、土層からは確認できなかったが内側に盛土が行われていた可能性は極めて高い。また埋葬主体は欠失しており検出してない。

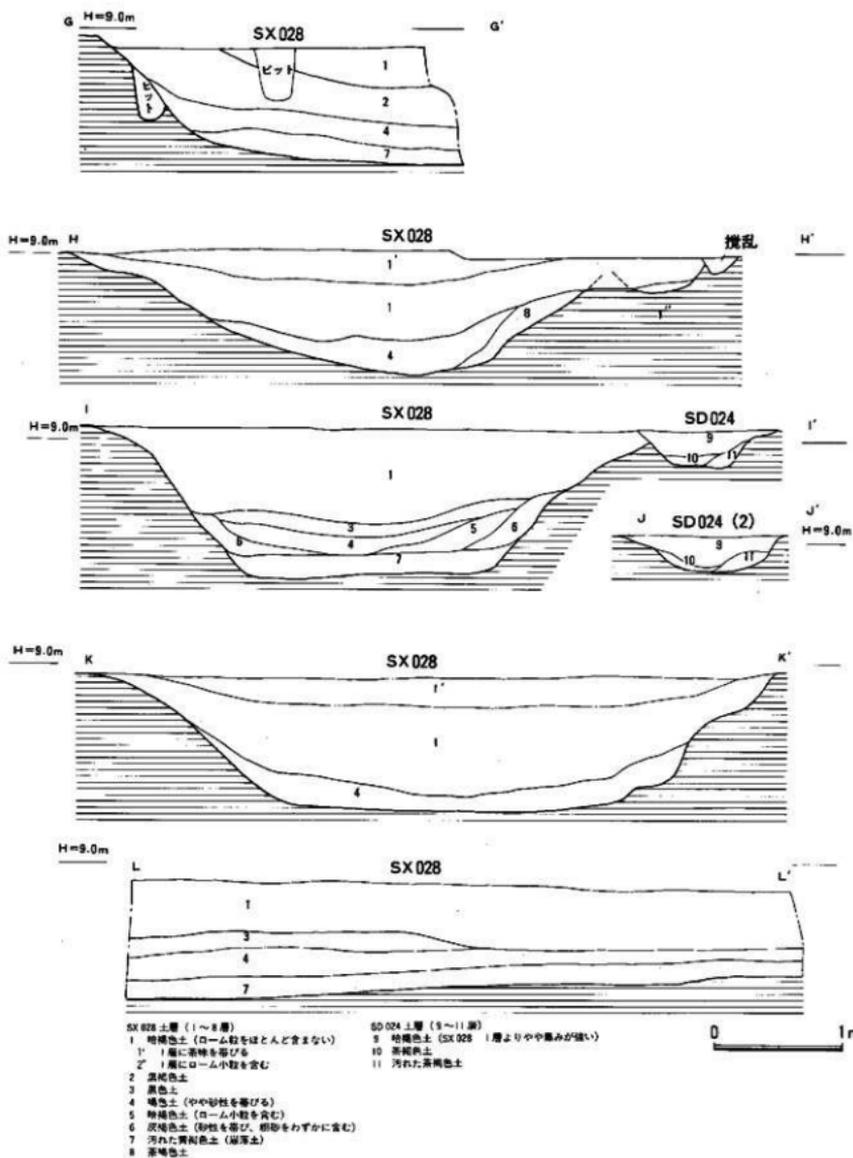
溝の掘り方は場所ごとに大きく異なり全体に均一でない。南東コーナーは開口部から一段平坦面を有して掘り込まれ、屈曲部底面が10cm程度周囲より窪んでいる。底面から深さ60cmのビット(SP478)を検出するが柱痕跡やビットに至るスロープ状の掘り込みは見られない。3層上面から口縁部を欠いた壺(192)が出土している。溝東辺はSD024とほぼ接しながら延びているが、出土遺物からSD024が後出するものと考えられる。溝幅3.2m～4.5mを測り、底面はほぼ平滑で断面は均整の取れた逆台形を呈する。底面の標高は南側で7.8m中央で7.9m北側で8.15mを測り、北側に向かって緩やかに高くなっている。北東コーナーには円形のスロープの東側に深さ80cmのビットを確認している。3基の切り合いのようであるが、埋土からの区別はつかず一括して掘り下げた(SP436)。SP436には柱痕跡は確認できなかった。方形周溝墓に伴う同様のビットが比恵遺跡群第36次調査で調査されている。比恵遺跡群の例は方形周溝墓の周溝コーナー部分に径60cmの木柱が立てられていたもので、幅70cm長さ3m以上の搬入用のスロープが掘削されている。SP436についても同様の立柱が行われていたものと考えられる。北辺はスロープの西側で床面が10cm程度掘り下げられており、その部分で床面から5cm程度浮いて二重口縁の土師器壺(182・193)が出土している。北辺の掘り込みは中央部からやや西よりで急激に立ち上がり、北西コーナーから西辺は検出面からの深さは20cm程度と非常に浅くなっている。またこの部分は南北溝032・033に切れ、溝のラインが非常に不明瞭となっているがおよそ幅4mを測る。最後に南西コーナー部分であるがここも開口部を挟んで対抗する南東コーナー部と同様に深くなっている。最深部で検出面から1.1m掘り込まれている。

土層は基本的にレンズ状に堆積し、一方方向からの流入は認められない。また人為的な埋め立て、掘り返しも行われていないようである。1・2層と3層の境で埋土が区別できここで遺物の取り上げも分けている。

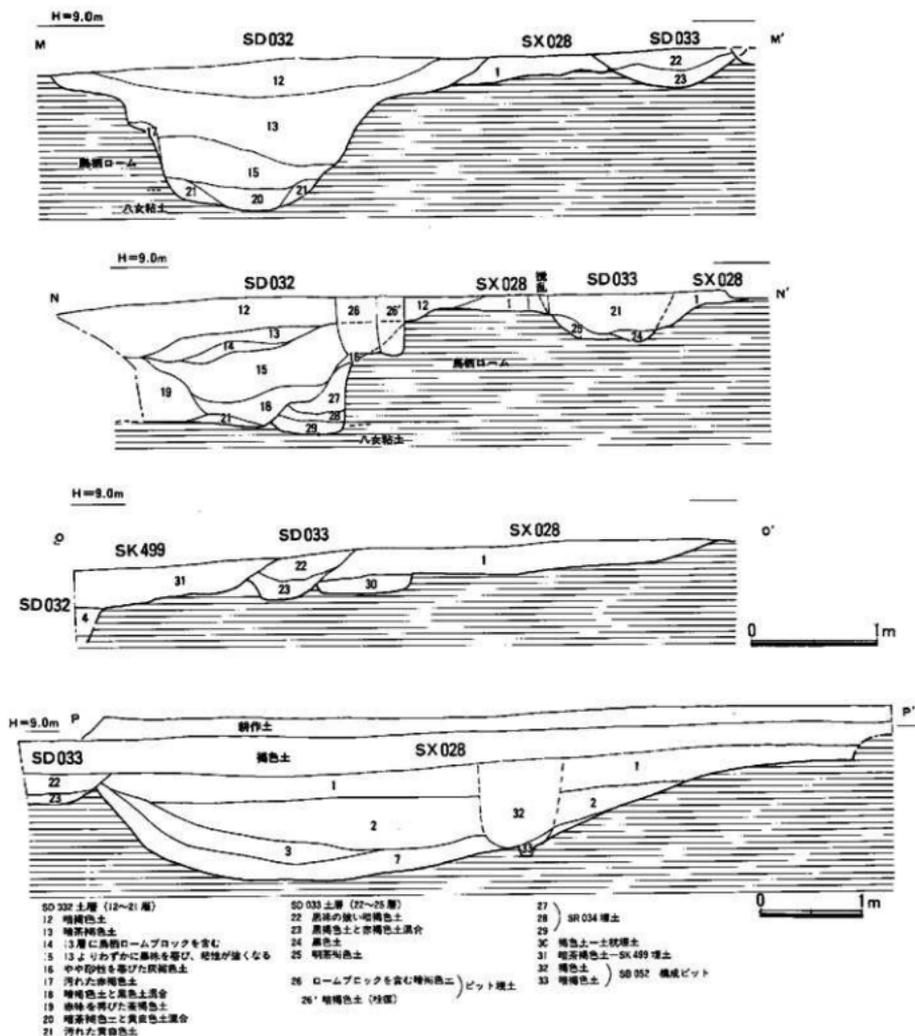
出土遺物はコンテナ42箱分出土している。遺物は1層(1・2層)と下層(3層～8層)で取り上げている。下層出土土器より古墳時代前期前半に掘削されたものと考えられる。また周溝の埋没は竪穴住居跡との切り合いから6世紀後半には少なくとも完全に埋没していたようである。しかし中世前期の遺構(SC038・044)も周溝内側にほとんど切り込んでいかなないことから、少なくともこの時期までは盛土が残っていた可能性が高い。

出土遺物 (第47～51図)

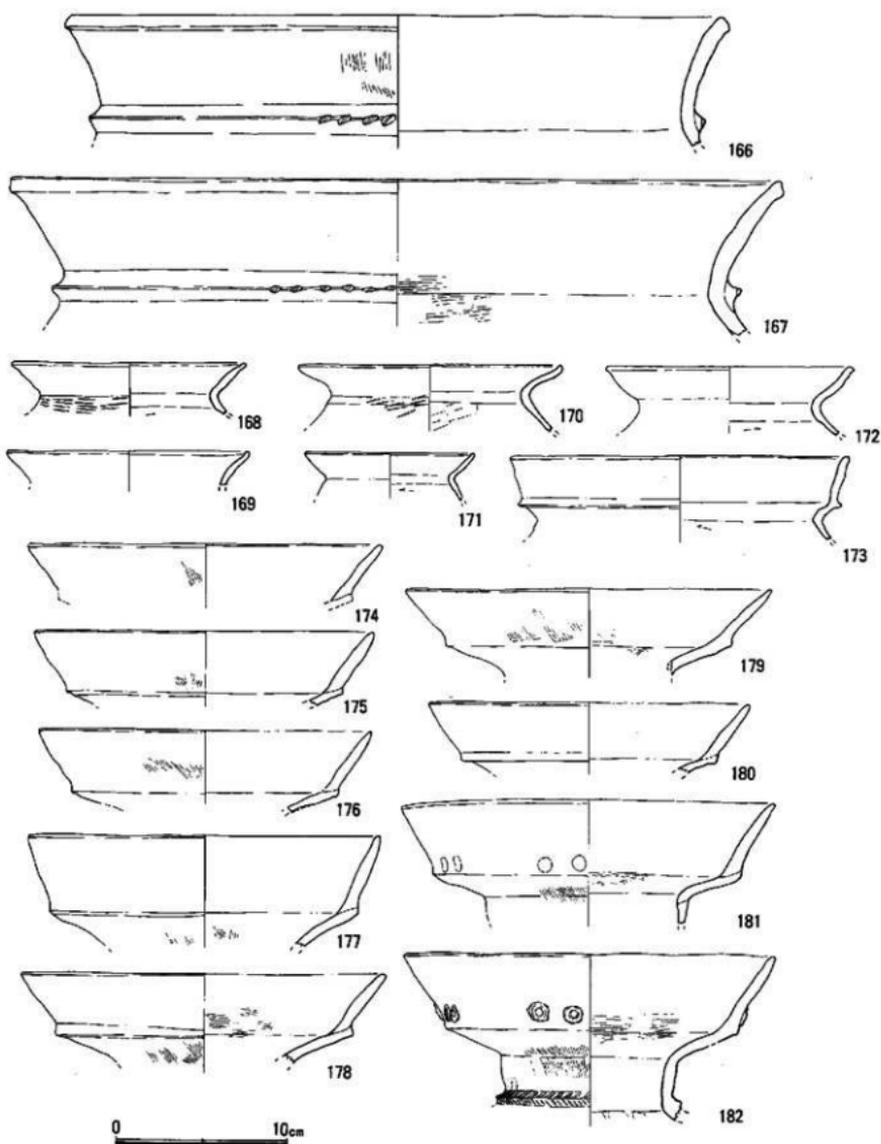
遺物は多量に出土しているが、下層からは周溝の掘削を示すと考えられる古墳時代前期前半の遺物が中心として出土し、上層からはこれに加え古墳時代後期の土師器・須恵器が多く出土しており、周溝の埋没時期を示すものと考えられる。166・167は弥生時代後期後半に位置づけられる頸口縁部である。頸部に刻みを有する断面三角形の突帯を貼り付けている。甕棺として使用されたものか。168～173は土師器甕である。出土遺物の中で甕の占める割合は小さく図示できるのも小破片のみである。168～170は庄内甕である。口縁端部を備かにつまみ上げ、168・170は外面に僅かに叩きの痕跡が残る。171・172は布宿甕である。171は小型甕の可能性もあるが胎土には径1～2mmの砂粒を含み口縁端部の調整からも小型の甕と考えられる。色調暗赤褐色を呈する。173は山陰系甕である。外面に煤が付着し



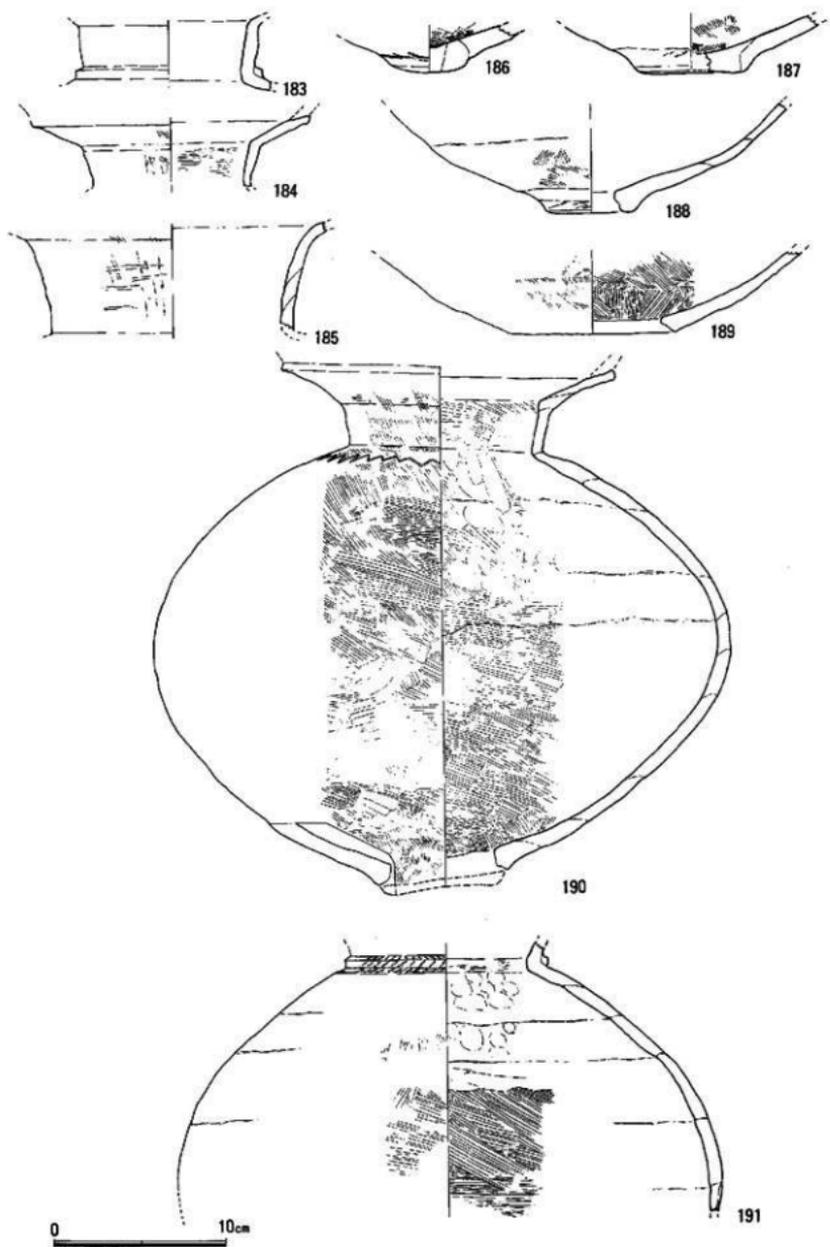
第45図 SX028(1)・SD024土層図 (1/40)



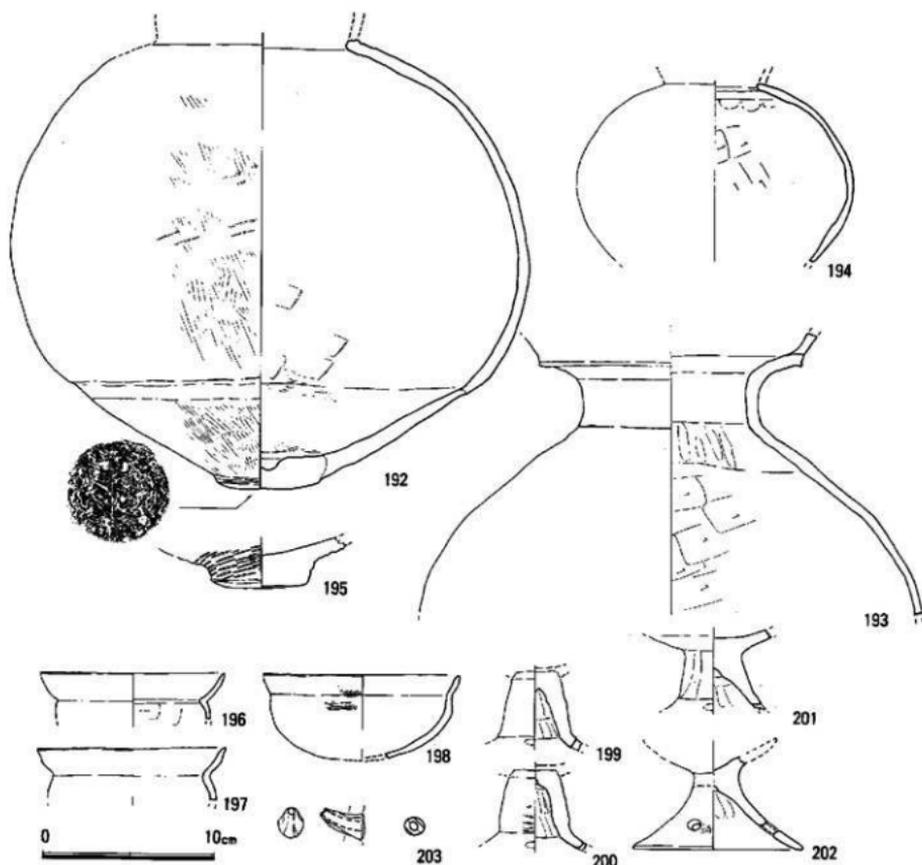
第46図 SX028(2)・SD032・SD033土層図 (1/40, 1/50)



第47图 SX028 下層出土遺物実測图1 (1/3)

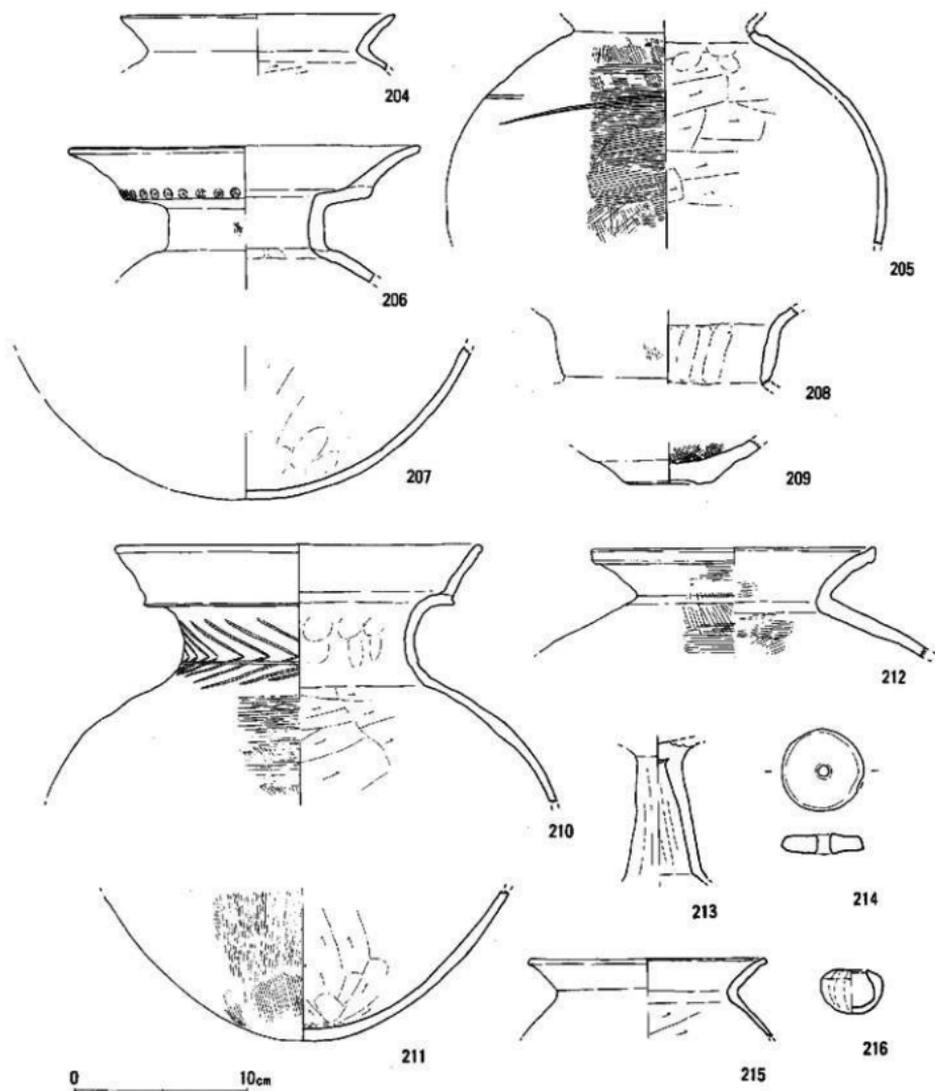


第48图 SX028 下層出土遺物実測図2 (1/3)

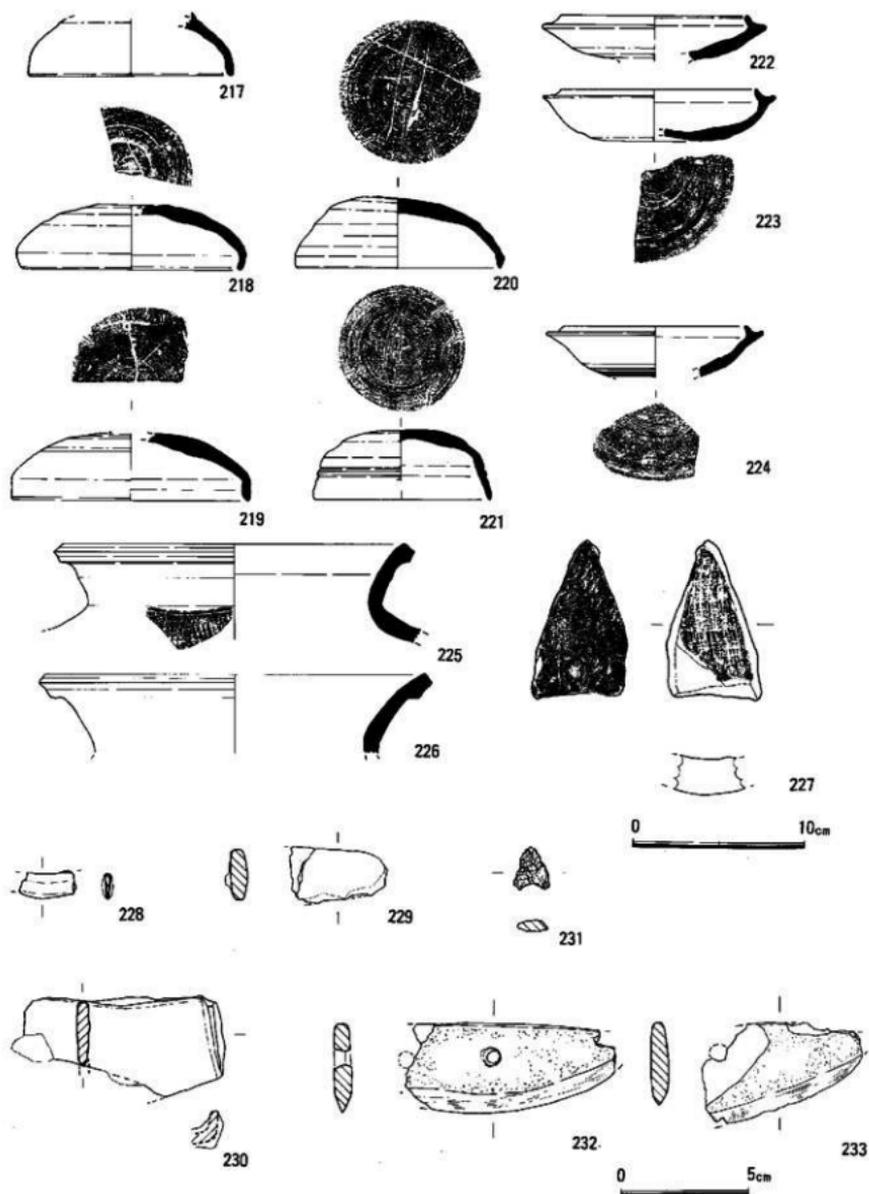


第49図 SX028 下層出土遺物実測図3 (1/3)

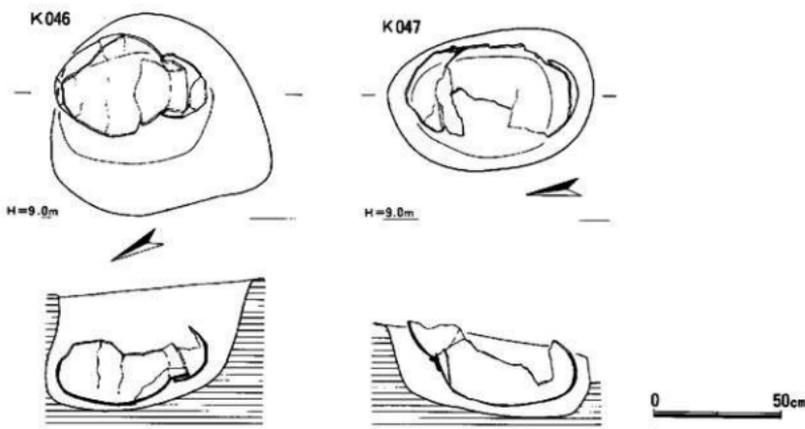
鈍い橙色を呈する。174～192は畿内系二重口縁壺である。全体的に胎土が精選され明るい橙色を呈するものが主体となる。174～185は口縁部～頸部の破片である。口縁部は屈曲部から長め・立ち気味に外側に開く。磨滅しており不明瞭であるが刷毛目が痕跡的に残っている。181・182には2個1組の竹管文を6組貼り付けているが181では全て剥落している。頸部は直立もしくは外傾し、182・183では胴部との境に断面三角形の突帯を貼り付ける。186～189は底部破片である。突出した平底を呈し、内面には螺旋状～斜め方向の刷毛目が残る。外面も斜めの刷毛を行う。188・189は底部を欠失しているが、磨滅が著しく穿孔かどうかは不明である。190は下層出土である。口縁部は屈曲部より上が剥落する。調整は全体に刷毛目により行われている。肩部には山形のシグザク文様が施される。また胴部内面の



第50图 SX028 下層出土遺物実測図4(1/3)

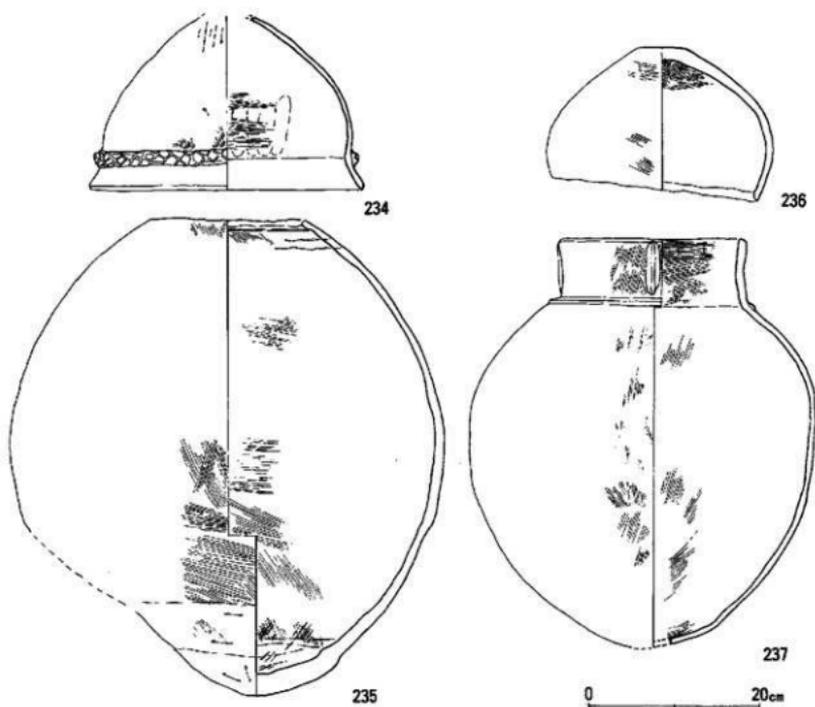


第51図 SX026 上層・上面出土遺物実測図 (228~233は1/2, 其他は1/3)



第52図 K046・047 実測図 (1/20)

上半は刷毛のち指ナデを行い、下半は横刷毛から底部付近は螺旋状の刷毛目となる。胎土は精良で明るい赤褐色を呈する。191は胎土色調は190と同じである。頸部屈曲部に突帯を貼り付け刻目を施す。192は胎土に2~4mmの砂粒を多く含み、くすんだ橙色を呈する。胴部外面は縦刷毛、内面は板ナデによる。底部より6cmほど上部に胴部との接合痕が残り、底部はやや不安定な突出した平底を有する。また底部外面に木葉痕が残る。193は山陰系の二重口縁壺である。外面は調整不明、内面は頸部は縦方向の指ナデ刷毛はへら削りを行う。胎土には径1mm程度の砂粒を多く含み、色調はくすんだ橙色を呈する。194は胎土の精選された直口壺である。磨滅が進み調整が不明瞭となる。195はV様式系の壺底部である。外面に粗い叩きが残る。色調は黒褐色を呈す。196~198は小型丸底壺である。199~201は穿孔を行う高坏である。202は小型の器台である。脚部3個所に穿孔を行う。203は注口部分の破片である。胎土は精選され明橙色を呈する。204~211はやや新相を呈する一群である。204は雙口縁部である。頸部内面はシャープに屈曲し胴部はへら削りを行う。胎土に赤色七粒を多く含む。205は布留甕である。胴部上部に横刷毛と沈線を施す。胎土には1mm程度の砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。206・207は接合しなが同一個体と考えられる畿内系二重口縁壺である。胎土は47・48図のものと同なり粗く2mm程度の砂粒をかなり多く含み、色調は黄白色を呈する。口縁部は開きが大きく外面に竹管文を押印する。頸部はほぼ直立する。また底部は完全な丸底である。208は頸部破片で3mm程度の砂粒を含み赤褐色を呈する。209は胎土は精選されているが底部がやや上げ底気味になる。210・211は同一個体となる山陰系の二重口縁壺である。胎土には1mm程度の砂粒及び雲母を含み、色調は灰白色を呈する。頸部に沈線を施し綾杉文様を刻む。胴部は外面刷毛目、内面へら削りを行う。212は土師器甕である。口縁形態は須恵器甕に似る。胴部内外面は刷毛目による。213は長脚の高坏である。214は下層出土の土製紡錘車である。215・216はSP478出土遺物である。215は庄内甕である。胎土には径1mm程度の砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈する。口縁端部はやや肥厚させる。胴部は外面叩き、内面は頸部やや下からへら削りを行う。216は完形のミニチュア壺である。胎土は精良で灰白色を呈する。217~226は上層出土須恵器である。蓋は回転へら削りを行う。227は上層出土瓦破片である。焼成は軟質で凸



第53図 K046・047 出土遺物実測図 (1/6)

面は叩きを行い、凹面には布目が残る。228～230は鉄器である。228は上面出土で湾曲する薄手の不明製品である。229は上層出土で基部の一部か。230は鉄刃で端部の折り返しが残っている。231～233は上層出土の石器である。231は黒曜石製の鎌。232・233は石包丁である。232は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で孔間3.3cmである。233は立岩産か。

甕棺墓 (K)

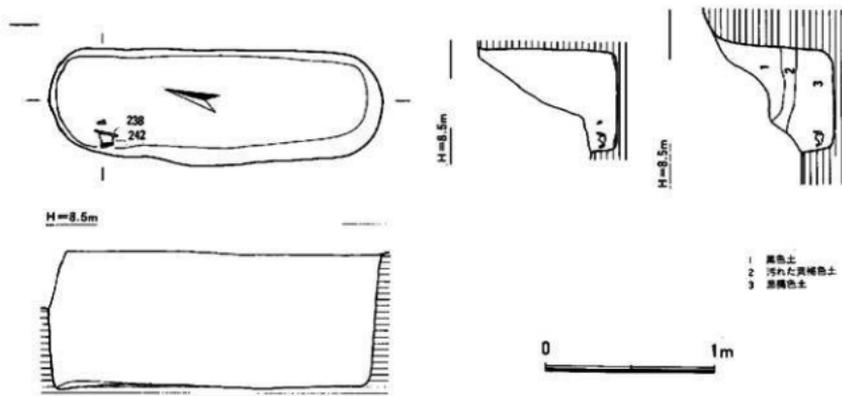
2基検出している。いずれもSX028と同時期でこれに伴うものと考えられる。

K046 (第52図)

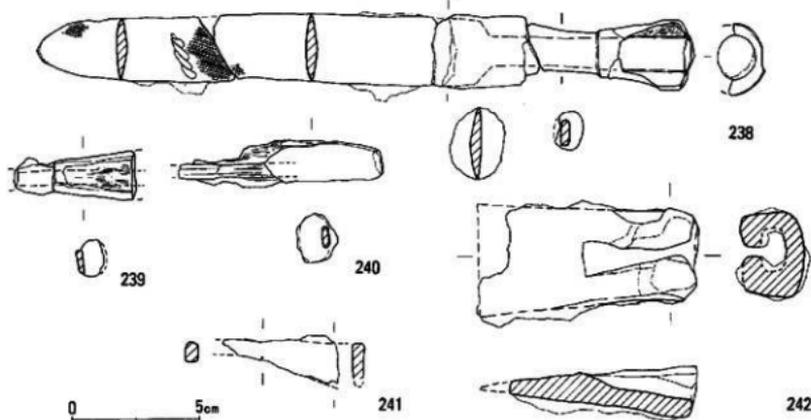
調査区西端で検出し、SX028西側周溝外に位置する。主軸方位をN-9°-Eにとる。上面は削平され失われているが、墓坑は検出面で80cm×55cmの長円形を呈する。上甕は鉢で下甕は頸部から上を打ち欠いた甕の胴部を使用している。

出土遺物 (第53図234・235)

234は上甕の鉢である。頸部に突帯を貼り付け、ヘラ状工具により×形の刻みを施す。外面上半は縦刷毛の後磨き状にナデつけ、下半はヘラ削りを行う。内面上半は横刷毛、下半はヘラ状工具による粗



第54図 SR034 実測図 (1/30)

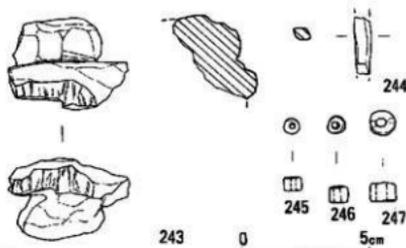


第55図 SR034 出土遺物実測図 (1/2)

いナダを行う。胎土には径1mm程度の砂粒を含む。235は下甕に使用された壺の胴部である。直口を呈すると思われるが使用にあたり口縁部を打ち欠いている。胴部は下彫れの胴部に突出する厚手の底部が接合する。調整は胴部は内外面刷毛目による。底部は外面刷毛ののち粗い板ナダを行い、内面には当て具状の痕跡が残っており底部は粘土塊を押し出して作りだしたものと考えられる。胎土には3mm程度の砂粒を多く含み、色調は鈍い赤褐色を呈する。

K047 (第52図)

調査区南端で検出し、SX028南側開口部に位置する。主軸方位をN-26°-Eにとる。墓坑は検出面で径



第56図 その他の遺物実測図 (1/2)

80cmの歪な円形を呈する。上甕は壺胴部下甕を用い、下甕には完形の甕を使用する。

出土遺物 (第53図236・237)

236は上甕に使用された甕の下半部である。底部は小さな平底をなし、胴部最大径の位置で打ち欠きを行う。胎土は精良で鈍い橙色を呈する。磨減が著しく不明瞭であるが外面横～斜めの刷毛、内面は底部付近が螺旋状の横ナデで他はナデによる。237は下甕の直口甕である。口縁部に一条縦方向に長さ6.5cm、幅1.7cm、断面三角形の突帯を貼り付けている。頸

部に断面三角形の突帯を貼り付け、胴部は長胴で丸底を呈する。調整は外面縦刷毛、内面は口縁部横刷毛・胴部斜め方向の刷毛目を行う。胎土には径2mm程度の砂粒を含み、色調は鈍い橙色である。

土坑墓 (SR)

副葬品を伴い埋葬墓坑と認定できるのはSR034のみである。形態的に014・037も埋葬遺構の可能性はあるが、副葬品はみられず不確定であるためこれらの遺構は土坑の項で報告する。

SR034 (第54図)

調査区西端で検出する。上部をSD032に削平される。長軸1.95m、短軸0.7m、深さ0.8mを測り、掘り方平面は隅丸長方形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、底面は北側小口部分が僅かに傾斜するが全体に平坦にそろえられている。遺物は刀子・斧の副葬品の鉄器が西側小口付近に掘えられている。土器は小破片が2点出土するのみである。隣接する63次調査SR008と同様の土坑墓でこれは弥生時代後期の遺構と想定されている。本例の鉄器組成もこれに矛盾しないと考えられる。

出土遺物 (第55図)

238はほぼ完存する長茎の短剣である。全長25.5cmで身部は長17cm、幅2.6cm、厚み6mmを図る。身部には掘り金具及び布痕が残っている。また関～柄部分には木製の刀装具が鉄錆におおわれて残っている。239・240は不明の製品であるが、茎状の鉄製品とこれを包む木製品であろうか。241は鉄製刀子の関から基部であろうか。242は袋状鉄斧である。基部から刃部にかけて直線的に開く。袋部は折り返し部が開き、断面は長方形に近い。

その他の遺物 (第56図)

243はSD002出土遺物で報告もれていた。滑石製の把手破片であるが破損しているため転用されているかは不明である。244～247は検出而出土である。244は茎状の鉄製品である。245～247は滑石製口玉である。

小結

1 遺構の時期別変遷

本調査では弥生時代後期～中世後期の遺構遺物を検出した。まとめに変えてここでは周辺で行われた第63次調査(本書報告)・32次調査・34次調査とあわせて時期毎の遺構変遷を簡単にたどり、まとめに変えたい。

62・63次調査地点の特徴として削平が少ないことが指摘できる。34次調査で那珂八幡古墳周濠～墳丘の土層図(第365集P86D-D')を参照すると墳丘下で造営直前の遺構面(7層上面)が検出されている。これは古墳造営時(古墳時代初頭)の当時の生活面を示しており、以後の攪乱を全く受けていないレベルである。62次調査地点東端部との比高差は約20cmであり、62次地点の甕棺の削平状況を見ても耕作等による一般的な削平・遺構消滅は非常に少数であったと考えられる。したがって方形周溝墓壘土等を除いて、掘り込みを伴うものについては新たな遺構掘削に伴い前代の遺構が消失する以外は旧状を比較的良好に残していると考えられる。このことを前提として遺構の変遷をたどりたい。

1期(弥生時代後期)

62次・63次両地点(以下「本地点」)で遺構が確認される時期である。これ以前の中期段階の遺構は確認されていないが、34次の周濠内からは多くの遺物が出土しており、該期の集落は本地点の東側に営まれていたものと考えられる。1期の遺構は62次:SC036・SR034、63次:SR008がある。遺構はいまだ非常に少数であり面的な広がりを見せていない。しかし32次・34次地点ではこの時期の井戸が14基検出されており、1期の生活遺構が前段階とは地点を変え本地点の東隣にまで広がりを見せているようである。なお本地点の遺構は希薄であるが2基の埋葬遺構は主軸をほぼ揃え、方形周溝墓の縁辺に位置するなど注目すべき点が多い。

2期(古墳時代初頭～前期前半)

生活遺構が廃絶され墳墓が形成される時期で那珂八幡古墳に引き続き方形周溝墓が構築される。34次地点で那珂八幡古墳の周濠が確認され、鍵形の墳形が復元されている。造営は庄内式併行期でトレンチ調査の結果直前まで集落が営まれていたことが確認されている。これよりやや遅れて前期前半布留式古段階併行期に62次: SX001・SX028、63次: SX002の方形周溝墓が構築される。方形周溝墓の配置は極めて企画的で62次: SX028、63次: SX002は共に南側が開口し並行して配置され、周溝外側からの間隔は約15mで方形周溝墓の内法の長さにほぼ一致している。また62次: SX001とSX028は千島に配置されており墳墓相互の関係に高い企画的性をみることが出来る。この際企画的基準となるのが62次: SD009、32次: SD3004と考えられる。これらの溝は那珂八幡古墳造営に前後して掘削された溝である。SD009は32次地点では溝の延長部分が確認されておらず詳細は不明であるが、直線的に延長すると那珂八幡古墳前部前面にほぼ接する位置に当たっている。切り合い関係からSD009は方形周溝墓構築時には大半が埋没していたものと考えられるが、この延長方向が墳墓の構築企画を規制したものと考えられる。またSD3004は溝壁間約6mでSD009と平行しこの延長部分が62次: SX028の東側肩に一部残っている。浅い溝であるが掘削時期もSD009にほぼ同じと考えられ、62次: SX028、63次: SX002の東溝に接して伸びていることから、これらの構築に影響を与えていると考えられる。なお方形周溝墓内側には壘土が存在していたと考えられるが、遺構の後世の遺構の有りかたや溝理土にブロックが混入していない事などから、壘土は比較的低く周溝内面端から1～2m程度引いた内側に構築されたものと考えられる。この際主軸部は壘土内に構築された可能性が高い。また中世遺構の有りかたから少なくとも中世前半期までは壘土は残っていたと考えられる。

3A期(6世紀後半～7世紀中頃)

集落が再び大規模に営まれる時期である。2期と3期の間は遺構・遺物がほとんど認められず、遺跡群全体を通して集落が衰退しており、本地点周辺では前期の墳墓のみが存在している様な状況が復元できる。3A期は古墳時代後期～終末期にあたり、本地点検出の竪穴住居の大半及び掘立柱建物等の生活の殆どがこの時期に当たる。32次・34次地点では殆ど確認できていないが瓦がまとまって出土したSC3014等注目すべき遺構が確認されている。集落は本地点から東側を中心に広がりを持つものと考え

えられる。なお本期の遺構は方形周溝溝の周溝状にまで形成されており、盛土を残して周溝部分は本期以前にすでに埋没している。上層埋土に混入物が殆ど見られず均一な層を形成していることから、2期と3期の間の遺構廃絶時に自然堆積により埋没したものと考えられる。溝も数条掘削されているが、62次:SD048など詳細は不明ながら波板状凹凸面とされる道路遺構の一部に類似した遺構も検出されている。この遺構は類例では官衙・寺院など公的な施設に関連するケースも多く、那珂遺跡群での本期の瓦の出土とも考え合わせると興味深い遺構である。また62次:SD026は本期の最末の遺構で生活遺構がほぼ廃絶された後に形成されている。遺物の出土状況から埋葬に伴う祭祀関連の遺構と考えられるがこれに伴う埋葬主体がSK014等に可能性が考えられるが明らかでない。

3B期 (7世紀中頃～8世紀)

62次:SD032、63次:SD001、32次SD2001が掘削される。本地点から300m北側の8次調査SD01もこれの延長部分の可能性が高い。掘削・埋没時期には不明な点もあるが、7世紀後半代に8世紀前半の遺物が主体を占める。本地点ではこれ以外の遺構は確認されていない。3A・B期共に那珂遺跡群内に互が供給され、官衙的様相を表す遺物として注目されている。

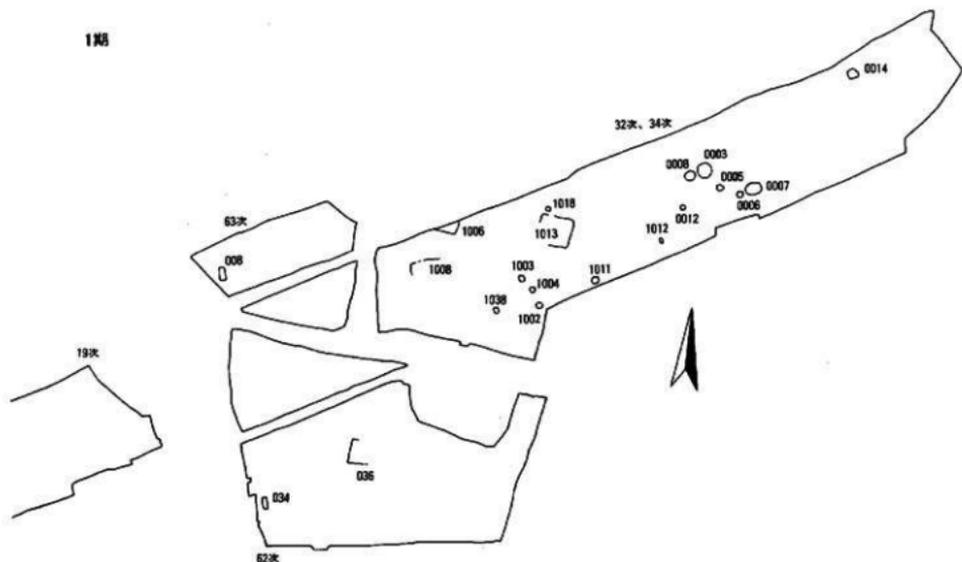
4A期 (12世紀～14世紀)

4期は中世にあたり前半と後半に分けることが出来る。4A期は本地点では62次:SC038・044の竪穴及び木棺墓の可能性のあるSK014、63次:SR009がある。32・34次地点では井戸3基・道路状の溝2条を検出している。

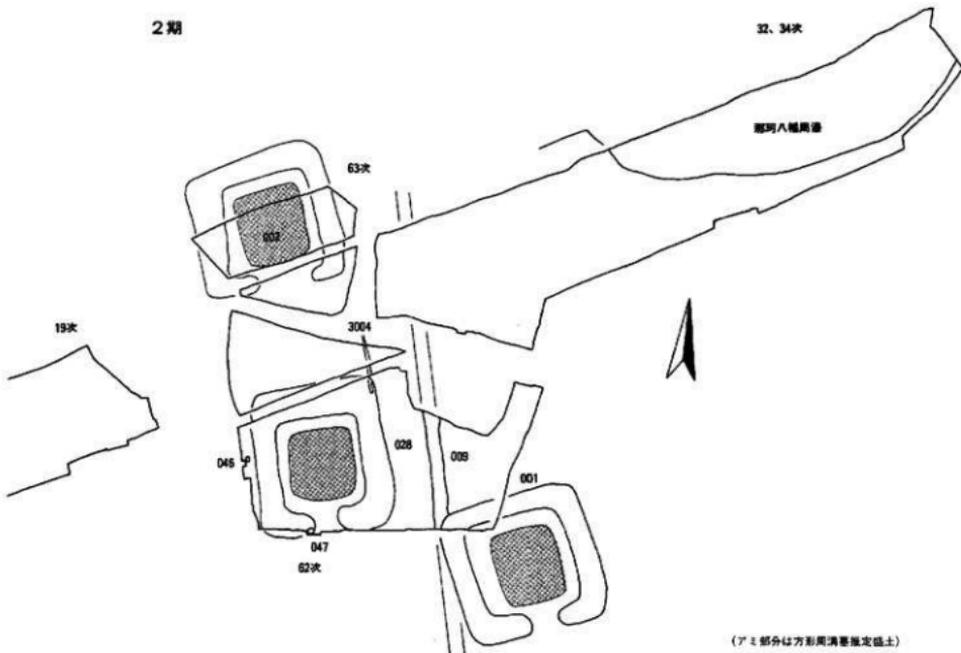
4B期 (16世紀)

63次:SD006、32次・34次:SD3001・1001・1010・0001・0009・0010がある。那珂八幡古墳は埋没がかなり進んでいる。またSD1001と平行するSD3001も本期の可能性が考えられ、屋敷を区画する溝の可能性もある。しかし溝以外の遺構は確認されておらず、詳細は不明である。

1期



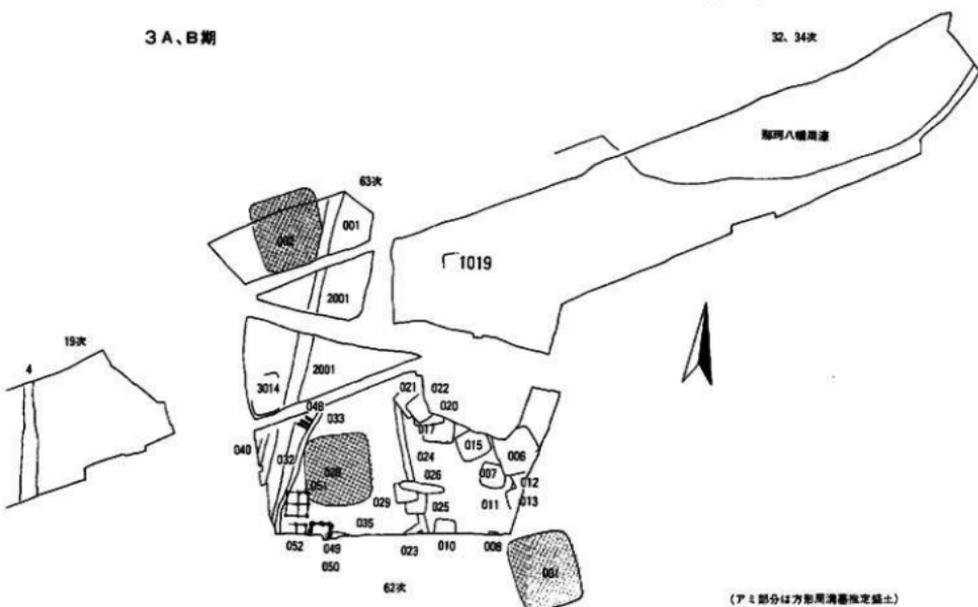
第57図 第62・63・19・32・34次調査時期別遺構変遷図1 (1/800)



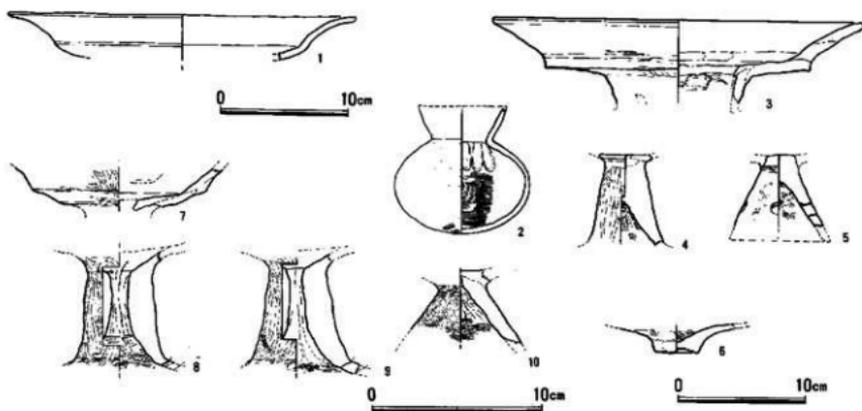
第58図 第62・63・19・32・34次調査時期別遺構変遷図2 (1/800)

3A、B期

32、34次



第59図 第62・63・19・32・34次調査時期別遺構変遷図3 (1/800)



第60図 那珂八幡古墳出土遺物実測図 (1~6 34次周溝 S=1/4
7~10 6次墳頂 S=1/3)

4 那珂八幡古墳の編年の位置付けと比恵・那珂遺跡群における土器祭祀の変遷について

本報告の那珂62・63次調査によって、那珂八幡古墳の周囲に方形周溝墓群が展開することが明らかとなった。ここでは、墳墓群の中心であろう那珂八幡古墳の編年の位置付けを考えてみたい。土器は第60図に掲げたが、これらは既報告資料を新たに実測または加筆して再トレースしたものである。

まず古墳の施設の上限は、南側周溝下部から検出された井戸(那珂34次SE03・05)の土器群の時期から、筆者(久住)のII期(1998年10月、第18回庄内式土器研究会発表「北部九州における庄内式併行期の土器様相」、近日中に論文発表予定)となる。一方、墳墓群の第2主体層より方上部から出土した土器は(第60図7~10)、7~9が庄内式系でも伝統的V型式系統法(ⅡB系統)の高坏、ⅣB系統の小形器台である。いずれもIB期に比定できる。前者の高坏は水澱しに近い傾斜な胎土であるが、形式上はB系統である点が古い要素である。型的にもIB期の那珂40次SC16の高坏と類似する。もとより、B系統土器群自体さらに新しい時期まで残るが、他の遺跡に比べて比恵・那珂遺跡群では、IIA期以降は減少する。特に無彫的なコンテクストでは、高坏はよりシャープな作りや庄内または布留式系のもの(高坏C・D)に置換する。なお以上の土器は、破片での出土状況などから、本来は中心の第1主体時の祭祀土器であったと考えられる。破片ではあるが彫刻は少なく、かつ高坏の胎土が非常に精良で、褐色の地に黒色の横線があることや、小形器台も赤形があることなどからやはり古墳祭祀に伴うと判断してよい。また古墳構造直前の弥生終末のこの地区の集落は、在来系土器主体であり、このような外來系の祭祀土器が偶然墳墓群に混入する可能性は少ない。なお第60図3の二重口縁壺も、B系統であり、頸部が短い特徴や、同図6の突出する底部の特徴から、「布留0式」併行(IIA期)の那珂62次SD028方形周溝墓のC系統の二重口縁壺よりも一時期古いのは疑いない。同図2の小形器台も、最初期の精製器種B群(C系統)の特徴を備えるが、形的にはやはりIB期である小都市津古2号墳に類似がある(10の小形器台も同様)。4~6もB系統の高坏・小形器台であり、同図1の在来系(A系統)の高坏と合わせて簡単に混入しては片づけられない。以上のように那珂八幡古墳は、「布留0式」以前の庄内式段階(II期)に築造された公葬であろう。もちろん那珂八幡古墳は九州最古の六墳となり、その意義は計り知れないだろう。

IB期の方形周溝墓である比恵SD01の土器群は、B系統(伝統的V型式系)主体で、一部C系統と少数のA系統が共存する。これは那珂八幡古墳と同じ組成である(土器祭祀第1類とする)。同じIB期でもやや新しい(一部IIA期)比恵6次第1号古墳(周溝?)周溝下層の土器群は、C系統とB系統の土器群が平々であり、すでに精製器種B群を一部併用(第2類)。次に、IIA期の那珂41次SD07方形周溝墓では、C系統の精製器種B群の小形器台と布留式系(ⅡD系統)の底口壺があり、B系統の壺1点(袋H)も含む(第3a類)。この次に那珂62次SD028方形周溝墓があり、IIA期に属する多数の二重口縁壺(C系統)と、精製器種B群土器や燻などのC・D系統の土器群からなる組成が見られる(第3b類)。ここでは、少数の二重口縁壺に底部穿孔が見られるが、この延長上に、時期はIIA期の神内であるが、津古生排古墳のような底部穿孔の二重口縁壺を多数供給する祭祀形態が成立する(第4類)。なお第3a・b類は、第4類成立後もより下位の墳墓の土器祭祀形態として継続する。形式的にはII期(布留0式から1式の過渡期)と考えられる那珂62次SX001方形周溝墓と那珂63次SX002方形周溝墓は第3a類であり、博多62次方形周溝墓は第3b類に近い。また今年度報告の那珂9次SD04方形周溝墓は、時期はII C期(布留1式併行併用)と考えられ、二重口縁壺多数の第3b類、もしくは底部穿孔の率が高いことから第4類としてもよい。以上、比恵・那珂遺跡群を中心とした、墳墓における土器祭祀の変遷を概観したが、遂に、より上位の那珂八幡古墳がIIA期であるならば二重口縁壺多数の第3b類または第4類であるべきにも関わらずそうでないのは(ただし、他の遺跡や地域と同じとは限らない)、やはりIB期の築造になることを導いていると見てよい。

(久住純雄)



写真2 調査区東半全景（西から）



写真3 調査区西半全景1（北から）



写真4 調査区西半全景2 (北から)



写真5 掘立柱建物群 (北から)



写真6 SC006 (南から)



写真7 SC013 (南から)

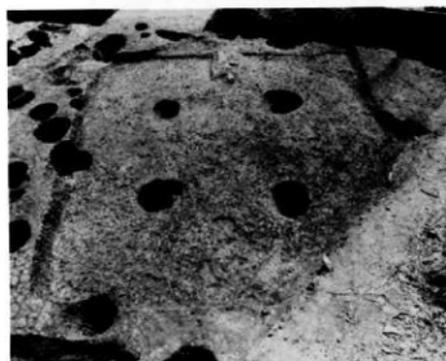


写真8 SC015 (東から)



写真9 SC015 竈 (東から)



写真10 SC017 (南から)



写真11 SC021 (南から)



写真12 SC022 (南から)



写真13 SC036 (南から)



写真14 SD009 土層 (B-B')



写真15 SD009 土層 (C-C')

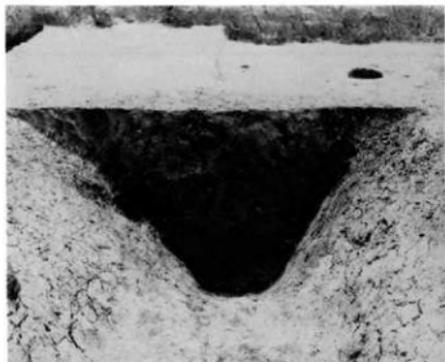


写真16 SD009 土層 (D-D')



写真17 SD009 遺物出土状況 (108)



写真18 SD024 土層 (I-I')



写真19 SD026 (北から)



写真20 SD032 (北から)



写真21 SD032・SD033・SX028 土層 (M-M')



写真22 SD032・SR034 土層 (N-N')



写真23 SD048 (南から)



写真24 SX001 土層 (F-F')



写真25 SX001・SD009 土層 (E-E')



写真26 SX001・SD009 切り合い部分 (北東から)

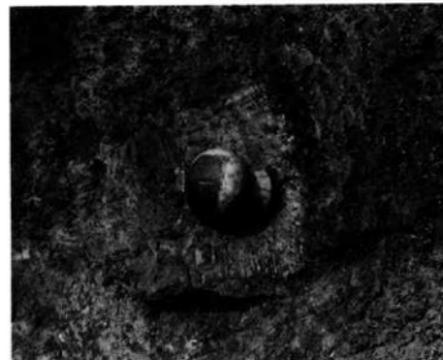


写真27 SX001 遺物出土状況



写真28 SX028 土層 (G-G')



写真29 SX028・SD024 土層 (I-I')



写真30 SX028 土層 (H-H')



写真31 SX028 土層 (K-K')



写真32 SX028・SD033 土層 (O-O')



写真33 SX028・SD033 土層 (P-P')



写真34 SP436 1 -SX028 周溝内- (北から)

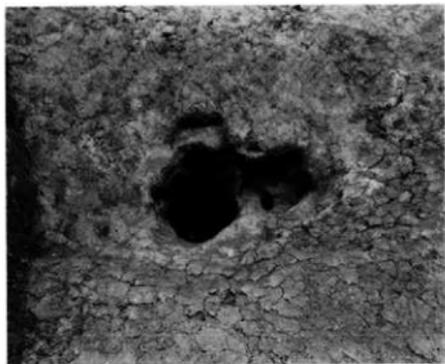


写真35 SP436 2 -SX028 周溝内- (東から)

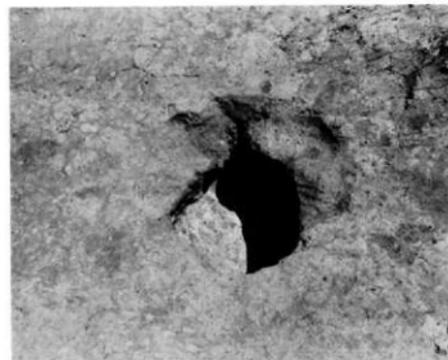


写真36 SP478 -SX028 周溝内- (北から)



写真37 SX028 東辺周溝 (北から)



写真38 SX028 北辺周溝 (東から)



写真39 SX028 南辺周溝 (東から)



写真40 SX028 北辺周溝遺物出土状況

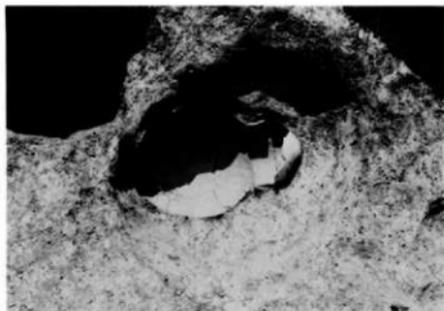


写真41 K046 (西から)



写真42 K047 (西から)



写真43 SR034 (南から)

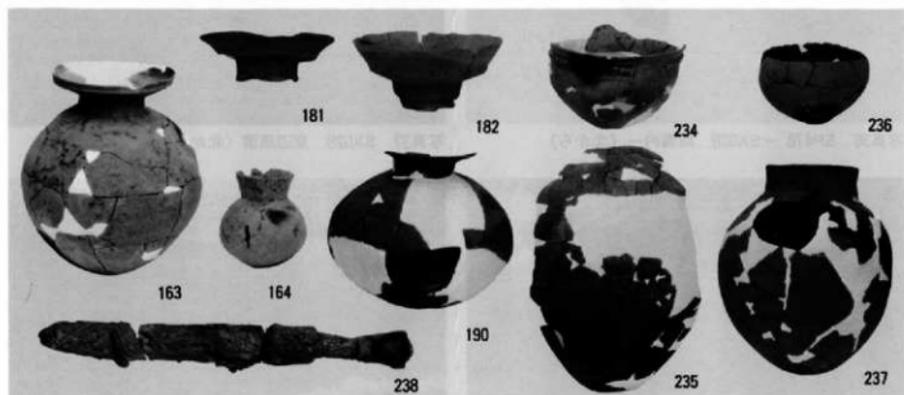


写真44 出土遺物

那珂遺跡群 第63次調査報告



写真1 調査区周辺風景（中央は那珂八幡古墳）

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成9年5月26日付けで徳田好美氏より本市教育委員会宛てに博多区那珂1丁目792-1（面積：772.99㎡）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された（事前審査番号：9-2-82）。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることや、南側隣接地で都市計画道路竹下駅前線建設に伴い第32次調査が実施されていることから事前調査が必要であると判断し、同年6月19日に試掘調査を行った。その結果、地内全面に遺構が存在することが明らかとなった。この試掘成果をもとに両者で協議を行ったところ、地内北西側の建物建築部分については盛土によって遺構保存が可能であるが、道路に隣接する南東部分225㎡の駐車場部分については道路面までの地下1fが必要で遺構の破壊が回避できないため、その部分を対象とした本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、同年6月30日より発掘調査、翌平成10年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで徳田好美氏をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 徳田好美

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 柳田純孝（現任） 同課調査第2係長 山口譲治

調査職務 埋蔵文化財課 河野淳美（前任） 文化財整備課 谷口真由美（現任）

事前審査 埋蔵文化財課主任文化財主事 松村道博（前任） 同課事前審査係長 田中壽夫（現任）

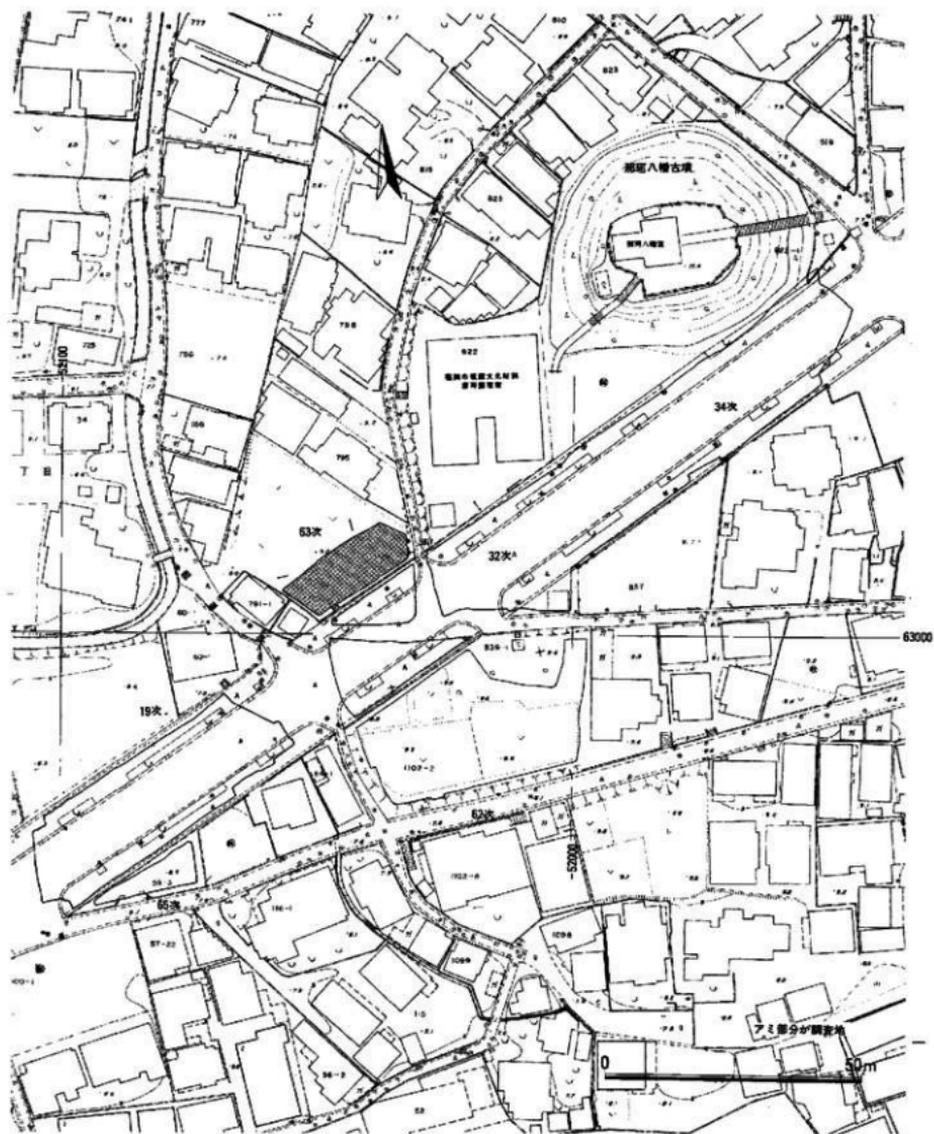
同課事前審査係文化財主事 屋山洋

調査担当 同課調査第2係文化財主事 榎本義嗣

整理作業 西島信枝 松尾真澄

調査作業 金子國雄 熊本義徳 坂田武 渋谷博之 俵寛司 石橋テル子 金子澄子 唐島栄子

瀧井康恵 杉村百合子 辻美佐江 永松伊都子 永松トミ子 H尾野典子 森教子



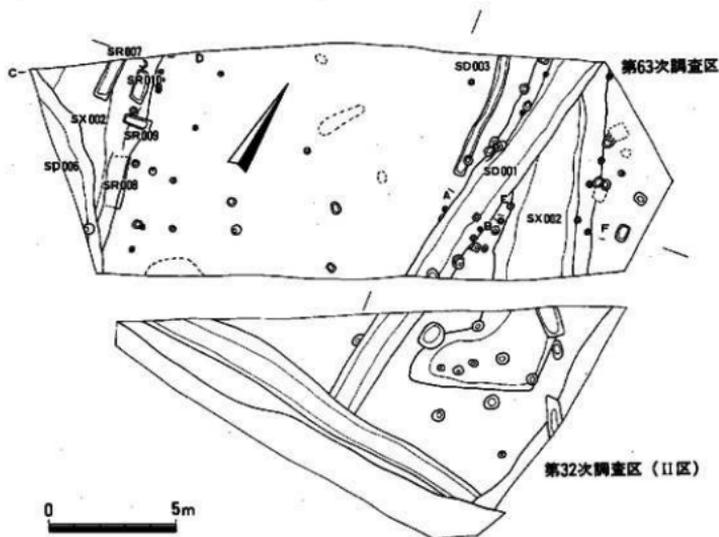
第1図 第63次調査区位置図 (1/1,000)

II 調査報告

1. 調査概要

本章で報告する第63次調査区は博多区那珂1丁目792-1に所在し、調査前は標高約9.0mを測る平地（畑地）であった。本調査区は那珂遺跡群のほぼ中央に占地する那珂八幡古墳の前方部南西に位置する。遺構は表土下数10cmの烏朽ローム上面で検出した。その遺構面は調査区東端で標高8.5m、西端で8.7mを測り、東側から西側へ向かって緩い傾斜を有するが、上層に遺物包含層は遺存しない。今回検出した主な遺構は弥生時代後期と考えられる土墳墓1基、古墳時代前期の方形周溝墓1基、古代前半の溝1条、中世の土墳墓1基、溝1条である。なお、前述した様に本調査区南東側に隣接する道路では第32次調査が実施されている。第2図には同調査区II区の遺構全体図を合わせて掲載している。また、この道路（第32次調査区）を挟んだ南東側には先に報告した第62次調査区が位置する。

今回の調査は平成9年6月30日より重機による表土剥ぎから開始し、廃土は申請地内の調査対象外である建物建築部分に仮置きした。翌日から遺構検出、掘下げを実施した。遺構番号は001からの3桁の通し番号を遺構の種類なく付しており、番号に欠番はあるが、重複はない。以下の報告にあたって原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号を組み合わせて記述する。なお、調査は遺構実測、写真撮影終了後の同年7月31日に重機による埋め戻しおよび器材撤収を行い、完了した。調査は申請面積772.99㎡のうち、先述した駐車場地下げ部分225.0㎡を対象としたが、実際の調査面積は214.0㎡である。



第2図 第63次調査区全体図 (1/200)

2. 遺構と遺物

溝 (SD)

SD001 (第2・3区)

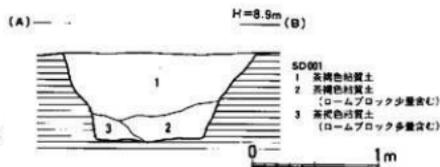
調査区の東側に位置する南北方向の溝で、SX002を切る。方位をN-5°Eに有する。この溝は第62次調査SD032、第32次調査SD2002の延長で、幅1.5~2.2m、深さ0.7~0.8mを測り、断面は逆台形を呈する。溝底の標高は7.9~8.0mを測り、ほぼ

平坦である。南側の第62次調査区SD032とその標高を比較すると、北側への緩い傾斜を有するものと考えられる。出土遺物には土師器、須恵器の他に瓦がある。瓦は平瓦、丸瓦を主体とし、軒瓦は1点のみであった。遺物の取上げにあたってはおおよそ土層図の1層部分を2分し、上層、中層遺物、ロームブロックの混じる2・3層を下層遺物としたが、下層出土は少量で、上中層が大半を占める。

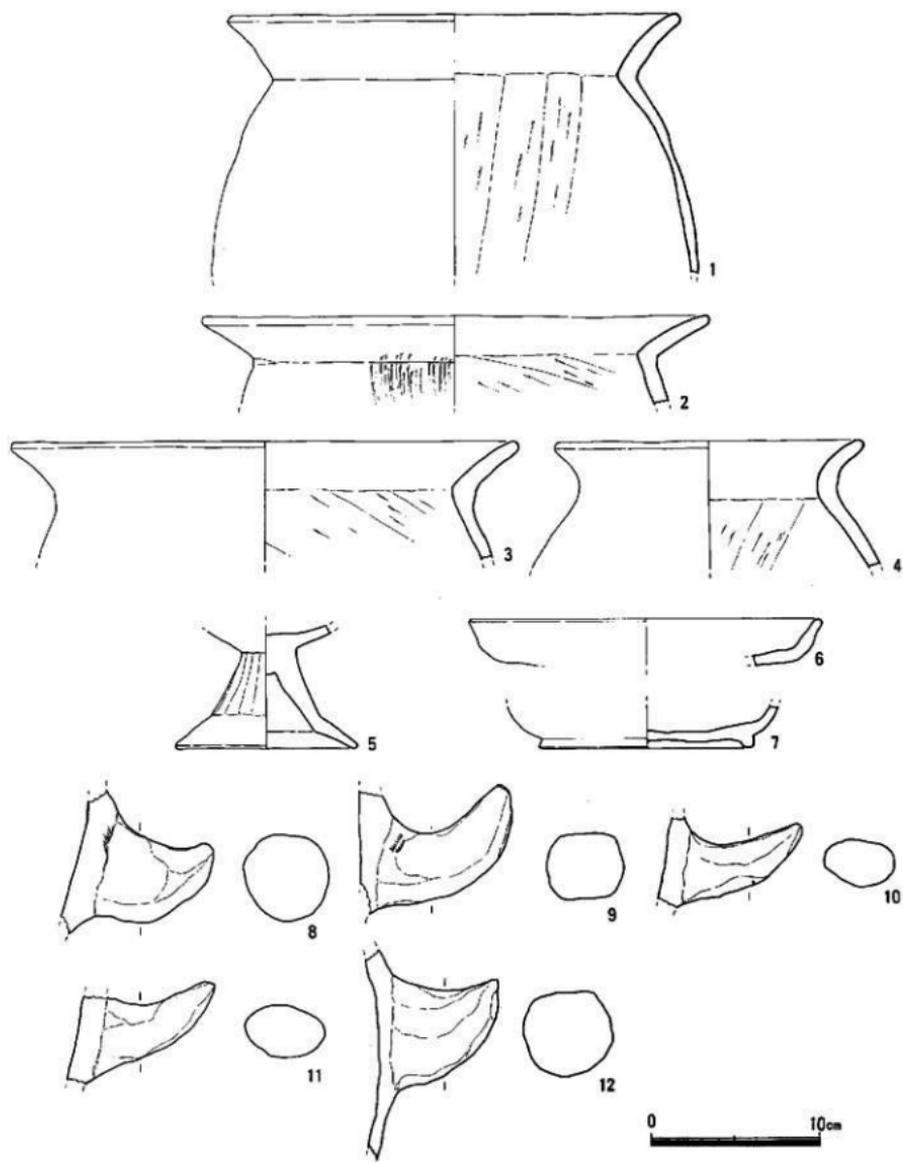
出土遺物(第4~8区) 1~12は土師器である。1~4は甕で、中層出土である。このうち1~3は内面に稜を有し、口縁部が「く」字状に折れるものである。4は丸味をもって外反する短い口縁部を有する。いずれも器面の風化がすすむが、体部内面にはへら削り、体部外面には刷毛目を施す。5は上層出土の高坪で、脚裾部は鈍く開く。脚部外面の上半には面取りがなされる。6・7は盤である。6は中層出土で、復元口径20.6cmを測り、口縁端部は丸く収める。7は断面方形の低い高台を有するもので、外底部は回転へら切り未調整である。内底部はナデ、体部はヨコナデを施す。上層からの出土である。8~12は甕の把手で、12のみ中層、他は上層からの出土である。外面は指ナデ、指オサエで調整するが、8・9には把手の基部に刷毛目が残る。内面にはへら削りもしくは刷毛目がみられる。

13~24は須恵器である。13~16は坏壺で、14は中層、他は上層からの出土である。天井部の外面は回転へら削り、内面はナデ、他はヨコナデを施す。13・14はかえりを有するもので、14にはヨコナデを加える宝珠状のつまみがつく。15・16はかえりがなく、口縁端部を折り曲げるもので、扁平なつまみを有する。17は中層出土の坏身で、外底部は回転へら切り未調整である。内底部はナデ、他はヨコナデを行う。18は復元口径26.2cmを測る盤で、下層からの出土である。口縁端部はほぼ水平な面を呈し、外底部は回転へら切り未調整である。19は上層出土で、長頸壺であろう。「ハ」字状に開く高台を有し、内面には青海波状の当て具痕、外面には格子口の叩き口がみられる。焼成はやや軟質である。20は甕で、球形の体部に外反する口縁部が付く。口縁部および体部の上半はヨコナデ、中位の内面には当て具痕、外面には格子目叩きが認められる。上層出土である。21は上層出土の甕で、やや扁球状の体部に外方に開く口縁部を有する。口縁部、肩部の外面および内面にはヨコナデ、脚部には回転へら削りを施し、肩部にはカキ目を加える。平瓶の可能性が高いが、口縁部の中心に口縁部がつく。22~24は横瓶である。22は口縁部内外面にヨコナデ、脚部外面に格子目叩きを施し、内面には青海波状の当て具痕が残る。側面の外面にはカキ目を加え、接合面の内面にはヨコナデを行う。23~24は同様の自然釉が認められ、胎土も類似することから同一個体と考えられるが、接合箇所がない。調整は22に同じで、23の内外面および24の内面の一部に前述の自然釉がかかる。23は中層出土、24は上・中層の接合資料である。

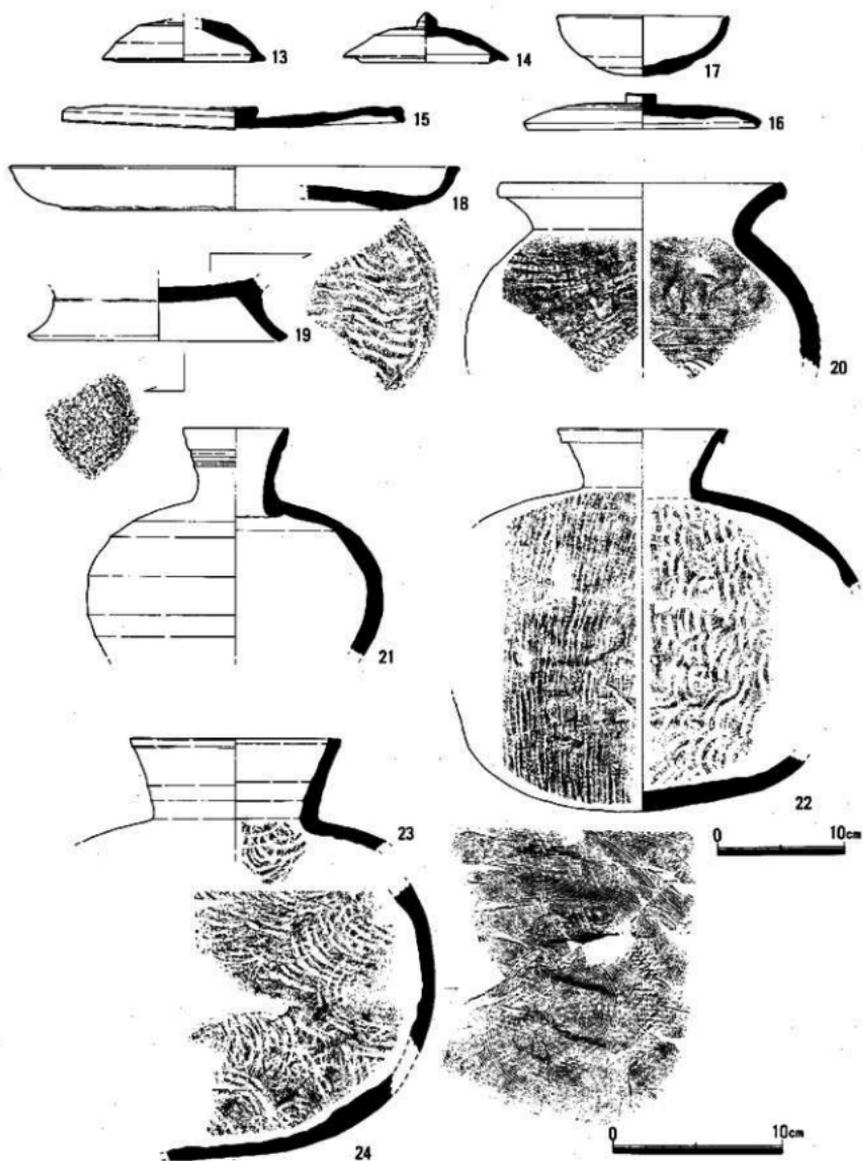
25~36は瓦である。25は土師質の軒丸瓦で、瓦当面は風化、剥落により遺存状況は不良であるが、蓮弁弁端と思われる痕跡が認められる。裏面には短い丸瓦部がつき、瓦当部との接合痕が観察できる。丸瓦凹面には僅かに布目が残る。中層からの出土である。第32次調査SC3014、第34次調査区珂八幡古



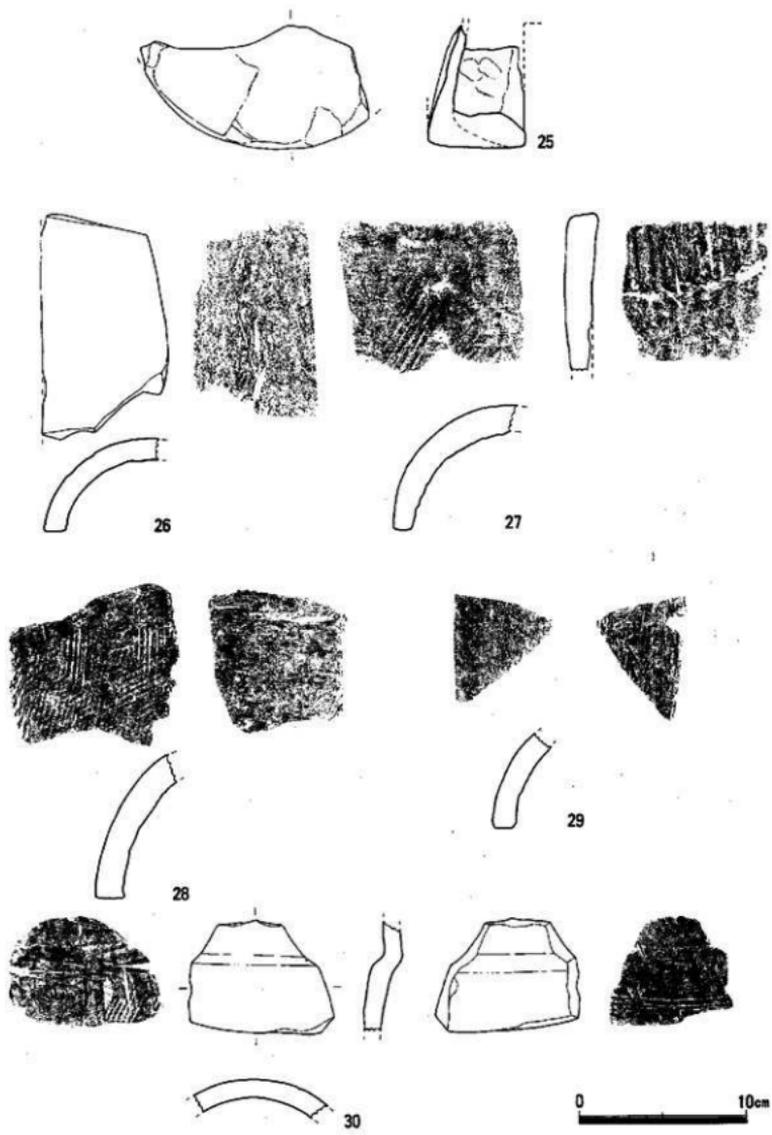
第3図 SD001土層実測図(1/40)



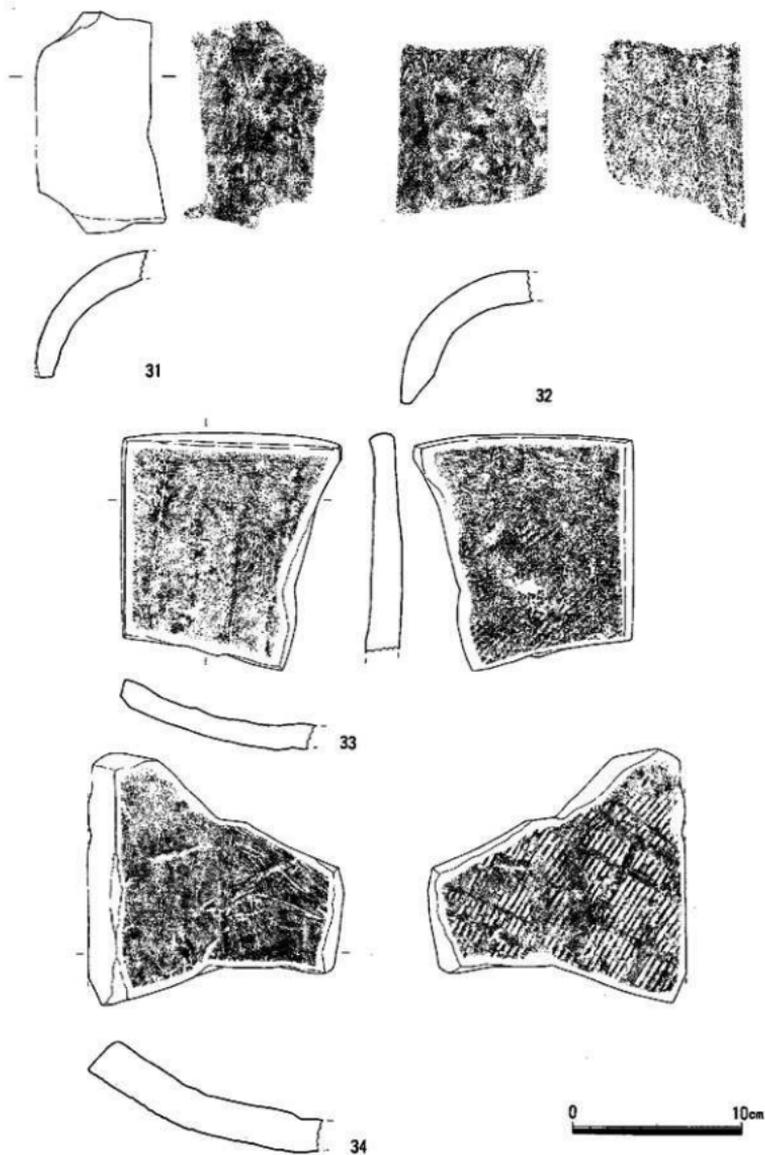
第4图 SD001出土遺物実測図1 (1/3)



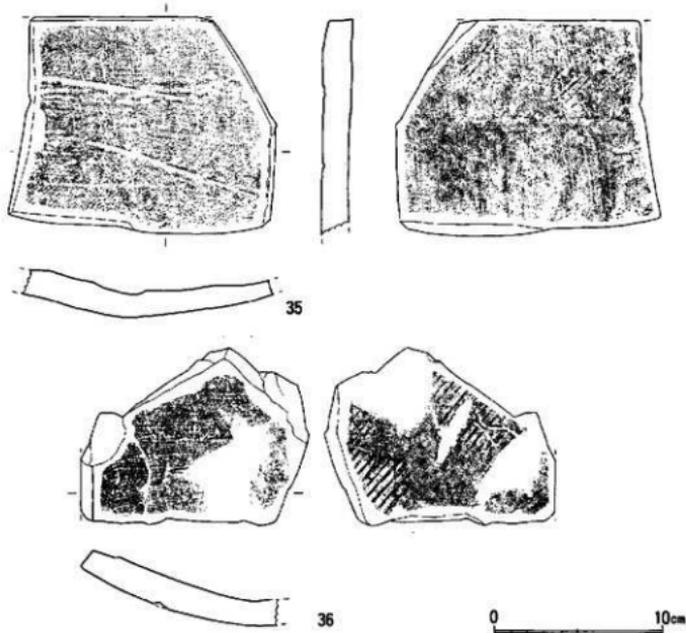
第5図 SD001出土遺物実測図2 (22は1/4、他は1/3)



第 6 图 SO001出土遺物実測図 3 (1/3)



第7图 SD001出土物实测图4 (1/3)

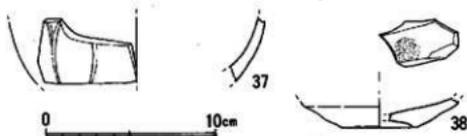


第 8 図 SD001出土遺物実測図 5 (1/3)

墳周濠でも類似した形態の出土例があり、それらには単弁七葉の蓮弁文が施される。26～32は丸瓦で、28・32は中層、他は上層からの出土である。焼成は28～30が須恵質、他は土師質である。26は凹面に模骨の痕跡が僅かに残る程度で、器面の磨滅がすすむ。27の凸面も磨滅するが、一部に平行叩き目が僅かに残る。凹面には布目、竹状模骨痕およびその結束痕が認められる。28は凸面に擬格子日の叩きを施し、粗くナデ消す。凹面はナデおよびヨコナデを行い、側面はヘラ削りする。焼成は堅緻である。29は凸面および側面はヘラ削り、凹面には布目が残る。焼成はやや不良で、赤灰色を呈する。30は玉縁式のもので、玉縁凸面はヨコナデ、胴部凸面は擬格子日叩きの後、ヘラ削り、凹面はヨコナデを主体とするが、一部に粗い擦過がみられる。29同様に焼成はやや不良である。31・32は器面の磨滅が著しいが、共に模骨痕と思われる僅かな凹凸が凹面に残る。32の凹面側縁はヘラ削り、凸面には分割線と考えられる縦方向の細線が認められる。33～36は平瓦で、いずれも土師質である。35は中層、他は上層からの出土である。33は器面が風化するが、凹面には模骨痕、布目、凸面には擬格子日叩き目がみられる。軟質の焼成である。34は厚手の器壁を有する。凹面は模骨痕および一部に布目がみられ、凸面には擬格子日叩きが施される。側面はヘラ削りを行う。35は凹面に布目、模骨痕およびその結束痕が認められる。凸面および側面はヘラ削りを施す。凸面の一部には平行叩き目が残る。36は凹面に布目、凸面には平行叩き目がみられるが、粗いナデもしくはヘラ削りを加える。側面にもヘラ削りを施す。

SD003 (第2図)

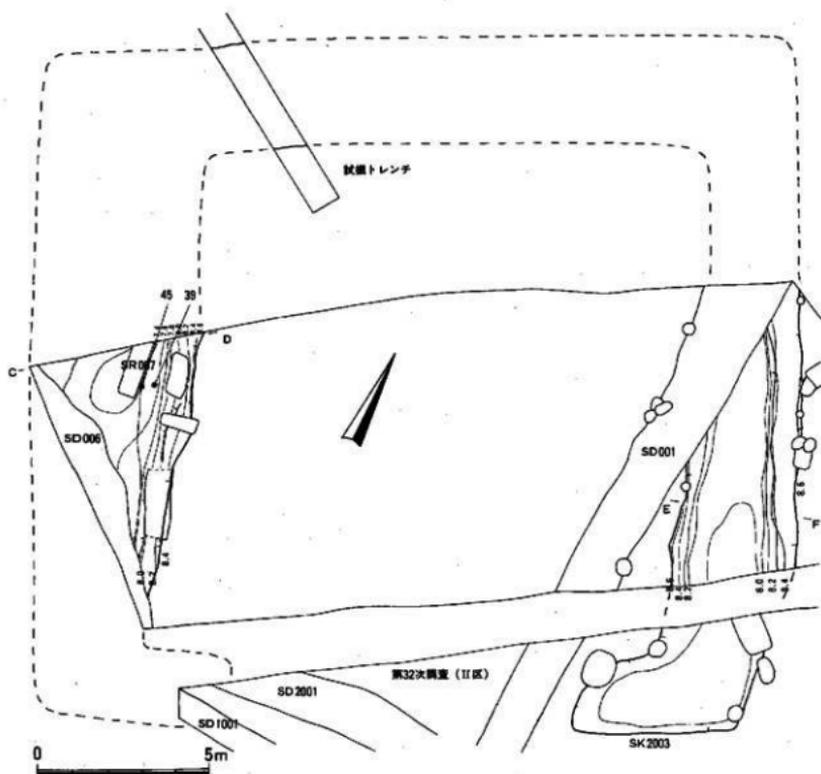
SD001の西側に隣接する南北方向の溝で、北側は緩く折れて、調査区外に延びる。延伸する方位はN-10°-Wで、断面は逆台形を呈する。幅0.4m前後、深さ0.1~0.35mを測り、溝底は北側に傾斜を有する。覆土はSD001に類似した茶褐色土を主体とし、ロームブロックが少量混じる。出土遺物には土師器、須恵器が少量あるが、いずれも細片である。



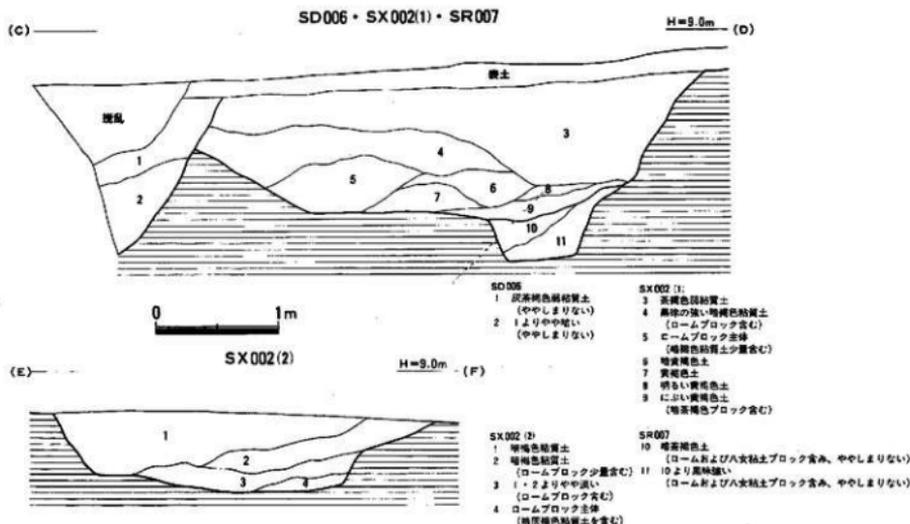
第9図 SD006出土遺物実測図 (1/3)

SD006 (第2・11図)

調査区西端で確認した溝で、SX002を切る。西側の肩は調査区外に位置する。現存での深さは約1.0mを測り、方位はN-48°-Wに有する。覆土は灰茶褐色土を主体とする。



第10図 SX002実測図 (1/150)



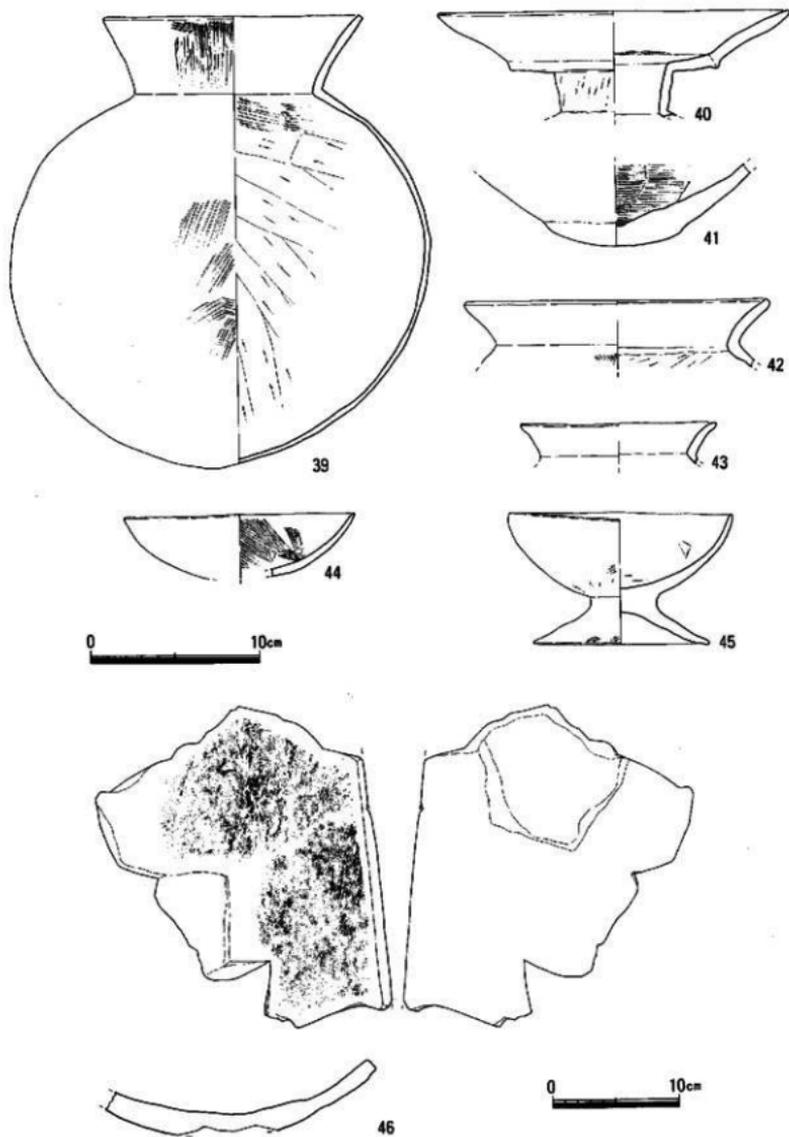
第11図 SX002、SD006、SR007土層実測図 (1/40)

出土遺物 (第9図) 37は龍泉窯系青磁碗で、外面には錆のない遼弁文を有する。濁りのある白色の胎土にオリブ灰色の釉が施される。38は唐津系陶器の皿と考えられる。内面のみに淡オリブ灰色の釉が施され、見込みには目跡が認められる。共に下層出土である。他に土師器、須恵器、白磁等が出土したが、いずれも細片で図化し得なかった。

方形周溝墓 (SX)

SX002 (第10・11図)

調査区東西端で検出した溝と試掘時のトレンチ調査および隣接する第32次調査 (II区) の成果、また、第62次調査「3.小結」で前述した第62次調査SX028との高い企画性等を勘案し、方形周溝墓であると判断した (第10図)。また、SX028と同様に東西両溝の内部は遺構密度が極めて希薄であることも盛土を有する墳墓が存在した可能性を傍証しよう。なお、埋葬主体は墳丘削平時に消失したものと考えられる。また、東西の周溝はSD001・006に切られる。この周溝墓はSX028同様に南側に開口する陸橋を有するものと考えられ、南東部の「L」字状に短く折れる部分は第32次調査で、SK2003として報告されている。また、南西部は同調査の中世溝であるSD1001・2001に切られ、遺存しないと考えられる。一部は推定であるが、周溝外縁部の幅は東西で約23m、南北で約22m、内縁部の幅は東西15m、南北15.5mを測り、やや歪みのある正方形となる。東側部分の周溝は幅3.2~3.8m、深さ約0.6mで、溝底の標高は8.0mを測る。「L」字状に折れる第32次調査区部分を含めて、ほぼ平坦である。断面は逆台形を呈するが、東側の壁面は肩から一旦傾斜の緩い掘削を行うため、壁面のほぼ中央に段を有する。覆土は暗褐色土を主体とするもので、遺構面の高い東側からの流れ込みが認められる。西側部分の周溝は西



第12図 SX002出土遺物実測図 (46は1/4、他は1/3)

側をSD006に切られるものの、土層図から幅4.5m前後が推定される。深さは0.8~1.0mを測り、北側がやや深くなる。溝底の標高は7.5~7.7mで、東側に比して深く掘削される。また、断面は東側同様に填丘側の壁面の立ち上がりは急で、外縁側は緩やかな逆台形を呈している。なお、溝底の北端部には後述するSR007が掘り込まれる。上層は(茶)褐色土を主体とするが、5~9層にはローム由来と考えられる黄褐色上の堆積が顕著であった。両溝共に出土遺物は少量であったが、東側周溝北東部では土師器壺(39)と台付鉢(45)が0.3mの間隔で東西方向に並列した正立状態で出土し、そのレベルと土層図を照合すると8層上面付近に位置するものであろう。

出土遺物 (第12図) 39~41は畿内系土師器壺である。39は復元口径15.0cm、器高27.0cmを測る。球形の体部に直線的に開く口縁部を有する。器面の剥落がすすむが、外面および体部内面の上位には刷毛目、以下にはヘラ削りが観察できる。口縁部外面の上半には刷毛目に切られる叩き目が認められる。胎土には細かい砂粒が多量に混じり、色調は灰黄褐色を呈する。40は東側周溝の2層から出土した二重口縁の壺の口縁部である。僅かに開きながら直立する頸部に水平に開く口縁下部がつき、更に大きく外反する長い口縁上部をのせる。調整は頸部外面の縦方向のヘラ削りおよび口縁上下接合部内面の刷毛目がみられる程度で、他は器面の磨減がすすむ。復元口径は20.6cmを測る。41はV様式系二重口縁壺の底部と考えられる。内面は篋状の刷毛目を施すが、外面は風化が著しい。東側周溝の1層出土である。42~43は土師器甕である。42は復元口径17.6cmを測り、胴部内面にはヘラ削り、口縁部にはヨコナデを施し、僅かに内面端部が窪む。外面は胴部の一部に刷毛目が認められる程度で、器面が風化する。西側周溝の上層出土である。43は東側周溝の2層から出土した小形の甕で、復元口径11.4cmを測る。内外面ともに器面風化により調整は不明である。44は土師器鉢で、内面には刷毛目を施す。外面は器面が風化するが、ヘラ削りと思われる擦過が観察できる。西側周溝の上層出土である。45は前述した台付鉢で、鉢部と脚部の一部を欠失する。他の個体同様に器面が風化するが、鉢部外面には刷毛目、ヘラ削り、内面には刷毛目工具痕と思われる木口痕、脚部裾には刷毛目が僅かに残る。口径13.2cm、器高は7.9cmである。46は西側周溝上層に混入した土師製の平瓦で、凹面には模骨痕がみられ、布目も僅かに残る。凸面は器面の剥落が著しい。

土壌墓 (SR)

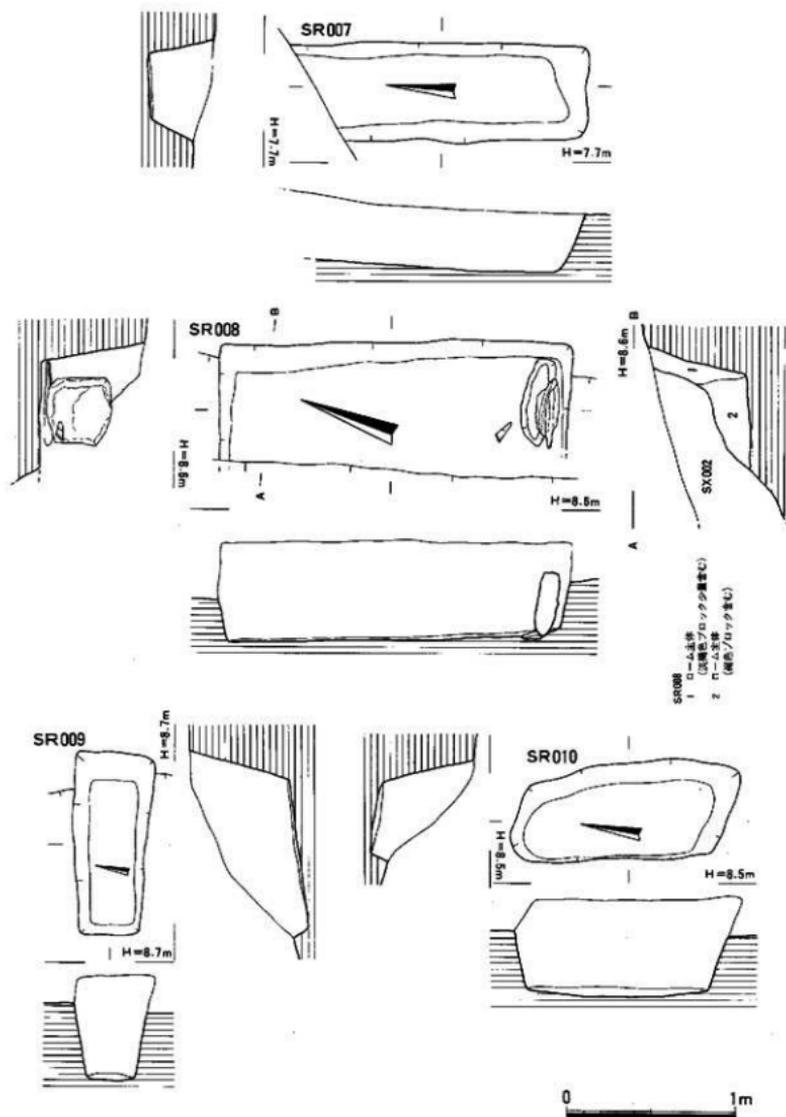
いずれもSX002西側周溝部分に位置するもので、SR008には鉄器の副葬が認められた。

SR007 (第11・13図)

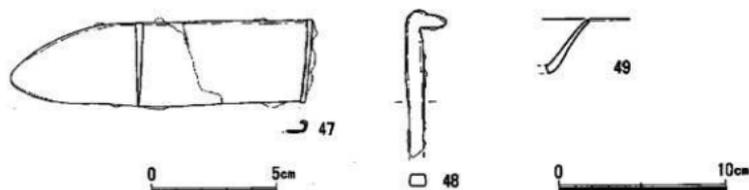
SX002の項で触れたように西側溝底東側の北端で検出した。長軸は周溝にほぼ並行し、その方位はN-11°-Wに有する。北側は調査区外に延びるため長さは不明であるが、幅0.6m、深さ0.4mを測る。底面はほぼ平坦である。土層観察(第11図)から周溝掘削と同時に掘り込まれたもので、10・11層のブロック混じりのしまりのない土を覆土と考えた。その層からの出土遺物は土師器の細片が1点のみであった。

SR008 (第13図)

SX002西側周溝に切られる土壌墓である。土層図の1・2層が覆土と考えられ、ブロックの混入が著しいローム主体の人工的埋土を呈する。長軸の方位はN-20°-Wで、長さ2.05mを測る。長軸西側壁面は周溝に切られるため、幅は不明である。底面はほぼ平坦に仕上げる。南側小口には底面を数cm掘下げ、幅40cm、高さ38cm、厚さ10cmで、先尖りの粘板岩の自然石を立てる。また、その自然石に近接した箇所では底面から数cm浮いた状態で、鉄鏝が副葬される。SX002との切り合いや鉄鏝の形態から弥生時代終末の所産と考えられる。



第13図 SR007・008・009・010実測図(1/30)



第14図 SR001・009出土遺物実測図(49は1/3、他は1/2)

出土遺物(第14図47) 完形の直刃鉄鎌で、刃先は鈍く尖る。全長11.9cm、基部幅3.3cmを測る。基部は「U」字形に短く折り返す。

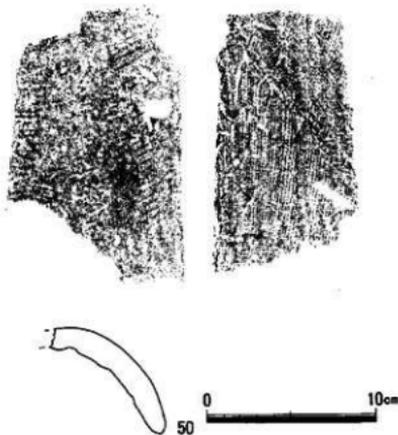
SR009(第13図)

SX002西側周溝の肩部に位置し、長軸は周溝延長方向にはほぼ直交する。その方位はN-79°-Eである。その位置や覆土の類似性から平面での両者の前後関係は確認できていない。長さ1.1m、幅0.45m、深さ0.65mを測り、底面は緩く西側に傾斜を有する。出土遺物には土師器細片数点および鉄釘1点があり、SX002を切る中世木棺墓の可能性を有するが、規模が小さく疑問も残る。

出土遺物(第14図48・49) 48は先端部を欠失する鉄釘で、頭部を横から叩いて鍵状にする。木質の付着は認められなかった。49は土師器坏と思われる。器面は磨滅し、調整は不明である。

SR010(第13図)

SX002西側周溝の肩からやや下った壁面で検出した。長軸方位はN-11°-WでSR007に並行する。やや不整な隅丸長方形で、長さ1.35m、幅0.6m、深さ0.6mを測る。SR009同様にSX002との前後関係は不明である。遺物はない。



第15図 壁面出土遺物実測図(1/3)

その他の遺物(第15図)

50は壁面清掃時に出土した土師質の行基式丸瓦である。側面および狭端面が遺存する。凸面は平行叩き目、凹面には竹状稜骨痕および布目の折り跡が認められる。

3. 小結

SR007・008・010の土墳墓群はその位置、主軸方位からSX002との強い関連が看取される。SR008はSX002に若干先行するが、墓地としての認識や規制がSX002に作用した可能性もある。なお、これらを含めた他の遺構の時期的変遷や周辺調査成果との関連性については第62次調査「3. 小結」を参照されたい。



写真2 調査区全景（南から）



写真3 調査区全景（南から）



写真4 SD001 (北から)



写真5 SD001土層 (南から)



写真6 SX002、SD006 (南から)



写真7 SX002、SD006 (北から)



写真8 SX002 (南から)



写真9 SX002 (北から)



写真10 SX002土層 (南から)



写真11 SX002遺物出土状況 (北西から)



写真12 SX002、SD006土層 (南から)



写真13 SR008 (東から)



写真14 SR008土層 (南から)



写真15 調査区上空より那珂八幡古墳を望む (西から)

那珂遺跡群 第65次調査報告

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成10年1月13日付けで九工建設株式会社代表取締役佐藤敏輔氏より福岡市教育委員会宛に博多区竹下5丁目59-3の物件(147.88㎡)に関しての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号9-2-456)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群(分布地区番号38-0085・遺跡略号NAK)に含まれており、申請地北側に隣接する都市計画道路竹下駅前線建設時には発掘調査(第19次)が行われていた。申請地は以前別件の申請(事前審査番号8-2-122)により平成8年6月27日に試掘調査を行い、表土直下で遺構を確認していた。このため埋蔵文化財課では平成9年4月16日に書類審査を行い、申請者に対して遺構が存在する旨を回答し(福市教埋2-456号)、その取扱について協議を行った。この結果社屋建設による遺構の破壊が避けられないため発掘調査を行い記録保存を図ることとした。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成9年に発掘調査、平成10年に資料整理・報告書作成を行うこととした。

発掘調査は平成10年2月12日～平成10年2月18日の期間で行った(調査番号9770)。調査対象地は147.88㎡で、調査面積は95㎡である。また遺物はコンテナ2箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、申請者である九工建設株式会社の方々にはご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 九工建設株式会社

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝(前任) 柳田純孝(現任) 調査第2係長 山口謙治

調査席務 文化財整備係 谷口真由美

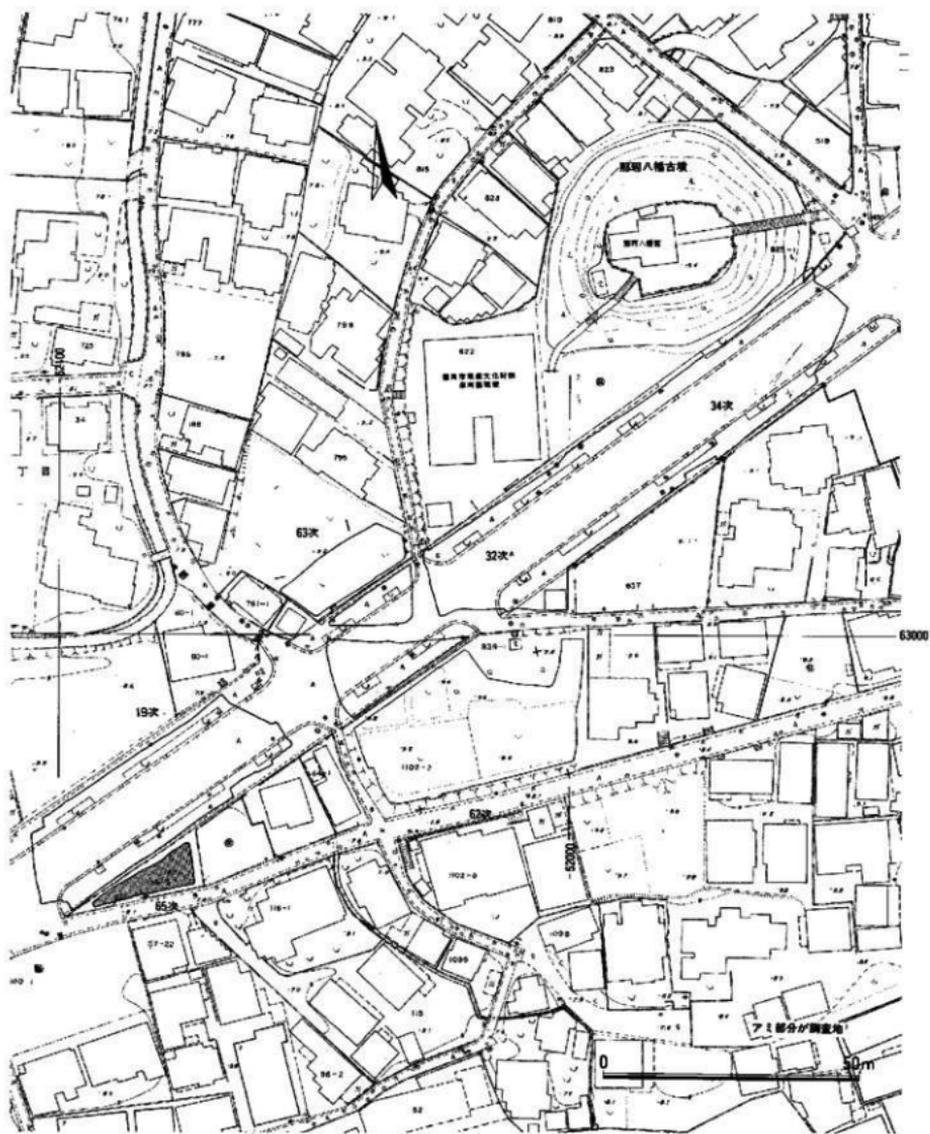
調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 村木義夫 安元尚子 小路九嘉人

II 調査の記録

1. 調査概要

対象地是那珂遺跡群の西側縁辺部にあたり、隣接する都市計画道路竹下駅前線建設にともない第19次調査が行われた地点である。申請地は調査着手前は既に整地済で標高8mであった。調査は重機による表土除去から行った。その結果表層の碎石・及び造成土を除去した鳥栖ローム層上面で遺構を検出した。遺構面標高は西側で7.8m、東側で7.5mを測り、従来の傾斜とは反対の傾斜を成しているが、これは造成時の削平によるものである。遺構面は削平・攪乱が進んでおり、遺構の遺存状況は極めて不良である。検出遺構は溝1条、ビット数基である。出土遺物は少量であるが国産陶磁器、染付が出土しており、いずれの遺構も中世末～近世に位置づけられるものと考えられる。隣接する19次調査においても遺構のあり方は比較的散漫であり、今回の結果は攪乱等の影響はあるもののこの結果を踏襲するものといえる。



第1図 第63次調査区位置図 (1/1,000)

2. 遺構と遺物

溝 (SD)

SD01

SD01は19次調査検出溝10の南側延長部分にあたる。現状の民境界に沿いほぼ南北に方位をとる。東壁は未掘であるが幅1.4m程度で深さ80cmを測る。西壁は緩やかに傾斜し、壁中位の一部に平坦面を有する。埋土は締まりのない灰褐色土を基本とし、ロームブロックを多く含んでいる。溝底標高は北端で6.55m、南端で6.45mを測る。19次調査溝10の北端では標高6.7mで、地形の傾斜とは逆方向に傾斜する事になる。遺物には陶磁器碗、瓦質・土師質の鍋・釜、瓦等が出土している。

出土遺物 (第3区)

1は青磁の椀である。釉調は淡いオリーブ色を呈する。外面に櫛状の文様を刻む。2～6は灰釉の陶器椀である。2は胎土はやや粗い灰白色で、釉調は白濁する。内面見込み及び高台畳付きに胎土目跡が各三箇所に残る。唐津か。3は淡緑色の釉が外底面～高台部分を除いて施される。胎土は灰白色である。内底面に胎土目跡が残る。4はほぼ透明な釉が施され、胎土は淡い橙色を呈する。内面に胎土目跡あり。5は胎土が茶褐色を呈する。6は胎土は赤褐色を呈し、釉調は淡い緑灰色を呈する。7はすり鉢の口縁部である。

SD02

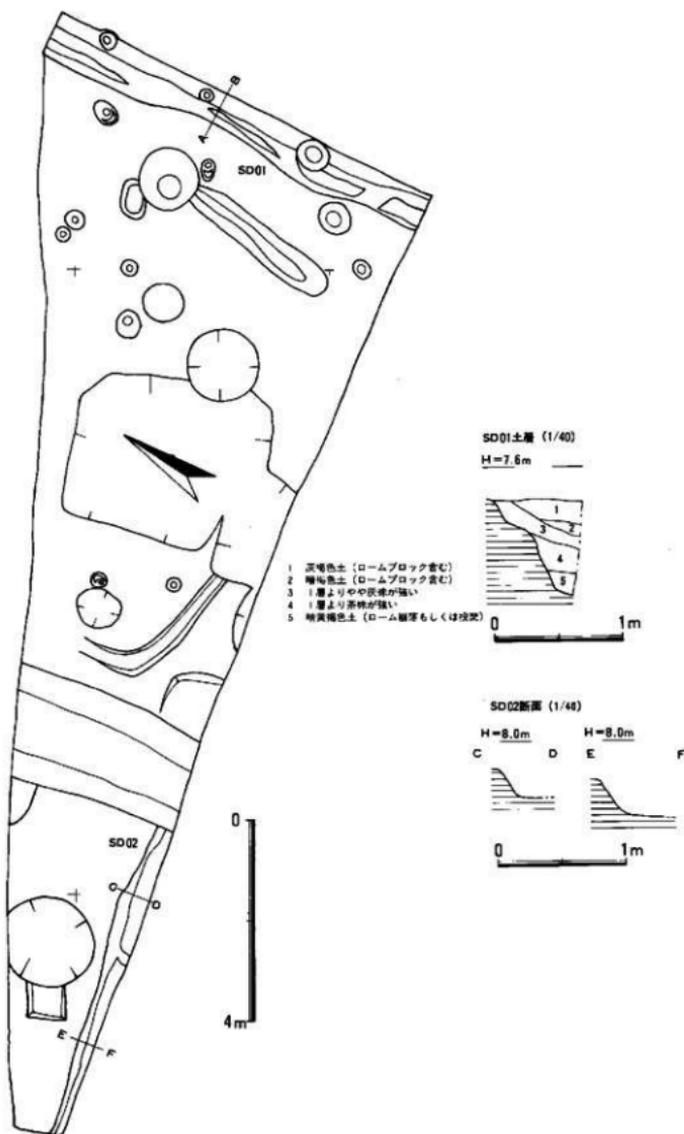
調査区西端で検出する。SD01同様に現在の境界に沿い、ほぼ東西に方位をとる。溝底標高は西側で7.6m、東側で7.4mを測り溝底にはゆるやかな凹凸がある。埋土は粗砂を含んだ褐色土である。出土遺物は僅かに土師器・須恵器の小破片を含むのみであるが、埋土から時期は近世以降に位置づけられよう。なおSD01との関連は不明である。

その他の遺物

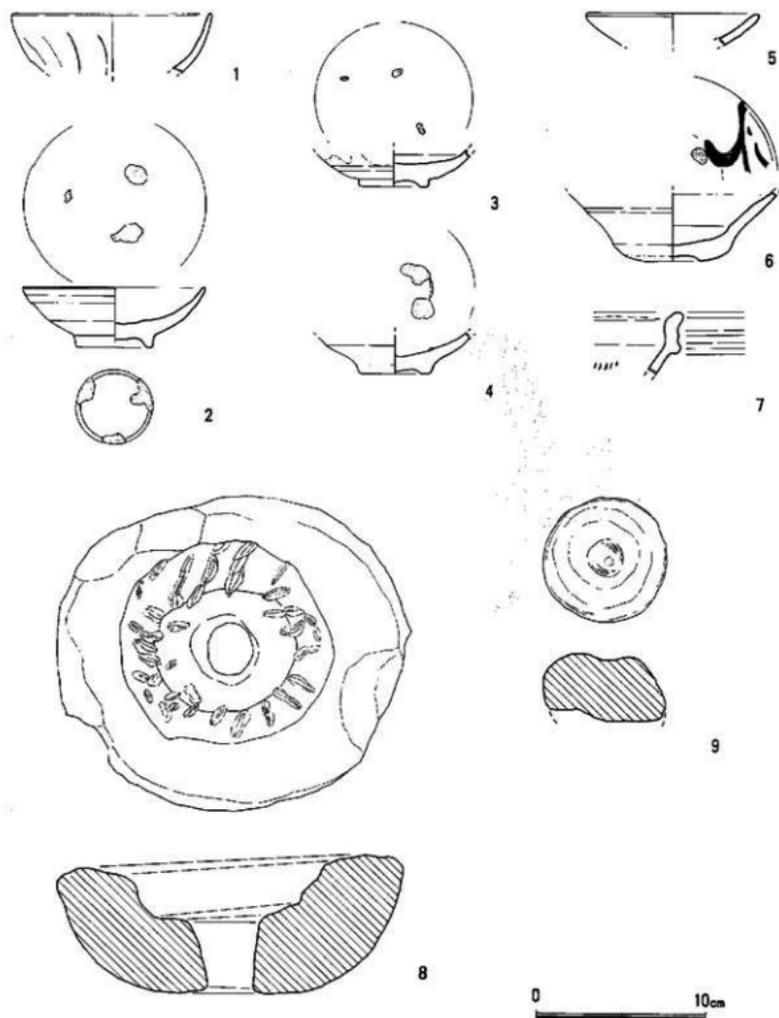
8・9は撓乱から出土した遺物である。8は砂岩製の石臼である。窪み部分には粗い削りの痕跡が明瞭に残る。上面及び下面は擦過により平滑となり、転用の可能性が考えられる。9は玄武岩製の球状の石製品で下半部を欠損する。中央部は使用によりすり鉢状に窪み、側部は細かい敲打痕が残る。

3. 小結

本調査区は調査面積が狭いうえに削平が著しいため、溝・ピット等遺構の密度も散漫であった。遺構の時期は中世末～近世に限定されるが、本調査区の西側隣に位置する54次調査地点では弥生時代中期の井戸2基が検出されていることを考えると、該期の生活遺構は削平により欠失している可能性が高いと考えられる。またSD01・02は現在の区画に沿うものであり、少なくとも当時の区画が近現代の町割りを規制するものであったことが確認できた。



第2図 調査区全体図 (1/100)、SD01・02断面図 (1/40)



第3图 出土遺物実測図(1/3)



写真1 東半全景（西から）



写真2 西半全景（東から）



写真3 SD01（南から）



写真4 SD01 土層

那珂 22

—那珂遺跡群第62・63・65次調査報告—

1999年（平成11年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8番34号
